

奈良県桜井市

史跡 纏向古墳群

纏向石塚古墳

発掘調査報告書

2012. 3. 30

桜井市教育委員会

桜井市埋蔵文化財

発掘調査報告書 第38集

奈良県桜井市

史跡 纏向古墳群

纏向石塚古墳

発掘調査報告書

2012. 3. 30

桜井市教育委員会



縄向遺跡と縄向古墳群全景（2011.4 北西より）



整備事業前の縄向石塚古墳（1986.11 北東より）



纏向石塚古墳全景（1992.3 右が北）



序

私達の桜井市は大和平野の東南部に位置し、市域の約2割を占める平野部の中央には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この大和川を挟んで南は桜井茶臼山古墳をはじめとしてメスリ山古墳、安倍寺跡、上之宮遺跡、坪井・大福遺跡、北では芝遺跡、箸墓古墳、纏向遺跡など全国的にも貴重な文化遺産が数多く知られています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力をいれておりますが、ここに報告させて頂くのは平成17年度に纏向古墳群の一つとして国の史跡指定を受けた纏向石塚古墳の調査報告であります。

纏向石塚古墳については調査主体が奈良県立橿原考古学研究所と桜井市に分かれており、これまでも各機関から数冊の調査報告書や概要報告書が刊行されておりますが、この度桜井市教育委員会では各機関によって行われたこれまでの調査成果を総括する形で本報告書の作成を計画したものであります。

本報告書の作成にあたりましては指導・助言を頂いた県立橿原考古学研究所をはじめとする多くの関係機関の方々や遺跡の重要性を御理解いただき現地調査に協力していただいた地主及び地元協力者の方々に深く御礼申し上げます。

この多くの皆様の御協力のもとに成った本書が桜井市の文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資する所となれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

平成24年3月30日

桜井市教育委員会

教育長 雀 部 克 英

例 言

1. 本書は桜井市教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所が実施した纏向石塚古墳の発掘調査報告書である。調査は35年の間に9次と長期にわたって行われており、報告の作成にあたっては調査回数ごとに行うこととした。

なお、第1・2次調査については既に正式な調査報告書が刊行されているため本書への掲載にあたっては原則として本文は誤植の訂正と体裁を整えるための編集に留め、遺構図については橿原考古学研究所の御協力のもと原図より新規作成したものと、再トレースを実施させていただいたものがある。また、第3次調査報告は本書が初出となるが、今回本報告の刊行にあたり奈良県立橿原考古学研究所より格別の御高配をいただき、本書に掲載することができたものである。

2. 発掘調査主体：桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
3. 本報告書の作成にあたっては平成17年度より整理作業に着手し、平成21～23年度には国・県による補助事業の採択を受けて奈良県立橿原考古学研究所の御協力のもと桜井市立埋蔵文化財センターおよび纏向遺跡調査事務所において調査資料の再整理と報告書の作成を行ったものである。
4. 記録による調査期間・体制は以下のとおりである。纏向遺跡の調査の中でも初期の調査も含まれており、記録を完全に確認できなかった部分もある。遺漏もあると思われるが御容赦願いたい。

なお、所属はいずれも調査当時のものである。

【昭和46年度 纏向石塚古墳第1次調査（纏向遺跡第6次）】

調査期間：昭和46年12月6日～昭和47年3月18日

調査主体：桜井市教育委員会 教育長 西村司

教育委員会総務課長 森岡靖次、学校教育課長 増田寛和、

庶務係長 浦西照正、松田清吾

調査担当：奈良県立橿原考古学研究所 技師 石野博信、技師 河上邦彦（古墳測量担当）

【昭和50年度 纏向石塚古墳第2次調査（纏向遺跡第8次）】

調査期間：昭和50年5月15日～昭和50年6月4日

調査主体：奈良県教育委員会 教育長 池田武夫

奈良県立橿原考古学研究所総務課 東森正文・畠山直久・松田真一

調査担当：奈良県立橿原考古学研究所 技師 久野邦雄・嘱託 関川尚功

なお、纏向石塚古墳第1・2次調査では以下の方々の協力と参加があった。

調査補助員：中野正敏（関西大学工学部）、三浦寿夫（甲南大学）、関川尚功・長生修三・中野雅世・加古千恵子・清原弘美・岡みどり・上田善美・滝山恵美・入江文敏・山本哲也・小口由利子（関西大学考古学研究室）、折井千枝子（関西学院大学考古学研究会）
整理協力者：辻俊和（榛原高校教諭）、泉武（立命館大学文学部）、花岡皚子（橿原考古学研究所）

調査作業員：松下駒蔵、山口京一、松下由太郎、松下ミツエ、吉田チエノ、谷口チエノ、谷口秋子、山口千代子、中川芳子、中川慶子、前田百合子、山口勝儀、藤田宝昭、松下明博、藤田清平、松下俊秋、溝口勝、溝口茂夫、溝口タミエ、中川ヒサエ、竹内静子、
整理作業員：竹内美栄、岡田照子、杉田八重子、南ヨシエ、
写真協力：光画園 金塚尚士

【昭和51年度 纏向石塚古墳第3次調査（纏向遺跡第10次）】

調査期間：昭和51年7月12日～昭和51年8月12日
調査主体：奈良県教育委員会 教育長 池田武夫
調査担当：奈良県立橿原考古学研究所 技師 久野邦雄・嘱託 寺沢薫
調査補助員：山本哲也・入江文敏・上田喜美・大岡まゆみ・南前千尋・文殊省三・山口徳夫・川崎裕之（関西大学）、吉村律三（近畿大学）、真鍋昌宏・今尾文昭・小山田宏一（同志社大学）、小口由利子・横尾幸枝（奈良文化女子短期大学）

【平成元年度 纏向石塚古墳第4次調査（纏向遺跡第55次）】

調査期間：平成元年4月17日～平成元年6月17日
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、教育次長 坂本昌弘、
社会教育課長 小山剛、文化財係長 萩原儀征、主任 清水眞一
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 係長 萩原儀征、主任 清水眞一
奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員 寺沢薫
調査補助員：竹林加奈子（橘女子大学OB）、江浦至希子・桜井恵（奈良大学OB）、白沢崇（関西大学）、木場幸弘（国学院大学）、桐山智義・橋本輝彦（奈良大学）
整理作業員：岡村佐智子、吉崎文子、大西静子、青木久子、藤井妙子

【平成3年度 纏向石塚古墳第5次調査（纏向遺跡第62次）】

調査期間：平成3年9月17日～平成3年11月17日
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、教育次長 平野和男、参事 北島和典、
社会教育課長 高松隆司、主幹 萩原儀征、文化財係 主任 清水眞一
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課 主幹 萩原儀征
調査補助員：岩橋孝典・松宮昌樹（奈良大学）
調査作業員：植田光男、植西靖治、平岡高雄、植西キヨ、辻カズ子、嶋岡道子
整理作業員：青木久子、佐々木聖子、嶋岡由美、藤井妙子、阪本美鈴

【平成3年度 纏向石塚古墳第6次調査（纏向遺跡第66次）】

調査期間：平成4年1月21日～平成4年3月11日
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、教育次長 平野和男、参事 北島和典、

社会教育課長 高松隆司、主幹 萩原儀征、文化財係 主任 清水眞一
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課 主幹 萩原儀征
調査補助員：岩橋孝典・松宮昌樹（奈良大学）
調査作業員：植田光男、植西靖治、平岡高雄、植西キヨ、辻カズ子、嶋岡道子
整理作業員：青木久子、佐々木聖子、嶋岡由美、藤井妙子、阪本美鈴

【平成 5 年度 纏向石塚古墳第 7 次調査（纏向遺跡第77次）】

調査期間：平成 5 年12月 2 日～平成 6 年 2 月20日
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、事務局長 澤井和彦、
社会教育課長 高松隆司、主幹 萩原儀征、文化財係 主査 清水眞一
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課 主幹 萩原儀征
調査補助員：松宮昌樹・立田理（奈良大学）
調査作業員：植田光男、植西靖治、平岡高雄、植西キヨ、辻カズ子、嶋岡道子
整理作業員：青木久子、佐々木聖子、嶋岡由美、藤井妙子、阪本美鈴

【平成 8 年度 纏向石塚古墳第 8 次調査（纏向遺跡第87次）】

調査期間：平成 8 年 7 月30日～平成 8 年11月22日
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、事務局長 渡辺実恵、事務局次長 峯嘉秀、
社会教育課主幹 萩原儀征、文化財係長 清水眞一、主任 井上紀美、
技師補 橋本輝彦、臨時職員 岩崎大介
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 技師補 橋本輝彦
調査補助員：村上薫史・松本紀代乃・小川裕子・小湊久美子・小畑佳子（奈良大学）、中村真理
調査作業員：植田光男、平岡高雄、佐野圭造、植西キヨ、辻カズ子、嶋岡道子、荻谷俊介(土舞台)
整理作業員：嶋岡由美、阪本美鈴、藤井妙子、奥田佳代子、木下理恵、
なお、本調査では調査前半期にあたる 7 月30日～8 月 9 日の調査を以下の者が担当し、これ以外
はすべて上記の体制で調査を実施している。
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課 主幹 萩原儀征 文化財係 臨時職員 岩崎大介
調査作業員：松本喜久雄、杉田栄一、山口定男、谷口英知、鳴海靖、岩田利治

【平成17年度 纏向石塚古墳第 9 次調査（纏向遺跡第144次）】

調査期間：平成17年12月27日～平成18年 3 月31日
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 中川行央、文
化財課長 森幹雄、主幹 杉本好成、文化財係主任 橋本輝彦、技師 松宮昌樹・福辻淳、
技師補 丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子、日々雇用職員 辰巳智圭子
調査担当：桜井市教育委員会文化財課文化財係 技師補 丹羽恵二、臨時職員 橋爪朝子
調査補助員：堂浦千景、西田良子、更谷綾、福西貴彦（奈良大学大学院）、相場さやか（奈良大学）、

山口寛・岩城圭吾（天理大学）

調査作業員：嶋岡辰雄、井上久幹、上田猛、宮前秀年、辻カズ子、川島利市郎、田中啓治、
高奥恵子、中西智子、宮久保吉暲、澤田巳喜雄、小南一也

整理作業員：嶋岡由美、大島郁美、井ノ本奈津子

5. 本報告書の作成にあたっては以下の方々に御指導、御協力を頂いた。記して感謝いたします。（所属は整理・報告書作成期間中の所属。敬称略）

石野博信（香芝市二上山博物館館長）、菅谷文則（奈良県立橿原考古学研究所所長）、関川尚功・西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）、奥田尚（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）、金原正明（奈良教育大学）、瀬宜田佳男（文化庁記念物課）

なお、現地調査および整理作業を通じては研究者、行政関係者、地元の方々と多くの方々から御指導・御協力を賜ったが、第1次の調査開始から本報告刊行までの期間が実に40年と長きにわたったことから、すべての方々を把握することができなかった。御芳名を省く非礼をお許し頂きたい。

6. 整理作業及び報告書の作成：本報告にかかる調査資料の整理と報告書の作成は以下の体制で行い、桜井市纏向学研究センター設立準備顧問 寺沢薫、桜井市教育委員会文化財課 橋本輝彦・丹羽恵二・木場佳子・橋爪朝子（～平成20年度まで）が主にこれを担当した。

【平成17年度】

桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 中川行央、
文化財課長 森幹雄、主幹 杉本好成、主任 橋本輝彦、技師 松宮昌樹・福辻淳、技師補 丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子、日々雇用職員 辰巳智圭子

【平成18年度】

桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 瀬川憲嗣、
文化財課長 森幹雄、主幹 杉本好成、主任 橋本輝彦・松宮昌樹、技師 福辻淳・丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子、日々雇用職員 辰巳智圭子・堤野真依

【平成19年度】

桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 瀬川憲嗣、
文化財課長 森幹雄、主幹 北浦良郎、主任 橋本輝彦・松宮昌樹、技師 福辻淳・丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子・岩城圭吾、日々雇用職員 堤野真依・西岡恵美

【平成20年度】

桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 瀬川憲嗣、事務局次長 松田清吾、

文化財課長 竹田勝彦、主幹 北浦良郎、主任 橋本輝彦・松宮昌樹・福辻淳、
技師 丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子・福家恭、日々雇用職員 西岡恵美

【平成21年度】

桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 瀬川憲嗣、事務局次長 松田清吾、
文化財課長 竹田勝彦、文化財係長 川口忠英、主査 橋本輝彦、主任 松宮昌樹・
福辻淳・丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・福家恭・金松誠・武田雄志・荻谷史穂
日々雇用職員 西岡恵美

【平成22年度】

桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 松田至功、文化財課長 竹田勝彦、
文化財係長 橋本輝彦、主査 寺田智子、主任 松宮昌樹・福辻淳・丹羽恵二、
臨時職員 木場佳子・福家恭・武田雄志・荻谷史穂、日々雇用職員 西岡恵美

【平成23年度】

桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 松田至功、桜井市纏向学研究センター設立準備顧
問 寺沢薫、事務局次長文化財課長事務取扱 竹田勝彦、主幹 川本光司、
文化財係長 橋本輝彦、主任 松宮昌樹・福辻淳・丹羽恵二、技師補 森暢郎、
臨時職員 木場佳子・福家恭・武田雄志・荻谷史穂、日々雇用職員 西岡恵美、

7. 整理作業員：各調査時における補助員・整理員のほか、今回の遺物・資料整理にあたった補助員・
整理員は以下の通りである。

大西里佳、岡田理絵子、北平太恵子、豊福恵子、西岡優美、西田千秋、山口充子

8. 本書所収の写真のうち遺構・遺物写真は基本的に各調査担当者が撮影を行っているが、このうち
第4～7次調査の遺物写真は丹羽が撮影を行った。
9. 本書で使用した座標・方位のうち、第4～8次調査は日本測地系による数値を示し、第9次調査
は日本測地系・世界測地系双方による数値を示しているが、他の第1～3次調査については任意
の地区設定によるものである。なお、レベル高はいずれもが海拔高を示す。
10. 執筆者：本書の執筆は原則として各調査の担当者が行い、文責は文末に明記している。
なお、出土石材の分析を橿原考古学研究所共同研究員 奥田尚氏に、樹種・土壌分析については
奈良教育大学 金原正明氏に、木製品の年輪年代の分析については奈良文化財研究所 光谷拓実氏
にお願いし、玉稿を頂戴した。記して感謝いたします。
11. 編集者：本書の編集は各担当者と協議のもと寺沢、橋本、丹羽、木場がこれを担当した。
12. 本書における遺物実測図の断面表現は転載となる第1・2次調査を除いて他はすべて土師器・土
師質－白、須恵器－黒、埴輪－ドット、瓦器－網目とした。
13. 本報告所載の遺物をはじめ調査記録の一切は調査次数毎に奈良県立橿原考古学研究所及び、同附
属博物館、桜井市教育委員会の各機関において保管されている。活用されたい。

目 次

序

例言

目次

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境……………（橋本） … 1

第2節 歴史的環境……………（橋本） … 2

第2章 古記録にみる纏向石塚古墳

第1節 野淵龍潜による調査……………（橋本） … 9

第3章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯と経過……………（橋本） … 13

第2節 報告書作成の経緯と経過……………（橋本） … 20

第4章 纏向石塚古墳第1・2次調査報告

第1節 現状……………（石野・久野） … 23

第2節 西側周濠の調査（第1次調査） ……（石野・久野） … 23

（1）経過…………… 23

（2）周濠内の堆積土層…………… 23

（3）鶏形木製品の出土状況…………… 27

第3節 西北側周濠の調査（第1次調査） ……（石野・久野） … 29

第4節 南側周濠の調査（第2次調査） ……（石野・久野） … 30

（1）現状…………… 31

（2）周濠内の堆積土と遺物出土状況…………… 31

（3）弧文円板の出土状況…………… 34

第5節 南側墳丘の調査（第2次調査） ……（石野・久野） … 34

第6節 まとめ……………（石野・久野） … 37

（1）周濠掘削時期と存続時期…………… 37

（2）周濠内の遺物によって古墳の築造時期を限定しうるか…………… 37

（3）纏向石塚古墳周囲の黒色粘土のおちこみは、はたして同古墳周濠なのか…………… 38

（4）纏向石塚古墳の原形…………… 38

第7節 纏向石塚古墳周濠出土の木器・木製品……………（辻） … 39

（1）信仰に関する用具…………… 39

（2）土木・建築に関する用具…………… 42

（3）用途不明の木製品…………… 44

(4) 未製品	46
第5章 纏向石塚古墳第3次調査報告	
第1節 はじめに..... (寺沢) ...	57
第2節 西区の調査(第1トレンチ)..... (寺沢) ...	58
(1) 南クビレ部の周濠の調査	58
(2) 周濠内出土の遺物とその出土状況	63
第3節 東区の調査(第2・3トレンチ)..... (寺沢) ...	69
(1) 第2トレンチ	70
(2) 第3トレンチ	70
第4節 小結－第3次調査の成果－..... (寺沢) ...	72
第6章 纏向石塚古墳第4次調査報告	
第1節 はじめに..... (寺沢) ...	101
第2節 クビレ部北側周濠の調査(第3トレンチ)..... (寺沢) ...	102
(1) 調査の概要	102
(2) 墳丘盛土の堆積状況とその時期	105
(3) 周濠の堆積状況とその時期	108
(4) 周濠内の遺物出土状況と堆積状況	109
(5) 周濠内の遺物	111
第3節 前方部北東隅の調査(第4トレンチ)..... (寺沢) ...	113
(1) 調査の概要	113
(2) 周濠北東隅の調査と出土遺物	113
(3) 中世の遺構と出土遺物	122
第4節 周辺周濠の調査..... (寺沢) ...	122
(1) 第1トレンチ	122
(2) 第2トレンチ	127
(3) 第3トレンチ	127
第5節 その他の現地調査.....	128
(1) 電気探査	(清水) ... 128
(2) ラジコンヘリによる撮影	(寺沢) ... 129
第6節 小結－第4次調査の成果－..... (寺沢) ...	129
(1) 墳形と規模について	129
(2) 築造の時期について	130
第7章 纏向石塚古墳第5次調査報告	
第1節 はじめに..... (橋本) ...	169

第2節 各トレンチの成果……………	(橋本) …	169
(1) 第1トレンチ……………		169
(2) 第2トレンチ……………		174
(3) 第3トレンチ……………		175
(4) 第4トレンチ……………		176
(5) 第5・6トレンチ……………		177
第3節 小結－第5次調査の成果－……………	(橋本) …	181
第8章 纏向石塚古墳第6次調査報告		
第1節 はじめに……………	(橋本) …	187
第2節 各トレンチの成果……………	(橋本) …	187
(1) 第1トレンチ……………		187
(2) 第2トレンチ……………		192
(3) 第3トレンチ……………		194
(4) 第4トレンチ……………		195
第3節 小結－第6次調査の成果－……………	(橋本) …	195
第9章 纏向石塚古墳第7次調査報告		
第1節 はじめに……………	(橋本) …	203
第2節 各トレンチの成果……………	(橋本) …	204
(1) 第1トレンチ……………		204
(2) 第2トレンチ……………		208
第3節 小結－第7次調査の成果－……………	(橋本) …	210
第10章 纏向石塚古墳第8次調査報告		
第1節 はじめに……………	(橋本) …	217
第2節 調査の成果……………	(橋本) …	218
(1) 検出された遺構……………		218
(2) 出土遺物……………		228
第3節 小結－第8次調査の成果－……………	(橋本) …	233
第11章 纏向石塚古墳第9次調査報告		
第1節 はじめに……………	(丹羽) …	289
第2節 調査の成果……………	(丹羽) …	290
(1) 検出された遺構……………		290
(2) 出土遺物……………		302
第3節 小結－第9次調査の成果－……………	(丹羽) …	305
第12章 分析結果		

第1節 纏向石塚古墳第4次調査周濠内堆積物の植生および環境の復原……………	
	(金原・奈良教育大学古文化財科学研究室) … 325
(1) はじめに……………	325
(2) 試料と周濠内堆積物の様相……………	325
(3) 花粉分析……………	325
(4) 花粉分析から推定される植生と環境……………	327
(5) 珪藻分析……………	328
(6) 考察とまとめ……………	330
第2節 纏向石塚古墳第8次調査における環境考古学分析 ……	(金原・古環境研究所) … 339
(1) 試料と方法……………	339
(2) 結果……………	339
(3) 考察とまとめ……………	340
第3節 纏向石塚古墳第9次調査における環境考古学分析 ……	(金原・古環境研究所) … 348
(1) 試料について……………	348
(2) 結果……………	348
(3) 考察およびまとめ……………	349
第4節 纏向石塚古墳第4次調査出土木製品の年輪年代……………	(光谷) … 358
(1) はじめに……………	358
(2) 分析結果……………	358
(3) まとめ……………	358
第5節 纏向石塚古墳第4次調査出土の岩石について……………	(奥田) … 359
第6節 纏向石塚古墳におけるレーダー探査 ……	(日本無線株式会社) … 360
(1) はじめに……………	360
(2) 調査原理……………	360
(3) 調査方法……………	361
(4) 調査結果……………	362
第13章 纏向石塚古墳の墳形復元	
第1節 纏向石塚古墳の墳形復元の変遷……………	(橋本) … 365
第2節 纏向石塚古墳の平面プラン……………	(橋本) … 367
第14章 纏向石塚古墳の築造時期をめぐって	
第1節 纏向石塚古墳の築造時期……………	(橋本) … 371
第2節 纏向石塚古墳の相対年代……………	(石野) … 371
第3節 纏向石塚古墳の築造時期について……………	(寺沢) … 373
あとがき	(橋本)
報告書抄録	

巻頭図版目次

- 巻頭図版 1 纏向遺跡と纏向古墳群全景（2011.4 北西より）
巻頭図版 2 整備事業前の纏向石塚古墳（1986.11 北東より）
巻頭図版 3 纏向石塚古墳全景（1992.3 右が北）
巻頭図版 4 纏向石塚古墳周濠出土 弧文円板

挿 図 目 次

図 1	桜井市の位置	1
図 2	桜井市の地質（註 1 文献より）	1
図 3	纏向石塚古墳と周辺の遺跡（1 / 25,000）	4
図 4	『大和國古墳墓取調書』所収の纏向石塚古墳（註 1 文献より）	9
図 5	纏向石塚古墳調査トレンチ配置図（1 / 1,000）	14
図 6	纏向石塚古墳第 1 次調査地位置図（1 / 1,000）	24
図 7	1 - 1 トレンチ平面図（1 / 400）	25
図 8	1 - 1 トレンチ平・断面図（1 / 160）	26
図 9	1 - 1 トレンチ周濠内遺物出土状況（1 / 60）	28
図10	1 - 2 トレンチ平・断面図（1 / 160）	29
図11	纏向石塚古墳第 2 次調査地位置図（1 / 1,000）	30
図12	2 - 1 トレンチ平・断面図（1 / 80）	32
図13	2 - 2 トレンチ平・断面図（1 / 80）	35
図14	2 - 3 トレンチ平・断面図（1 / 80）	35
図15	2 - 4 トレンチ平・断面図（1 / 80）	36
図16	2 - 5 トレンチ平・断面図（1 / 80）	36
図17	2 - 6 トレンチ断面図（1 / 80）	37
図18	纏向石塚古墳西側周濠 鶏形木製品実測図（1 / 3）	40
図19	纏向石塚古墳南側周濠 弧文円板実測図（1 / 2）	41
図20	纏向石塚古墳第 1 次調査出土土器実測図（1 / 3）	51
図21	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器実測図（1 / 3）	52
図22	纏向石塚古墳第 1 次調査出土木器実測図（1 ~ 8 : 1 / 6、9 ~ 12 : 1 / 3）	53
図23	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器実測図 1（1 ~ 8 : 1 / 6、9 : 1 / 8）	54
図24	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器実測図 2（1 / 6）	55
図25	纏向石塚古墳第 3 次調査地位置図（1 / 1,000）	57

図26-1	3-1 トレンチ断面図 (1/100).....	58
図26-2	3-1 トレンチ平・断面図 (1/100).....	59
図27	3-1 トレンチ後円部南側周濠 遺物出土状況図 (1/100).....	60
図28	3-1 トレンチ SK-01平・断面図 (1/20)	62
図29	3-1 トレンチ後円部南側周濠内 黒色粘土層Ⅰ出土樹幹出土状況図 (1/120).....	63
図30	3-1 トレンチ後円部南側周濠内 灰色ないし黒(暗)灰色砂礫層遺物出土状況図 (1/80)	64
図31	3-1 トレンチ後円部南側周濠部分断面図 (1/40)	65・66
図32	3-1 トレンチ後円部南側周濠内 黒色粘土層Ⅱ遺物出土状況図 (1/80)	67
図33	3-1 トレンチ周濠内立柱平・断面図 (1/20)	68
図34	3-2 トレンチ平・断面図 (1/80)	70
図35	3-3 トレンチ平・断面図 (1/80)	71
図36	3-3 トレンチ SD-02平面図 (1/40)	72
図37	纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図1 (1/3)	90
図38	纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図2 (1/3)	91
図39	纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図3 (1/3)	92
図40	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図1 (1/15)	93
図41	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図2 (1/5)	94
図42	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図3 (1/5)	95
図43	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図4 (1/5)	96
図44	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図5 (1/3)	97
図45	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図6 (1/3)	98
図46	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図7 (1/3)	99
図47	纏向石塚古墳第4次調査地位置図 (1/1,000)	101
図48	4-3 トレンチ平面図 (1/80).....	103・104
図49	4-3 a・b トレンチ断面図 (1/80)	106
図50	4-3 c・d トレンチ断面図 (1/80)	107
図51	4-3 a トレンチ クビレ部周濠内遺物出土状況図 (1/40、土器は1/8)	110
図52	4-4 トレンチ上層遺構確認状況図 (1/80).....	115・116
図53	4-4 トレンチ平・断面図 (1/80).....	117・118
図54	4-4 トレンチ導水溝遺物出土状況図 (1/40、土器は1/8)	120
図55	4-4 トレンチ前方部周濠・導水溝断面図 (1/40)	121
図56	4-1 トレンチ平・断面図 (1/80).....	123・124
図57	4-2 トレンチ平・断面図 (1/80).....	125・126

図58	4-2 トレンチ暗灰褐色砂礫層出土石槍実測図 (1/2)	127
図59	4-3 e トレンチ平・断面図 (1/80)	128
図60	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図1 (1/3)	152
図61	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図2 (1/3)	153
図62	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図3 (1/3)	154
図63	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図4 (1/3)	155
図64	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図5 (1/3)	156
図65	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図6 (1/3)	157
図66	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図7 (1/3)	158
図67	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図8 (1/3)	159
図68	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図9 (1/3)	160
図69	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図10 (1/3)	161
図70	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図1 (1/6)	162
図71	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図2 (1/6)	163
図72	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図3 (1/6)	164
図73	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図4 (12・13: 1/4、11・14~16: 1/6)	165
図74	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図5 (1/4)	166
図75	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図6 (1/6)	167
図76	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図7 (26: 1/8、27: 1/16)	168
図77	纏向石塚古墳第5次調査地位置図 (1/1,000)	170
図78	5-1 トレンチ平・断面図 (1/80)	171・172
図79	5-2 トレンチ平・断面図 (1/80)	173
図80	5-3 トレンチ平・断面図 (1/80)	175
図81	5-4 トレンチ平・断面図 (1/80)	176
図82-1	5-5・6 トレンチ平・断面図 (1/80)	178
図82-2	5-5・6 トレンチ断面図 (1/80)	179
図83	纏向石塚古墳第5次調査出土棺材実測図 (1/2)	180
図84	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物実測図1 (1/3)	185
図85	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物実測図2 (1/3)	186
図86	纏向石塚古墳第6次調査地位置図 (1/1,000)	188
図87-1	6-1 トレンチ平・断面図 (1/80)	190
図87-2	6-1 トレンチ平・断面図 (平面: 1/80・断面: 1/20)	191
図88	6-2 トレンチ平・断面図 (1/80)	193
図89	6-3 トレンチ平・断面図 (1/80)	194

図90	6-4 トレンチ平・断面図 (1/80)	196
図91	纏向石塚古墳第6次調査出土土器実測図1 (1/3)	201
図92	纏向石塚古墳第6次調査出土土器実測図2 (1/3)	202
図93	纏向石塚古墳第7次調査地位置図 (1/1,000)	203
図94	7-1 トレンチ平面図 (1/80)	206
図95	7-1 トレンチ断面図 (1/80)	207
図96	7-1 トレンチ 土坑1平・断面図 (1/20)	208
図97	土坑1出土石鏃実測図 (1/1)	208
図98	7-2 トレンチ平面図 (1/80)	209
図99	纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図1 (1/3)	215
図100	纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図2 (1/3)	216
図101	纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図3 (1/3)	216
図102	纏向石塚古墳第8次調査地位置図 (1/1,000)	217
図103	第8次調査地平・断面図 (1/160)	219・220
図104	第8次調査地平面図 (東半) (1/100)	223・224
図105	第8次調査地平面図 (西半) (1/100)	225・226
図106	8-1 トレンチ断面図 (1/80)	229・230
図107	8-2～5 トレンチ断面図 (1/80)	231・232
図108	纏向石塚古墳後円部西端での墳丘復元案 (1/160)	234
図109	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図1 (1/3)	277
図110	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図2 (1/3)	278
図111	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図3 (1/3)	279
図112	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図4 (1/3)	280
図113	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図5 (1/3)	281
図114	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図6 (1/3)	282
図115	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図7 (1/3)	283
図116	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図8 (1/3)	284
図117	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図9 (1/3)	285
図118	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図10 (1/3)	286
図119	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図11 (1/3)	287
図120	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図12 (437～447: 1/3、448・449: 1/2)	288
図121	纏向石塚古墳第9次調査地位置図 (1/1,000)	289
図122	下層遺構平面図 (1/100)	291・292
図123	トレンチ断面図 (1/80)	293・294

図124	包含層上面検出遺構 (1/140)	296
図125	石塚東古墳周濠遺物出土状況 (1/80)	297
図126	纏向石塚古墳周濠横断面 (1/50)	298
図127	方形周溝墓 1 平面図及び断面図 (1/50)	299
図128	方形周溝墓 1 遺物出土状況 (1/30)	300
図129	方形周溝墓 2 遺物出土状況及び断面図 (1/40)	302
図130	S D 159・S X 161・S K 158 平面図及び断面図 (1/40)	303
図131	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 1 (1/3)	317
図132	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 2 (1/3)	318
図133	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 3 (1/3)	319
図134	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 4 (1/3)	320
図135	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 5 (1/3)	321
図136	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 6 (1/3)	322
図137	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 7 (1/3)	323
図138	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 8 (1/3)	324
図139	纏向石塚古墳第 4 次調査における主要花粉ダイアグラム	332
図140	纏向石塚古墳第 4 次調査における主要珪藻ダイアグラム	333
図141	第 4 次調査サンプル採取地点図 (平面: 1/160・断面: 1/40)	335
図142	纏向石塚古墳第 8 次調査の第 1 トレンチ (北面) における花粉ダイアグラム	342
図143	纏向石塚古墳第 8 次調査の第 1 トレンチ (北面) における主要珪藻ダイアグラム	343
図144	纏向石塚古墳第 8 次調査の第 5 トレンチにおける花粉ダイアグラム	344
図145	纏向石塚古墳第 8 次調査の第 5 トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム	345
図146	纏向石塚古墳第 9 次調査における主要珪藻ダイアグラム 1	351
図147	纏向石塚古墳第 9 次調査における主要珪藻ダイアグラム 2	352
図148	第 8・9 次調査サンプル採取地点図 (1/80・1/50)	357
図149	纏向石塚古墳出土板材の年輪年代調査結果	359
図150	地中探査レーダーの方法	360
図151	調査区区割図 (1/1,000)	361
図152	レーダー探査の結果	362
図153	レーダーによる内部探査画像 1	363
図154	レーダーによる内部探査画像 2	364
図155	墳丘復元案 (第 4 次 1/2,000)	366
図156	墳丘復元案 (第 5 次 1/2,000)	366
図157	墳丘復元案 (第 9 次 1/2,000)	367

図158	墳丘および周濠の検出状況（1／800）	368
図159	纏向石塚古墳の平面プラン（1／1,600）	369
図160	纏向石塚古墳第8次調査墳丘盛土内下層出土土器（1／4）	371
図161	纏向石塚古墳クビレ部の遺物出土状況と出土土器	376

写真目次

写真1	昭和54年撮影の纏向遺跡北半の様子（上が北）	10
写真2	昭和54年撮影の纏向遺跡南半の様子（上が北）	11
写真3	遺物実測作業の様子	21
写真4	1－1トレンチ 西側周濠 編物出土状況	27
写真5	1－1トレンチ 西側周濠 鋤（図22－1）出土状況（東より）	27
写真6	1－1トレンチ 西側周濠 鋤（図22－3）出土状況（西より）	27
写真7	1－2トレンチ（北より）	29
写真8	1－2トレンチ東壁土層堆積状況（西より）	29
写真9	2－1トレンチ 南側周濠の調査（北西より）	31
写真10	2－1トレンチ東壁土層堆積状況（南西より）	33
写真11	円座状樹皮製品	33
写真12	天秤棒状木製品	33
写真13	天秤棒状木製品	33
写真14	鋤等（西より）	33
写真15	甕（図21－3）	33
写真16	2－2トレンチ（北より）	34
写真17	纏向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真1	336
写真18	纏向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真2	337
写真19	纏向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真3	338
写真20	纏向石塚古墳第8・9次調査の花粉・胞子・寄生虫卵	355
写真21	纏向石塚古墳第8・9次調査の珪藻	356

表目次

表1	纏向石塚古墳における既往の調査地と次数一覧	15
表2	纏向石塚古墳第1次調査出土土器観察表（1）	47
表3	纏向石塚古墳第1次調査出土土器観察表（2）	48

表 4	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器観察表 (1)	49
表 5	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器観察表 (2)	50
表 6	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (1)	74
表 7	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (2)	75
表 8	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (3)	76
表 9	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (4)	77
表10	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (5)	78
表11	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (1)	79
表12	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (2)	80
表13	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (3)	81
表14	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (4)	82
表15	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (5)	83
表16	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (6)	84
表17	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (7)	85
表18	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (8)	86
表19	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (9)	87
表20	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (10)	88
表21	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (11)	89
表22	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (1)	132
表23	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (2)	133
表24	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (3)	134
表25	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (4)	135
表26	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (5)	136
表27	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (6)	137
表28	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (7)	138
表29	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (8)	139
表30	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (9)	140
表31	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (10)	141
表32	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (11)	142
表33	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (12)	143
表34	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (13)	144
表35	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (14)	145
表36	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (15)	146
表37	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (16)	147

表38	纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表 (17)	148
表39	纏向石塚古墳第4次調査出土木器観察表 (1)	149
表40	纏向石塚古墳第4次調査出土木器観察表 (2)	150
表41	纏向石塚古墳第4次調査出土木器観察表 (3)	151
表42	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (1)	182
表43	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (2)	183
表44	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (3)	184
表45	纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (1)	198
表46	纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (2)	199
表47	纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (3)	200
表48	纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (1)	212
表49	纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (2)	213
表50	纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (3)	214
表51	『大和國古墳墓取調書』にみる墳丘高計測の精度	234
表52	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (1)	236
表53	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (2)	237
表54	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (3)	238
表55	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (4)	239
表56	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (5)	240
表57	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (6)	241
表58	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (7)	242
表59	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (8)	243
表60	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (9)	244
表61	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (10)	245
表62	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (11)	246
表63	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (12)	247
表64	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (13)	248
表65	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (14)	249
表66	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (15)	250
表67	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (16)	251
表68	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (17)	252
表69	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (18)	253
表70	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (19)	254
表71	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (20)	255

表72	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (21)	256
表73	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (22)	257
表74	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (23)	258
表75	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (24)	259
表76	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (25)	260
表77	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (26)	261
表78	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (27)	262
表79	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (28)	263
表80	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (29)	264
表81	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (30)	265
表82	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (31)	266
表83	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (32)	267
表84	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (33)	268
表85	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (34)	269
表86	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (35)	270
表87	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (36)	271
表88	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (37)	272
表89	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (38)	273
表90	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (39)	274
表91	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (40)	275
表92	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (41)	276
表93	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (1)	308
表94	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (2)	309
表95	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (3)	310
表96	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (4)	311
表97	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (5)	312
表98	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (6)	313
表99	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (7)	314
表100	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (8)	315
表101	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (9)	316
表102	纏向石塚古墳第4次調査における花粉分析結果	334
表103	纏向石塚古墳第8次調査における花粉分析結果	346
表104	纏向石塚古墳第8次調査における珪藻分析結果	347
表105	纏向石塚古墳第9次調査における花粉分析結果	353

表106	纏向石塚古墳第9次調査における珪藻分析結果	354
表107	2～4世紀の纏向様式土器編年と古墳（大和）	372

墳古塚石向纏

発掘調査報告書

本文編

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

桜井市は奈良盆地の東南部とその背後に続く大和高原・宇陀山地・吉野山地の一部より構成されている（図1）。人口約61,000人、面積98.93km²の市域の約80%は山地であり、平地は北西部の20%に過ぎないが、市域のほぼ中央では春日山断層と初瀬構造谷が交差し、巻向山地塊崖・御破裂山地塊崖が盆地に面する西北斜面にはいくつかの溪谷が形成されている¹⁾（図2）。

また、平地部にはこれらに源を発する初瀬川や寺川・米川・纏向川・栗原川など多くの河川が流れ、これらによって形成された扇状地の自然堤防上を主として多くの遺跡が展開している。

纏向石塚古墳の所在する纏向遺跡は市域北西部の標高60～90mの扇状地上に位置する。現在考えられている遺跡の規模は東西約2km、南北約1.5kmであり、遺跡の主要な部分は纏向川と烏田川に挟まれた地域に集中するものの、遺跡はさらに北へと大きく広がっていくものと想定される。

さて、遺跡の内部には旧河川により形成された多くの微高地があるが、纏向石塚古墳は太田北微高地の中央よりやや西、標高89m前後の扇状地上に立地し²⁾、周辺には纏向石塚古墳と同じ3世紀代の古墳として注目される勝山古墳・矢塚古墳・東田大塚古墳などの出現期古墳が点在している。（橋本）

【註記】

1) 西宮克彦「地質」『桜井市史下巻』桜井市役所1979

2) 安井隆浩「奈良県纏向遺跡の立地基盤と古地形環境」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会2006

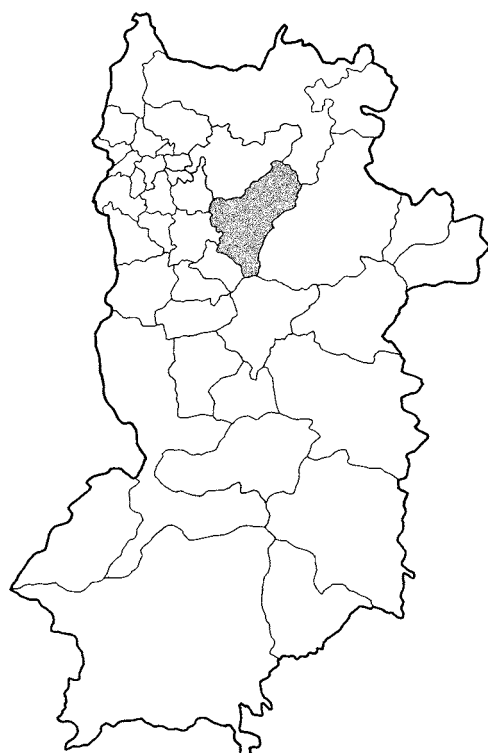


図1 桜井市の位置

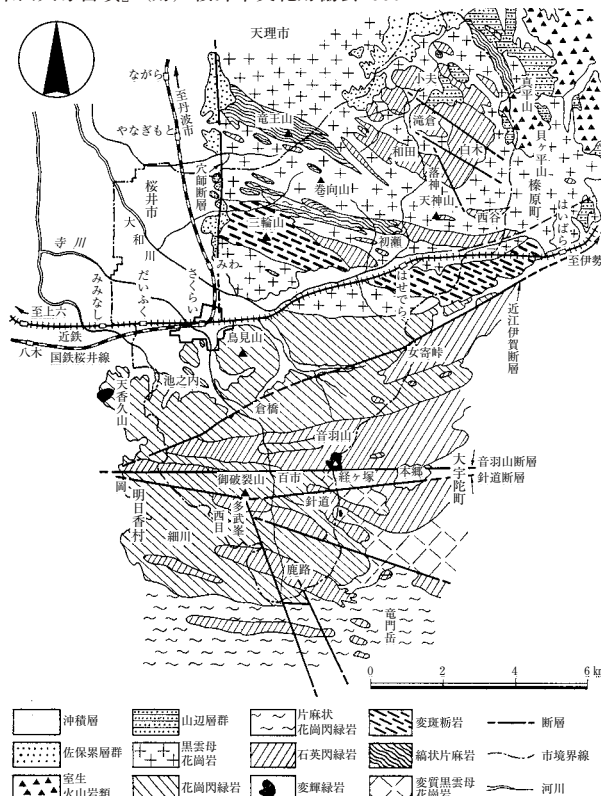


図2 桜井市の地質（註1文献より）

第2節 歴史的環境

(1) 桜井市域の遺跡

以下、市域における遺跡の状況について概観していくこととしたい(図3)。

【旧石器時代】

桜井市内の旧石器時代は幾つかの遺跡において遺物の出土が確認されている。阿部中山遺跡¹⁾や吉備池遺跡²⁾・芝遺跡³⁾(41)の調査ではナイフ形石器が、谷遺跡⁴⁾(76)では翼状剥片が出土しているものの、遺構に伴うものは皆無である。

【縄文時代】

縄文時代草創期の遺物は黒崎地区⁵⁾と檜原地区⁶⁾から採集されている有舌尖頭器が一点ずつあるのみで、直接遺跡に伴うものではない。

早期の遺物は初瀬小学校の建替えに際して行われた初瀬遺跡の調査で出土している。小さな破片であるが、山形文を施した尖底土器になると考えられ、市内では最古の土器である。

前期になると遺跡数は少ないが、三輪遺跡⁸⁾(59)や纏向遺跡(12)内の箸中地区所在の箸中遺跡では北白川下層Ⅱ式から前期終末の大歳山式までの比較的まとまった量の遺物が出土している。^{9・10)}

中期の遺構・遺物は少なく、芝遺跡(41)と高家遺跡があるのみである。高家遺跡では船元式系の縄文と大歳山式類似の刻み目突帯を持ち、大型竹管状円形刺突文を持つものや、船元式系の縄文を持ち、里木式系の条痕に円形刺突文を持つものに大別されている。¹¹⁾

後期になると市内でも遺構や遺物の確認例が増加する。東新堂遺跡(62)や、上之庄遺跡(63)・纏向遺跡(12)・安倍寺遺跡・吉備遺跡(73)・栗殿遺跡(71)などでは溝や流路、土器棺墓などが検出されており、纏向遺跡では所属時期は判然としないが、後期～晩期のものと考えられる土偶の頭部が出土している。¹²⁾

晩期の遺跡としては纏向遺跡(12)や栗殿遺跡(71)・三輪遺跡(59)・上之庄遺跡(63)・大福遺跡(66)・芝遺跡(41)・茅原遺跡(46)などで遺物の出土が確認されている。纏向遺跡では滋賀里3式期の深鉢とともに石棒片などが出土している。¹³⁾後期に比べると遺跡数は増加の傾向にあるが、遺構に伴わないか、伴っても土器棺が数基確認されている程度である。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡では前期から後期へと一定の規模を保ちつつ継続して営まれる拠点集落として、大福遺跡(66)と芝遺跡(41)があるが、この他にも小規模な集落遺跡の確認例は多い。前期の遺物が出土する遺跡には先述した大福遺跡・芝遺跡のほかに東新堂遺跡(62)や上之庄遺跡(63)・豊前遺跡(39)・脇本遺跡・大福池遺跡(67)などがあるが、殆どが包含層や土坑などからの出土で遺物量は少なく、小規模な集落ばかりである。

中期の主要な遺跡には芝遺跡(41)・吉備遺跡(73)・大福遺跡(66)があるが、遺物のみが出土・採集されている遺跡として三輪遺跡(59)・黒田池遺跡(72)・脇本遺跡などがある。

後期の遺跡には袈裟櫛文銅鐸¹⁴⁾や細型銅剣¹⁵⁾などが出土している大福遺跡(66)を中心として、吉備遺

跡（73）・芝遺跡（41）、小規模ながら纏向遺跡（12）・谷遺跡（76）・横内遺跡（74）・安倍寺遺跡・能登遺跡・生田遺跡・脇本遺跡などが確認されている。

【古墳時代】

古墳時代前期初頭になると所謂纏向遺跡（12）が出現し、弥生時代の拠点集落であった大福遺跡や芝遺跡だけでなく、他の小規模集落も殆どが姿を消すようである。庄内0式期から布留0式期の段階には大福遺跡（66）や東新堂遺跡（62）・城島遺跡（78）・上之宮遺跡などで当該期の遺構や遺物の出土があるが、集落と呼べるほどの規模があるのか否かもはっきりとしない程度のものである。

纏向遺跡以外の場所で前期の遺構が顕著になるのは布留1式期以降のことであり、纏向遺跡の縮小に反比例して大福遺跡（66）や上之庄遺跡（63）・安倍寺遺跡・大西遺跡（40）・河西遺跡・忍阪遺跡などの遺跡が出現している。これらの集落はいずれもごく小規模なものであるが、上之庄遺跡（63）では布留2式期の滑石や緑色凝灰岩を使った玉造遺構が検出されている。遺物には原石や砥石などのほかに緑色凝灰岩製管玉や滑石製勾玉・管玉・車輪石・有孔円盤・白玉などがあり、滑石製品の玉造遺跡としては最古級のものと言えよう¹⁷⁾。前期古墳には纏向石塚古墳（1）・矢塚古墳（3）・勝山古墳（2）・ホケノ山古墳（7）・東田大塚古墳（4）・南飛塚古墳（5）・メクリ1号墳（8）・箸墓古墳（6）などで構成される纏向古墳群のほかに、初瀬川より南には桜井茶白山古墳（80）・メスリ山古墳・池ノ内古墳群などがある。纏向遺跡に隣接する天理市域には柳本古墳群が展開し、渋谷向山古墳（16）や行燈山古墳（25）・天神山古墳（29）・櫛山古墳（24）・柳本大塚古墳（14）石名塚古墳（33）などがある。この古墳群には馬口山古墳などの3世紀に遡る可能性が指摘されている古墳も含まれるが、基本的には纏向古墳群に後出する段階のものが殆どである。

中期にはいと泊瀬朝倉宮の候補地とされる脇本遺跡を除くと、忍阪遺跡や大西遺跡（40）・纏向遺跡（12）・茅原遺跡（46）・河西遺跡などで単発的に遺構や遺物が検出されるばかりで、集落と呼べるほどのまとまった規模を持つものは極めて少ない。なお、この時期の市域の遺跡群を特徴づけるものには三輪山の山頂から山麓一帯に広がる磐座祭祀（51・52・53・55）が挙げられよう。この祭祀は斑糲岩の巨石を対象に土師器や須恵器などのほか、土製や滑石製の玉や形代を供献して行われるもので、5世紀から7世紀にかけて盛んに行われていたようであるが、近年の上之庄遺跡における滑石製玉造遺跡の発見などによってその開始時期が4世紀中頃まで遡る可能性も指摘されているものである。

三輪山祭祀の隆盛とともに、山麓にはこの祭祀を司掌したと考えられる大神氏の一族が居住していたようで、三輪遺跡では神撰田跡と考えられる水田遺構が検出され¹⁸⁾、茅原遺跡では掘立柱建物や井戸などが検出されている¹⁹⁾。古墳では全長約80mの帆立貝形前方後円墳である茅原大墓古墳（44）やツヅロ塚古墳が築かれ、後期まで連続して築かれている。この他、古式の家形石棺を持つ全長約40mの前方後円墳である兜塚古墳、銀製中空勾玉や金環の出土している外鎌山北麓古墳群（82）の慈恩寺1号墳、石見型や盾形・靱形などの木製埴輪が出土した全長34.7mの帆立貝形前方後円墳・小立古墳、窮窿式石室を持つと考えられる桜井児童公園2号墳などがある²⁰⁾ほか、鳥見山古墳群（81）では径10m～20m程度の円墳や方墳が確認されているが、規模・質ともに前期段階の所謂王墓クラスのものととはか²¹⁾

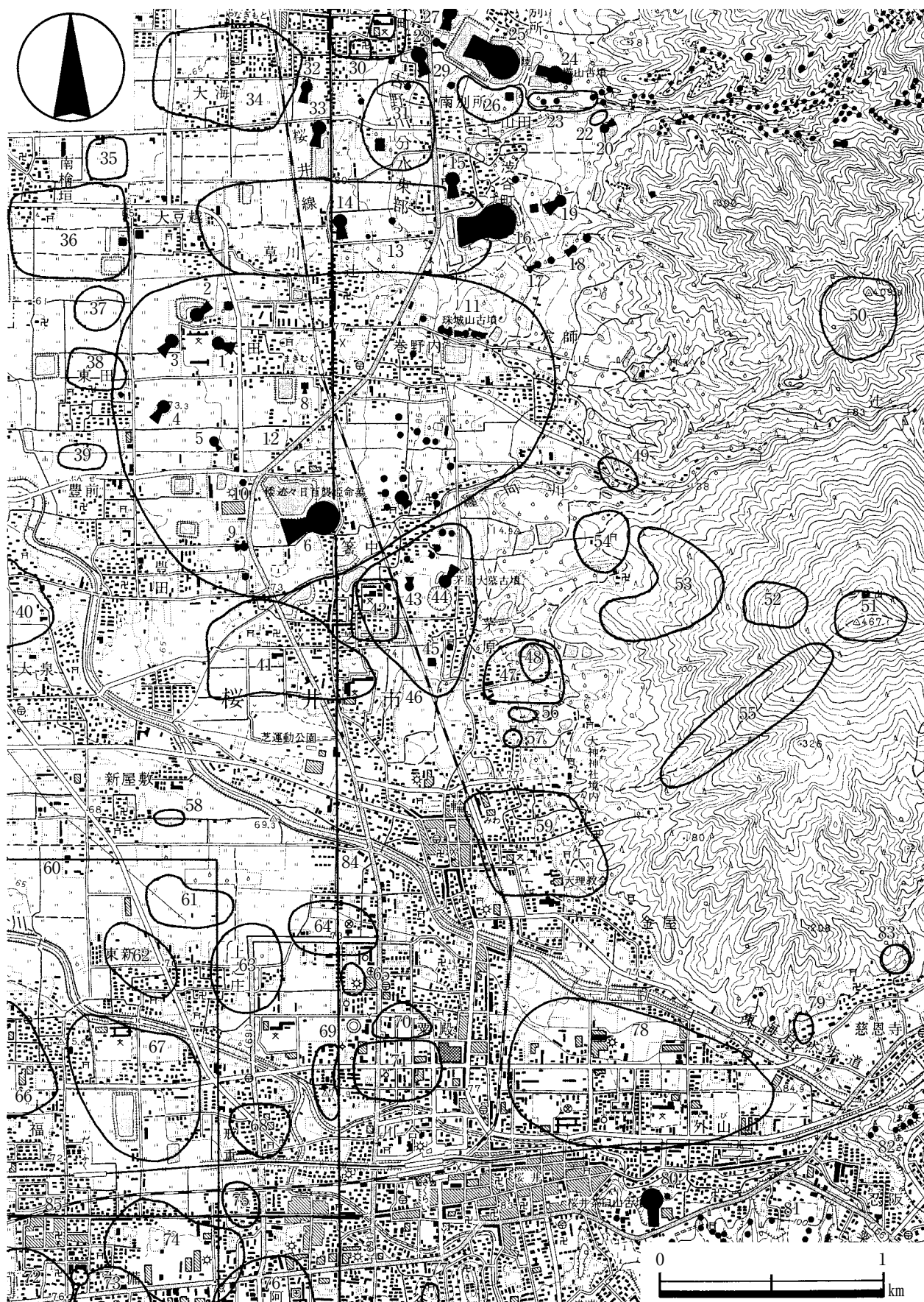


図3 纏向石塚古墳と周辺の遺跡 (1/25,000)

け離れたものとなっている。

後期になっても三輪山祭祀と結びついた磐座祭祀や古墳・集落遺跡などの大神氏関連遺跡の痕跡が多い。集落では茅原遺跡（46）が中期に引き続いて居住地として選ばれ、掘立柱建物や井戸などが確認されている²³⁾し、大神神社摂社若宮社（57）の発掘調査では6世紀前半期の居館遺構が検出され、大神氏の居館ではないかと考えられている²⁴⁾。また、中期に築造された茅原大墓古墳・ツヅロ塚古墳に続く毘沙門塚古墳（43）・馬塚古墳・茅原狐塚古墳（45）などがあり、築造の順序も茅原大墓古墳の5世紀前半以来、ツヅロ塚古墳の5世紀後半、毘沙門塚古墳の6世紀前半、馬塚古墳の6世紀後半、茅原狐塚古墳の6世紀末から7世紀初頭と連綿と築かれていることが解る。墳形・内部構造などから見ると、茅原大墓古墳の築造を契機としてツヅロ塚古墳・毘沙門塚古墳と3基の前方後円墳が続いた後、弁天社古墳・馬塚古墳、そして茅原狐塚古墳と家形石棺をもつ3基の横穴式石室が続いている²⁵⁾。市内の他の遺跡に目を向けてみると鍛冶や玉造関連遺構が数多く確認されている谷遺跡²⁶⁾（76）や河西遺跡・安倍寺遺跡・上之宮遺跡・纏向遺跡（12）・脇本遺跡などの規模の小さなものが数多く散在していたようである。古墳については先述した三輪山山麓の古墳群以外に纏向遺跡内では径10m～20m前後の小規模な古墳が数多く存在していたようで、現在確認されている約20基の古墳以外にも集落内部の調査で埋没古墳が5基確認されており²⁷⁾、さらにその数は増えるものと考えられる。また、市域の南部には高家古墳群や桜井児童公園の古墳群・鳥見山古墳群（81）・外鎌山北麓古墳群（82）・高田古墳群など数多くの群集墳が丘陵上に築かれる他、赤坂天王山古墳や越塚古墳・ムネサカ1・2号墳・谷首古墳・艸墓古墳・文殊院東古墳・文殊院西古墳といった後・終末期古墳や、磚槨墳としては花山塚東古墳・花山塚西古墳・外鎌山北麓古墳群（82）の忍坂8・9号墳・舞谷1～5号墳など、特色ある多くの古

★図3 遺跡名一覧

1. 纏向石塚古墳	23. 遺物散布地（弥生後～古墳前）	45. 茅原狐塚古墳	67. 大福池遺跡
2. 勝山古墳	24. 櫛山古墳	46. 茅原遺跡	68. 戒重城跡
3. 矢塚古墳	25. 行燈山古墳	47. 箕倉山遺跡	69. 遺物散布地（古墳中～鎌倉）
4. 東田大塚古墳	26. 山田遺跡	48. 箕倉山城跡	70. 遺物散布地（古墳後～平安）
5. 南飛塚古墳	27. アンド山古墳	49. 車谷遺跡	71. 粟殿遺跡
6. 箸墓古墳	28. 南アンド山古墳	50. 穴師山城塞跡	72. 黒田池遺跡
7. ホケノ山古墳	29. 天神山古墳	51. 奥津磐座	73. 吉備遺跡
8. メクリ1号墳	30. 柳本城跡	52. 中津磐座	74. 横内遺跡
9. イヅカ古墳	31. 遺物散布地（古墳後～平安）	53. 辺津磐座	75. 戒重遺跡
10. ビハクビ古墳	32. ノベラ古墳	54. 桧原遺跡	76. 谷遺跡
11. 珠城山古墳群	33. 石名塚古墳	55. 禁足地裏磐座群	77. 谷城跡
12. 纏向遺跡	34. 柳本遺跡	56. 馬場遺跡	78. 城島遺跡
13. 遺物散布地（弥生～古墳）	35. 遺物散布地（古墳）	57. 大神寺跡	79. 遺物散布地
14. 柳本大塚古墳	36. 檜垣遺跡	58. 新屋敷遺跡	80. 桜井茶臼山古墳
15. 上の山古墳	37. 遺物散布地（弥生）	59. 三輪遺跡	81. 鳥見山古墳群
16. 渋谷山古墳	38. 遺物散布地（古墳～平安）	60. 大藤原京跡	82. 外鎌山北麓古墳群
17. 立石古墳	39. 豊前遺跡	61. 上之庄遺跡	83. 慈恩寺跡
18. 立子塚古墳	40. 大西遺跡	62. 東新堂遺跡	84. 上ッ道
19. シウロウ古墳	41. 芝遺跡	63. 上之庄遺跡	85. 横大路
20. ヲカタ塚古墳	42. 芝村陣屋跡	64. 三輪松之本遺跡	
21. 龍王山古墳群	43. 毘沙門塚古墳	65. 遺物散布地（古墳後～平安）	
22. 遺物散布地（古墳後）	44. 茅原大墓古墳	66. 大福遺跡	

墳が築かれている。

【飛鳥時代】

この時代の主要な遺跡には上之宮遺跡や城島遺跡（78）・脇本遺跡・能登遺跡・阿部中山遺跡などの居館遺構あるいは公的な施設と考えられている遺跡群と、谷遺跡（76）・芝遺跡（41）・安倍寺遺跡などの一般的な集落、天皇家や豪族によって建立された山田寺・安倍寺・吉備池廃寺などの寺院跡が挙げられよう。この内、居館遺構については上之宮遺跡では6世紀後半から7世紀はじめにかけての園池遺構や四面庇を持った大型掘立柱建物などが検出されており、聖徳太子の「上宮」の有力な候補地と考えられている²⁸⁾し、城島遺跡の居館遺構はその所属時期から万葉集にみられる大伴氏の鳥見の田処との関連が考えられ、大伴氏ゆかりの居館遺構と想定されている。また、能登遺跡の遺構は用明紀に見られる迹見赤埴の居館との説がある²⁹⁾し、脇本遺跡や阿部中山遺跡は有力層の居館、あるいは離宮的な性格が想定されている³⁰⁾。この時期には調査で検出されている遺構のほかにも欽明天皇磯城嶋金刺宮や迹見驛家・阿斗河辺館・阿斗桑市館等々文献にあらわれる宮跡や居館・公的な施設は数多く、今後の調査が期待される。寺院についても我国最初の官立寺院である百済大寺とされる吉備池廃寺や、阿倍氏の氏寺である安倍寺、蘇我倉山田石川麻呂によって建立された山田寺など著名な遺跡が多い。

【藤原京期】

藤原京期の桜井は上之庄遺跡（63）における東の京極道路である東十坊大路の確認により、市域の多くが大藤原京域に含まれることが判明している³²⁾。京域内では西之宮地区や大福地区・吉備地区などにおける調査では広い範囲で条坊道路や掘立柱建物群・井戸などの遺構の確認が顕著である。また、横大路（85）や上ツ道（84）・安倍山田道などの幹線道路が整備されるのもこの段階であろう。なお、京域より外の地域にあたる谷遺跡（76）・箕倉山遺跡（47）・忍阪遺跡・三輪遺跡（59）などにおいても掘立柱建物や井戸などの集落遺構が確認されており、京域外にも小規模な居住地が広がっていたことが解っている。

【奈良・平安時代】

市域における奈良時代の遺構の確認例は、先述した大神神社摂社若宮社（57）の調査で検出されている大神寺関連の建物遺構程度で非常に少ないが、引き続き安倍寺が存続し、青木廃寺の創建が確認されている³³⁾。青木廃寺の過去に採集された出土瓦の中には「延喜六年造檀越高階茂生」と陽刻を持つ軒平瓦や「大工和仁部貞行」と陰刻をもつ平安時代の軒丸瓦なども含まれており、長らく平安時代の創建とされていたものの、出土瓦の詳細な研究により奈良時代の初めに創建されたものであり、長屋王が父高市皇子の冥福を祈って建立した寺院であるとの説が出されている。このほか、殆どが未調査ながら高田廃寺や栗原寺・慈恩寺（83）などの寺院跡でも奈良時代の瓦や礎石などの出土が確認されており、集落遺構の貧弱さに対して寺院の多さが目に付く。また、笠や忍阪・谷・下などの山部では火葬墓やこれに伴う骨蔵器・鉄板・鉄刀なども出土しており、平野部を見下ろす東・南の山地にこの時期の奥津城があったようで、今後類例の増加が予想される。

平安時代の遺構が検出されているものには纏向遺跡（12）と東新堂遺跡（62）がある。いずれの遺

跡も掘立柱建物や井戸・土坑などがあり遺構の密度も比較的高いが、他の遺跡では芝遺跡（41）や脇本遺跡・三輪遺跡（59）などで土器片が僅かに出土しているのみである。

【鎌倉時代】

この時期になると市域の殆どすべての地域から遺構や遺物の出土がある。市域に現存する集落の多くはこの頃に形成された環濠集落をもとに発展してきたもので、現在でも当時の環濠をとどめているものは少なくない。調査で確認される遺構には先述した環濠の他、掘立柱建物や土坑・井戸・溝・墓などがあり、およそ当時の集落の在り方を知ることができる。このほか、鎌倉から南北朝期にかけての桜井を特徴づけるものには市内各地に築かれた多くの城館や砦を挙げることができよう。これら城館や砦の機能していた14世紀前半の桜井は南北朝期の南朝と北朝の勢力圏の境界にあたっており、北より進撃してくる北軍に対し、『太平記』に有名な三輪西阿（大神主 高宮勝房と同一人物か）を中心としてその一族や周辺の多くの国人が南朝に応じ、延元二年（1337）から興国二年（1341）にかけて市内各地で激戦が繰り返されていた様子が多くの資料から伺える。これらの文献に残る城郭や砦には西阿の本丸となった三輪（59）・戒重城（68）の他に河合・安房・瑠・赤尾・外鎌山・石原田などの支城の名が散見されるが、過去の発掘調査では吉備大臣薮遺跡³⁵⁾や、大神神社北方で確認された空湟や切岸³⁷⁾、箸中地区慶運寺裏の丘陵上に於いて検出された空湟と見られるV字溝など、文献には登場しない小さな遺構の確認も相次いでおり、今後の調査によってさらなる類例の増加が見込まれる。

（橋本）

【註記】

- 1) 清水眞一『阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会1989
- 2) 小沢毅ほか『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺跡の調査―』奈良国立文化財研究所創立50周年記念学報第68冊奈良国立文化財研究所2003
- 3) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1991年度発掘調査報告書3』（財）桜井市文化財協会1992
- 4) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会1994
- 5) 前園実知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県立橿原考古学研究所編1978
- 6) 関川尚功・佐藤良二「奈良県三輪山麓採集の有舌尖頭器」『旧石器考古学32』旧石器談話会1986
- 7) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1』（財）桜井市文化財協会1997
- 8) 樋口清之「三輪遺跡とその遺物の研究」『大和考古学』4・5 1932・1934
- 9) （財）桜井市文化財協会が1997年に調査。未報告。
- 10) 川村和正「箸中遺跡出土の縄文資料について」『大和の縄文時代―奈良盆地の狩人たちの足跡―』桜井市立埋蔵文化財センター 2000
- 11) 清水眞一編『大和の縄文時代―奈良盆地の狩人たちの足跡―』桜井市立埋蔵文化財センター 2000
- 12) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会 1976
- 13) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会1991
- 14) 萩原儀征『桜井市大福遺跡大福小学校地区発掘調査概報』桜井市教育委員会1987
- 15) 橋本輝彦・豊福恵子「大福遺跡第13次調査の特殊遺物」『みずほ第27号』大和弥生の会1998
- 16) 寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所1986 以下、本書における土師器の編年観・調整技法はすべてこれに準ずる。
- 17) 橋本輝彦「上之庄遺跡第4次発掘調査現地説明会資料」（財）桜井市文化財協会1996
- 18) 清水眞一『芝遺跡大三輪中学校改築にともなう発掘調査報告書』桜井市教育委員会1987

- 19) 萩原儀征『茅原丸田地区発掘調査概要』桜井市教育委員会1990
- 20) 前園実知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県立橿原考古学研究所編1978
- 21) 村上薫史『磐余遺跡群発掘調査概報Ⅰ』（財）桜井市文化財協会2002
- 22) 網干善教「桜井市谷稻荷西第3号墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報11』奈良県教育委員会
- 23) 萩原儀征『茅原丸田地区発掘調査概要』桜井市教育委員会1990
- 24) 前園実知雄「第三節 地下発掘調査」『重要文化財大神神社摂社大直禰子神社社殿修理工事報告書』奈良県教育委員会1989
- 25) 橋本輝彦「近年の調査成果から見た三輪山祭祀・三輪氏について」『大美91号』大神神社1996
- 26) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会1994
- 27) 橋本輝彦『桜井市平成6年度国庫補助事業による発掘調査報告書2』桜井市教育委員会1995
- 28) 清水眞一『阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会1989
- 29) 清水眞一『城島遺跡田中地区発掘調査報告書』（財）桜井市文化財協会1992
- 30) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1』（財）桜井市文化財協会1997
- 31) 清水眞一『磯城・磐余の時代—大和の古代邸宅—展』桜井市立埋蔵文化財センター 1991
- 32) 橋本輝彦「上之庄遺跡第4次発掘調査現地説明会資料」（財）桜井市文化財協会1996
- 33) 田中英夫ほか『安倍寺跡環境整備事業報告—発掘調査報告書—』桜井市1970
- 34) 大脇潔「忘れられた寺—青木庵寺と高市皇子—」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』1993
- 35) 松山宏「中世」『桜井市史上巻』桜井市役所1979
- 36) 橋本輝彦「吉備大臣薨遺第2次調査報告」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1999
- 37) 寺沢薫ほか「史跡・大神神社旧境内地第6次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1991年度』奈良県立橿原考古学研究所1992
- 38) （財）桜井市文化財協会による1997年の調査。未報告。

第2章 古記録にみる纏向石塚古墳

第1節 野淵龍潜による調査

纏向石塚古墳の墳丘は太平洋戦争中の高射砲陣地の建設にあたり大きく削平を受けているが、墳丘の削平以前の状況を知る記録は非常に少なく、郷土史をまとめた『奈良県磯城郡誌』（1915）や『大三輪町史』（1959）では全く記載がないか、あってもごく短文のものであり、それほど注目された存在ではなかったようである。このような状況にあって墳丘削平前の古墳の様子を知ることができる唯一の資料が『大和國古墳墓取調書』である。この記録は当時奈良県嘱託であった野淵龍潜によって明治26年（1893）に県下所在の古墳の悉皆的な現況調査が行われた際に作成されたもので、纏向石塚古墳についても詳細な絵図と観察所見が掲載されている（図4）。

この所見には「第二百三十号 式上郡纏向村大字東田字矢塚第二百三十一号同村同大字字勝山第二百三十二号同村字大字大谷字石塚ニ在リ三塚共ニ宏壮ナル築造ニシテ往古ハ前方後円ナラント思惟スレドモ今ハ皆開墾シテ蜜柑畑ト為シ且諸處発掘ノ痕アリテ其全形ヲ知ルアタハ

ズ別ニ伝説等ノ考証スベキナシト雖モ其構造ヨリ推考スルモ皇族以上ノ御墓所ナルハ疑ウベカラザルモノト考フ」とあるが、現在の調査においても長らく墳形の判然としなかった纏向石塚古墳がこの時点ですでに前方後円墳の可能性が指摘されているのは注目すべきで、或いは絵図には見えないが前方部の高まりも幾らか残されていたのかも知れない。また、絵図の添書きの記録では高さは3間半（約6.3m）、根廻は81間（約146m）であるとの記載があるが、現在の墳丘高は絵図と同じ墳丘北側水田との比高が約3.3mで、3mもの削平を受けたようである。戦時中の削平に際しては埋葬施設の存在、遺物の出土を伝える記録はなく、第4章で紹介されている地元の古老の話がある程度である。

なお、掲載年月日は不明ながら平成初期の新聞記事²⁾には後円部西側の水田から17点、墳丘上から3点の計約20点の勾玉が過去に採集されたとの記事も見ることができるが、勾玉は現在所在不明であり、記事の内容から見ても即座に本墳に伴う遺物と判断できる状況にはないと思われる。（橋本）

【註記】

1) 野淵龍潜『大和國古墳墓取調書』奈良県1893

2) 桜井市立埋蔵文化財センター所蔵の新聞記事切り抜きより。記事の内容から平成2年5月8日の記事と思われる。

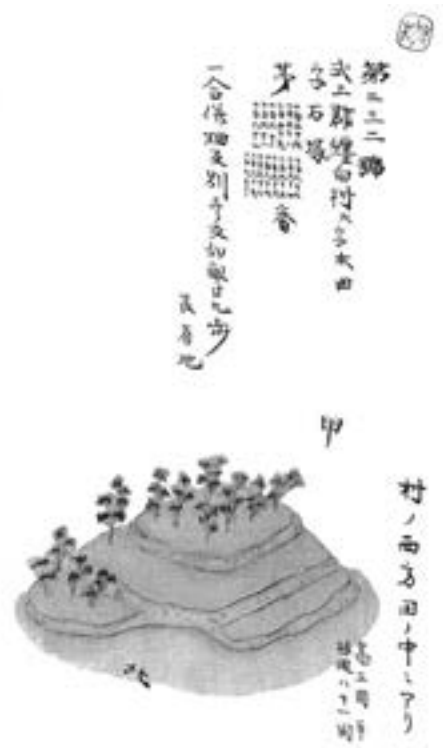


図4 『大和國古墳墓取調書』
所収の纏向石塚古墳（註1文献より）



写真1 昭和54年撮影の纏向遺跡北半の様子（上が北）



写真2 昭和54年撮影の纏向遺跡南半の様子（上が北）

第3章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯と経過

ここに報告するのは桜井市大字太田字石塚・塚東所在の史跡 纏向石塚古墳の範囲確認調査報告である。纏向石塚古墳は昭和46年12月から開始された纏向小学校の移転新築計画に先立つ纏向遺跡第6次調査において初めて調査が行われたもので、この調査の結果3世紀代に遡る列島内最古の古墳として一躍注目を集めることとなった。

以来、平成18年3月までの間、断続的に9次にわたる範囲確認調査が実施され、のべ3,752㎡の調査が行われるとともに、これら範囲確認調査の結果を受けて平成18年1月26日付で纏向石塚古墳は史跡 纏向古墳群の一つとしてホケノ山古墳とともに国史跡の指定を受けることとなった。

なお、これまで行われた調査区の位置関係については図5に示した通りであるが、個々の調査区には重複があるものもあり、調査位置や遺構の検出状況が煩雑であるため、以下に調査毎の位置や概要を簡単に整理しておくこととする。

【昭和46年度 纏向石塚古墳第1次調査（纏向遺跡第6次）】

纏向小学校の移転新築に際して桜井市が事業主体となり、奈良県立橿原考古学研究所によって行われた調査である¹⁾。調査そのものは学校用地全域を対象として確認調査が行われているが、この時点においては纏向石塚古墳に関しては墳形や規模・築造時期などその実態は全く不明であったため、墳丘測量図の作成および学校用地内の遺構の分布状況を探ることを目的とした調査が行われている。

調査区は校舎建物予定地東端から運動場部分へと南北に設定されたトレンチと、これに交差する形で残存する古墳の墳丘から運動場予定地にかけて設定された東西トレンチの2本をあわせて第1次調査第1トレンチ（以下すべてのトレンチ名称は「1-1トレンチ」のように「次数-トレンチ番号」で表記する）と呼称している。

なお、1-1トレンチの東西トレンチ部分は図示した範囲よりもさらに西方へと長く設定されたものであるが、ここでは古墳に関連する部分のみを纏向石塚古墳の調査区と便宜的に設定し、調査面積も南北トレンチとの交点より西側部分をその対象に含めることとした。そして、この1-1トレンチの調査により周濠の存在が確認されたことを受け、墳丘の西北部分の周濠の様相を探るために設定されたのが1-2トレンチである。

現地調査は昭和46年12月6日から昭和47年3月18日にかけて行われており、調査面積は1-1トレンチが888㎡、1-2トレンチが140㎡の計1,028㎡である。

【昭和50年度 纏向石塚古墳第2次調査（纏向遺跡第8次）】

残存する墳丘の南隣接地の水田において資材倉庫および家屋建築の届出があったことを受け、奈良県立橿原考古学研究所によって墳形確認のためのトレンチ調査が行われたものである¹⁾。調査は東西に

細長い対象地に対して南北方向に6本のトレンチが設定されている。

調査区は東側から順に2-1～2-6トレンチと呼称されている。このうち2-1から2-3トレンチでは墳丘の基底や端部、そして周濠の存在が確認され、2-4から2-6トレンチでは墳丘の盛土等は検出されなかったものの、墳丘の下に存在するとみられる弥生時代後期の包含層が厚く堆積する状況が確認されており、墳丘がさらに南側に展開する状況が確認されている。

なお、現地調査は昭和50年5月15日から昭和50年6月4日にかけて行われたもので、調査面積は2-1トレンチが36㎡、2-2トレンチは17㎡、2-3トレンチは6㎡、2-4トレンチは35㎡、2-5トレンチは23㎡、2-6トレンチが5㎡の計122㎡であった。

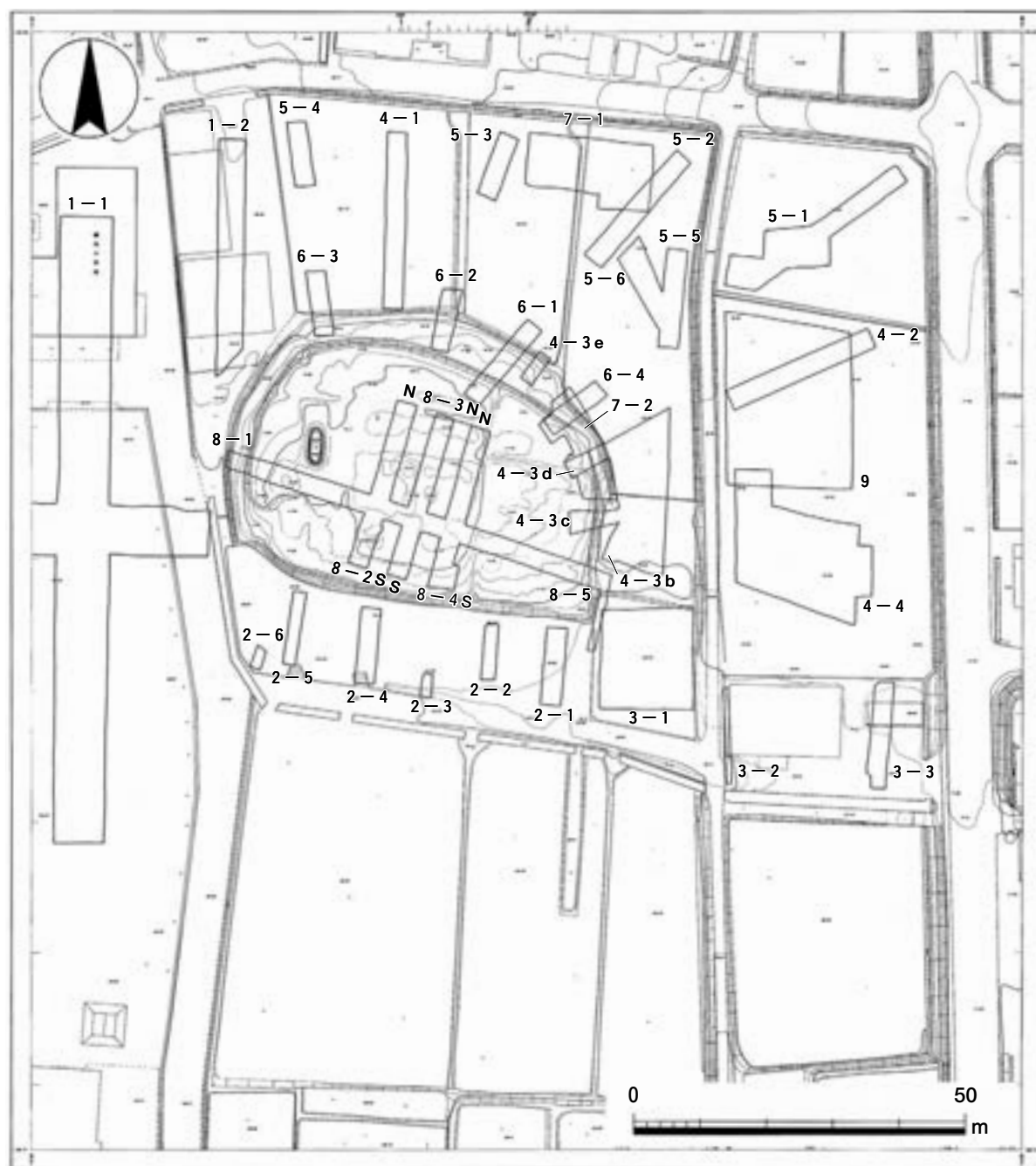


図5 纏向石塚古墳調査トレンチ配置図（1／1,000）

表1 纏向石塚古墳における既往の調査地と次数一覧

石塚 次数	纏向 次数	所在地	調査期間	主な遺構	主な遺物	担当者	調査面積	原因	文献
1次	6次	太田248-2、 249、250-1、 250-2、251、	1971.12.6～ 1972.3.18	古墳北西部墳 丘肩部・周濠 外肩部	古式土師器・鶏形木 製品・鋤・ 有頭棒	石野・河上(県)	1,028㎡	纏向小学 校の移転 新築工事	1
2次	8次	太田246-1、 246-2	1975.5.15～ 1975.6.4	後円部南側墳 丘基底部・周 濠	古式土師器・弧文円 板・鋤・鍬	久野・関川(県)	122㎡	資材倉庫・家屋 建築	1
3次	10次	太田242-1、 246-3	1976.7.12～ 1976.8.12	前方部南側 面・周濠	古式土師器・柱材・ 板材・異形 木製品	久野・寺沢(県)	272㎡	農業用倉庫の建築	2
4次	55次	太田253-1、 254-2、254-3、 255-2、257、 266、267、 268、269、 271-1	1989.4.17～ 1989.6.17	前方部北東隅 墳丘・周濠・ 導水溝、北側 後円部～クビ レ部墳丘・周 濠	古式土師器・柱材・ 鋤・鍬・ 横槌・槽	萩原・清水(市) 寺沢(県)	700㎡	範囲確認	3
5次	62次	太田253-1、 254-1、255-1、 272-1、277-1	1991.9.17～ 1991.11.17	古墳北側 周濠外肩部	古式土師器	萩原(市)	350㎡	範囲確認	4
6次	66次	太田258、257、 254-1、254-2、 254-3、253-1、 253-3、255-2、 256	1992.1.21～ 1992.3.11	後円部北側 墳丘・周濠	古式土師器	萩原(市)	131㎡	範囲確認	4
7次	77次	太田254-1、 254-2、255-1、 255-2、256、 257、267	1993.12.2～ 1994.2.20	古墳北側 周濠外肩部、 後円部北東側 墳丘	古式土師器	萩原(市)	270㎡	範囲確認	4
8次	87次	太田259、260、 261、262、 263、264、265	1996.7.30～ 1996.11.22	後円部1段目 の段築平坦 面、墳丘盛土 および墳丘下 の遺構面	古式土師器	橋本(市)	402㎡	範囲確認	5
9次	144次	太田271-1	2005.12.27 ～2006.3.31	前方部北東側 周濠外肩部、 石塚東古墳、 方形周溝墓2 基	古式土師器	丹羽・橋爪(市)	477㎡	範囲確認	6

【文献一覧】

- 1) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会1976
- 2) 久野邦雄・寺沢薫「石塚古墳の調査」『奈良県遺跡調査概報1976年度』奈良県立橿原考古学研究所1977
- 3) 萩原儀征・寺沢薫「纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次概報）」桜井市教育委員会1989
- 4) 萩原儀征編『纏向石塚古墳第1期整備事業－範囲確認調査(第5次～7次)概報－』財大和文化財保存会 桜井市教育委員会1995
- 5) 橋本輝彦『纏向石塚古墳第8次調査の概要（纏向遺跡第87次）』桜井市教育委員会1996
- 6) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006

【昭和51年度 纏向石塚古墳第3次調査（纏向遺跡第10次）】

第3次調査は農業用倉庫建築の申請が提出された事を受けて実施された調査である²⁾。対象地は現存する墳丘の南西に隣接する水田と間に里道を挟んだ東側の水田の2筆で、西側から順に3-1、3-2、3-3トレンチと3本のトレンチが設定されている。

このうち、周濠が墳丘に沿って弧を描くと推定されていた3-1トレンチでは前方部の南側面とこれに沿う周濠が検出され、纏向石塚古墳が東南方向に前方部を持った前方後円墳となる事が初めて確認されている。

また、調査区は矮小ながら、3-2トレンチでは幅約6m、深さ約50cmの溝の存在が確認されている。この溝は前方部前面を区画するための施設と考えられ、前方部前面は規模の小さな区画溝によって区切られていたことが確認されている。

なお、現地調査は昭和51年7月12日から昭和51年8月12日にかけて行われており、調査面積は3-1トレンチが213㎡、3-2トレンチが12㎡、3-3トレンチが47㎡の計272㎡であった。

【平成元年度 纏向石塚古墳第4次調査（纏向遺跡第55次）】

第3次調査までの発掘調査の成果を受けて昭和61年から開始された纏向石塚古墳の公有化・整備事業の一環として行われたものである³⁾。調査は平成元年に概ね墳丘部の買収が完了したこと受け、整備計画を立案するにあたり課題となった墳丘北から東部一帯の墳丘形状や周濠の状況を把握することを目的としたもので、調査に先立って結成された纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、奈良県立橿原考古学研究所の協力をを受けて桜井市教育委員会が実施している。

また、この調査では発掘調査に先立って墳丘の航空測量が実施され、より正確な現況測量図が作成されている。なお、本報告に使用されている墳丘図はすべてこの測量によるものである。

調査区は1-2トレンチで確認されている墳丘北側の墳丘や周濠の形状を確認するための4-1トレンチ、墳丘東側の周濠外肩部のラインを確認するための4-2トレンチ、後円部北東部分の墳丘ラインを確認するための4-3eトレンチ、前方部からクビレ部、そして後円部にかけての墳丘と周濠の様子を確認するための4-3a～dトレンチ、前方部北東隅の墳丘および周濠の形状を確認するための4-4トレンチと計5ヶ所に調査区が設定されている。

この調査の実施によって明らかにされた纏向石塚古墳の墳丘は全長約93m、後円部は横長の扁楕円状を呈し、最大で径約64m、短径で約61mに復元されるとともに、前方部は長さ約32m、クビレ部幅約15m～16m、前方部前面幅約32mに復元が行われ、周濠の調査成果と合わせてはじめて詳細な復元プランが描かれることとなっている。

なお、現地調査は平成元年4月17日から平成元年6月17日にかけて行われたもので、調査面積は4-1トレンチが81㎡、4-2トレンチは75㎡、4-3a～dトレンチは227㎡、4-3eトレンチは9㎡、4-4トレンチが308㎡の計700㎡であった。

【平成3年度 纏向石塚古墳第5次調査（纏向遺跡第62次）】

第5次調査は第4次調査と同様に纏向石塚古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである⁴⁾。

この調査の対象となったのは墳丘北側の周濠外肩ラインの確認で、4-1・4-2トレンチ間の様相を明らかにすることを目的として想定される周濠の推定ライン上に5-1から5-4までの4本のトレンチを設定し、遺構の検出が行われている。

この結果、5-2トレンチから5-4トレンチに至る対象地西側部分ではほぼ推定ラインどおりに周濠外肩が検出されたものの、5-1トレンチにおいては周濠外肩が検出されず、5-2トレンチと4-2トレンチ間の周濠の形状が判然としない状況となったため、急遽5-1トレンチよりも墳丘に近い部分に5-5トレンチを設定し、周濠外肩のラインを検出することに成功している。

なお、この周濠外肩ラインをより明確に捉えるために周濠外肩に沿ってトレンチを拡張したのが5-6トレンチであり、第5次調査では結果的に6本のトレンチを設定することとなっている。

現地調査は平成3年9月17日から平成3年11月17日にかけて行われており、調査面積は5-1トレンチが135㎡、5-2トレンチは66㎡、5-3トレンチは30㎡、5-4トレンチは30㎡、5-5トレンチは48㎡、5-6トレンチが41㎡の計350㎡であった。

なおこの調査の終了後、明けて平成4年の1月からは第6次調査が本調査と同じ年度事業として引き続き実施されることとなったため、周濠ラインが検出されなかった5-1トレンチのみ調査区の埋め戻しが行われ、残るトレンチは第6次調査終了後に埋め戻されている。

【平成3年度 纏向石塚古墳第6次調査（纏向遺跡第66次）】

第6次調査も第4・5次調査と同様に纏向石塚古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである⁴⁾。

調査の対象となったのは墳丘北側の墳丘ラインの確認で、既に確認されている1-2、4-1、4-3e、4-3dトレンチ間の墳丘形状を明らかにすることに主眼を置き、先に調査を実施した5-1から5-4トレンチと軸を揃えるように6-1から6-4トレンチまで、計4本の調査区が設定されている。

この調査では墳丘にかかる部分は第4次調査で確認されている平安時代以降の攪乱土を除去し、周濠にかかる部分は周濠堆積土上面までの掘削を基本として調査が行われ、当初の推定どおりに墳丘のラインが検出されている。

なお、現地調査は平成4年1月21日から平成4年3月11日にかけて行われており、調査面積は6-1トレンチが43㎡、6-2トレンチは28㎡、6-3トレンチは30㎡、6-4トレンチが30㎡の計131㎡である。

【平成 5 年度 纏向石塚古墳第 7 次調査（纏向遺跡第77次）】

第 7 次調査も第 4 ～ 6 次調査と同様に纏向石塚古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである⁴⁾。

調査の主眼となったのは 6 - 4、4 - 3 d トレンチで既に確認されている墳丘東側の墳丘ラインの再確認と、周濠北側の外肩部の詳細な構造および周濠より外側の遺構の残存状況の確認であり、周濠北側には 7 - 1 トレンチを、墳丘東部には 7 - 2 トレンチが設定され調査が行われている。

このうち、7 - 1 トレンチでは古墳に先行するとみられる弥生時代後期の土坑が検出されたのみで、周辺には顕著な遺構は存在しないことが判明している。7 - 2 トレンチはこれまでに推定されている墳丘の推定線に対し、残存する墳丘がやや外側へと不自然な張り出しを持っていたことから、この張り出しの性格を確認するために設定されたものだが、調査の結果、墳丘ラインは当初の推定線どおりに検出され、張り出しは後世に墳丘を取り崩した時のものである事が確認されている。

現地調査は平成 5 年 12 月 2 日から平成 6 年 2 月 20 日にかけて行われており、調査面積は 7 - 1 トレンチが 173㎡、7 - 2 トレンチが 97㎡の計 270㎡であった。

なお、この調査の終了を受けて平成 6 年 2 月 20 日から 5 月 10 日までの間、墳丘北側の周濠部分を中心とした第 1 期整備工事が実施され、史跡公園として市民の憩いや、まなびの場として活用されている。また、この第 1 期整備工事の完了後の平成 7 年 3 月 6 日には桜井市指定文化財第 8 号として纏向石塚古墳は市指定文化財の指定を受け、以後保存の措置が講じられることとなった。

【平成 8 年度 纏向石塚古墳第 8 次調査（纏向遺跡第87次）】

第 1 期整備工事の完了を受けて、第 2 期整備事業の対象となる墳丘部の調査が桜井市教育委員会によって行われ、8 - 1 から 8 - 5 トレンチの 5 本の調査区が設定されている⁵⁾。

調査は後円部の段築などの外表施設の有無確認と盛土等の構造確認のため古墳の中軸線上に 8 - 1 トレンチを、そして太平洋戦争中に墳丘上に築かれたとされる高射砲陣地による墳丘の攪乱状況を把握するために 8 - 1 トレンチに直交する形で 8 - 2 から 8 - 4 トレンチが設定されている。

また、8 - 5 トレンチは国土座標に基づいた記録が残されていなかった 3 - 1 トレンチの正確な位置を割り出すとともに、検出されている前方部のラインと現在の測量図の整合性を持たせるために設定された補足的なトレンチで、3 - 1 トレンチと重複する形で調査区が設定されている。

この調査の結果、8 - 1 トレンチの墳丘西端部からは墳丘 1 段目の段築とみられる平坦面の存在が確認され、箸墓古墳に先行する出現期古墳としては初めて段築の存在が確認されるとともに、墳丘の断ち割り調査からは築造時に墳丘に混入したと考えられる多くの土器資料が得られたほか、盛土および墳丘下の遺構面の状況が確認されている。

なお、現地調査は途中 2 度の中断を挟みながら平成 8 年 7 月 30 日から平成 8 年 11 月 22 日にかけて行われており、調査面積は 8 - 1 トレンチが 183㎡、8 - 2 トレンチは 69㎡、8 - 3 トレンチは 68㎡、8 - 4 トレンチは 72㎡、8 - 5 トレンチが 10㎡の計 402㎡であった。

【平成17年度 纏向石塚古墳第9次調査（纏向遺跡第144次）】

第8次調査の終了後、古墳の整備事業は財政的な事情によりしばらく中断状態にあったが、平成16年に入って市指定区域内ながら一部未買収のまま残されていた前方部および周濠部分において資材置場の造成事業が計画されたことを受け、対象地の公有地化をはかると共に平成17年度に範囲確認調査が実施されている⁶⁾。

調査が行われたのは平成元年に検出された前方部の北側、かつて4-2トレンチが設定され周濠外肩のラインが検出されている水田部分で、周濠外肩およびその周囲の遺構の状況を明確にするため4-2トレンチを含め周辺を大きく広げる形でトレンチが設定され、調査区内からは5世紀末に築造された帆立貝形古墳である石塚東古墳や、纏向石塚古墳の周濠に隣接する形で方形周溝墓2基が検出されたほか、かつて4-2トレンチで確認された古墳の周濠外肩ラインは先の石塚東古墳の周濠肩を誤って検出していたことが判明している。

なお、現地調査は平成17年12月27日から平成18年3月31日にかけて行われており、調査面積は477㎡であった。

以上、9次にわたる調査の状況を概観してきたが、これらの調査により確認された纏向石塚古墳の墳形および周濠形状などの様々な属性は、矢塚古墳・ホケノ山古墳などとともに「纏向型前方後円墳⁷⁾」の典型例として古墳の出現をめぐる論争の中で重要な位置を占めることとなり、周濠から出土した弧文円板や鶏形木製品をはじめとする木製祭祀遺物の存在は出現期古墳における墳墓祭祀の様相を伺わせるものとして、その後の研究の進展に大きく貢献している。

しかしながら、今後に残された課題も多い。古墳の築造時期をめぐっては3世紀代におさまる年代観についてはほぼ異論がないものの、未だ厳密な時期を示す決定的な資料に恵まれず、担当者間でも意見の統一をみていないのが実情であるし、周濠の形状についても史跡指定地外となる墳丘南側の水田部分は未調査の部分が殆どで、追加指定も視野に入れたさらなる形状の確認調査の実施が今後の課題である。

(橋本)

【註記】

- 1) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会1976
- 2) 久野邦雄・寺沢薫「石塚古墳の調査」『奈良県遺跡調査概報1976年度』奈良県立橿原考古学研究所1977
- 3) 萩原儀征・寺沢薫「纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次概報）」桜井市教育委員会1989
- 4) 萩原儀征編『纏向石塚古墳第1期整備事業－範囲確認調査(第5次～7次)概報－』（財）大和文化財保存会 桜井市教育委員会1995
- 5) 橋本輝彦『纏向石塚古墳第8次調査の概要(纏向遺跡第87次)』桜井市教育委員会1996
- 6) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査(纏向石塚古墳第9次調査)概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006
- 7) 寺沢薫 「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学 1988

第2節 報告書作成の経緯と経過

例言でも述べたように纏向石塚古墳の調査は35年の長きにわたって行われてきたものであるが、その調査原因や担当機関はそれぞれに異なったもので、調査報告書の刊行は調査単位に委ねられた状態にあったが、実際に正式報告が完了しているのは第1・2次調査分だけであり、他の調査については概要報告が個々に刊行されているだけで調査の情報は必ずしも多くが公表されているとは言えない状況にあった。

このような状況の中、平成18年には長年継続的に実施された纏向古墳群における範囲確認調査の進捗を受けて纏向石塚古墳とホケノ山古墳が「纏向古墳群」として国の史跡指定を受けることとなったが、この史跡指定を目指した活動を契機として、それぞれの古墳における調査成果をまとめた報告書の刊行が望まれることとなった。

これらの状況を鑑み、桜井市教育委員会では纏向石塚古墳の調査報告書の刊行を目的として平成17年度より橋本と橋爪が業務の合間を縫いつつ資料の再整理に着手し、平成21年度から23年度にかけては国庫補助事業の採択を受けて橋本と木場がこれを担当した。なお、平成23年度からは桜井市に着任した寺沢が整理作業に加わり全体を統括している。

本報告書の作成にあたり、第1・2次調査分は既に正式な調査報告書が刊行されているため、本書への掲載にあたっては原則として本文は誤植の訂正と体裁を整えるための編集に留め、遺構図については原図より新規作成および再トレースを実施している。

第3次調査の資料については今回の報告書の刊行へ向けての作業を開始した時点で概ね整理作業が完了しており、今回は調査担当者である寺沢が新たに原稿の執筆とその編集作業を実施した。

また、第4次調査以降の調査については図版のほぼ全てを今回新たに実測・トレースを行い、原稿の執筆は第4次調査を寺沢が、第5～8次調査を橋本が、第9次調査を丹羽が執筆している。

なお、第9次調査については纏向石塚古墳に関係する周濠外肩の遺構以外にも方形周溝墓や石塚東古墳など多様な遺構の検出があったものの、今回の報告では纏向石塚古墳の周濠および周辺に展開する2基の方形周溝墓のみの報告とし、いわゆる纏向遺跡の時代と異なる遺構は別に報告を準備することとした。

さて、今回の報告にあたり新たに整理作業を行ったのは桜井市において保管されている第4次調査以降の調査資料である。実際の作業には収蔵庫に保管されている遺物ケースの中から各遺構に関連する出土遺物を抽出するところから作業を開始した。

この結果、纏向石塚古墳関連の遺構からの出土品は遺物ケースにして約50箱の分量があった。このうち、第4次調査出土の木製品については主要なものは既に実測・保存処理作業が完了していたものの、木端や木片などは既に所在の確認できないものも一部存在した。

土器資料については多くの遺物が調査当時に洗浄とネーミングが行われた程度で、第4次調査出土の主要な遺物を除くと多くは接合等の基礎的な整理さえ手付かずの状態にあった。このため、基本的な整理作業は以下の手順に基づいて実施することとした。

- ①報告に必要となる遺構・層位からの遺物をすべて抽出。
- ②遺物袋単位で仮接合を実施。
- ③すべての破片を点検するとともに仮接合したものの中から残存率の高いもの・特殊な個体・小片でも遺構の時期の決め手となる個体を抽出。
- ④抽出した土器を同一遺構内出土の全ての土器片と接合関係を再確認し、エポキシパテを併用しながら復元を実施。
- ④復元作業の完了後に後補部分にアクリル絵具（一部水性絵具）にて着色を実施。
- ⑤実測作業を実施。

この結果、本報告にあてた遺物量は遺物ケースにして19箱にのぼることとなった。整理作業は平成17年度から平成20年度までは橋本・橋爪の2名で遺物の抽出や遺構図の整理・実測・トレースに着手し、平成21年度からは橋爪に代わって木場と整理員が専従して遺物のネーミング・復元・実測（写真3）を開始、平成23年12月末までに作業を完了している。

この間、寺沢・橋本・丹羽の三者は遺物写真の撮影・原稿の執筆・編集作業などを進め、木場は図版の作成を実施、1月末には印刷所へ入稿を行った。

なお、今回整理を実施した遺物については報告書の刊行と合わせて台帳登録を行うとともに、図面・写真などの記録類についてはファイリングを行い、今後の利用の便を図る事とした。（橋本）



写真3 遺物実測作業の様子

第4章 纏向石塚古墳第1・2次調査報告

(纏向遺跡第6・8次調査報告)

第1節 現状

纏向石塚古墳は、太田北微高地の西延長上にある。太田北微高地はこの付近では水田となっているが、その中に水田との比高2.5mの小丘がある。小丘のほとんどは畠地となっているが、西側には竹藪がある。

小丘は、東西59m、南北45mの不整形で、丘上は比高2.5mでほぼ平らになっているが、中央部はやや高く、3mあり、西側の畠地になっていない部分に4.4mの最高所がある。

地元の人々の話によると、太平洋戦争末期に柳本の飛行場から兵隊がきて高射砲陣地をつくるために平らにしたのだという。その時“一間位くずしていたが何も出なかった”ともいう。また、“けずるまでは急な山だった”とも、“3段になっていて相当高かった”ともいう。

この小丘を纏向石塚古墳とよぶのは、旧纏向村大字太田字石塚に所在するからであるが、現状では石はみられないし、埴輪も採集できない。また、小丘周辺の現地地形には周濠の痕跡は全く認められない。

なお、石塚の西北に接して径15m余の小丘があり、「奈良県遺跡地図第2分冊」では“古墳”として記録しているが、調査の結果、盛土の下からコンクリートの土台が現われ、太平洋戦争中につくられた高射砲台跡であることがわかった。

第2節 西側周濠の調査（第1次調査）

(1) 経過

東田地区の遺構・遺物の分布を確認するためのトレンチの一つとして、石塚の西18mのところに幅8m・南北96mのトレンチ（5D・6DNライン）を設定して調査した。基盤層上面でとどめて平面観察をした段階で、南北50mに及ぶ弧を描く黑色粘土の落ち込みのあることに気づいた。弧は石塚の現墳丘端西側の曲線と平行するらしいことを認め、あるいは石塚の周濠の一部ではないかと考えた。

このことを確かめるため、石塚ならびにさきのトレンチに直交する幅8m・長さ39mのトレンチ（5D19ライン）を設定し（図6・7）、調査したところ、黑色粘土は石塚の墳端までつづいていることを確かめた。ついで北側での状況を確認するため石塚西北部に接して幅4m・長さ36mのトレンチ（5DUライン）を設け、黑色粘土のおちこみが5D・6DNラインで検出された弧線の延長部分に存在することを確かめた（図10）。

上記の石塚西側の3本のトレンチによって、石塚西側の黑色粘土のおちこみは、幅20mで南北90m余にわたって石塚をとりまくような位置にあることが判明した。

(2) 周濠内の堆積土層

周濠中央部は、上層から耕作土・灰褐色土層・褐色土層・黑色粘土層Ⅰ・植物層・黑色粘土層Ⅱの

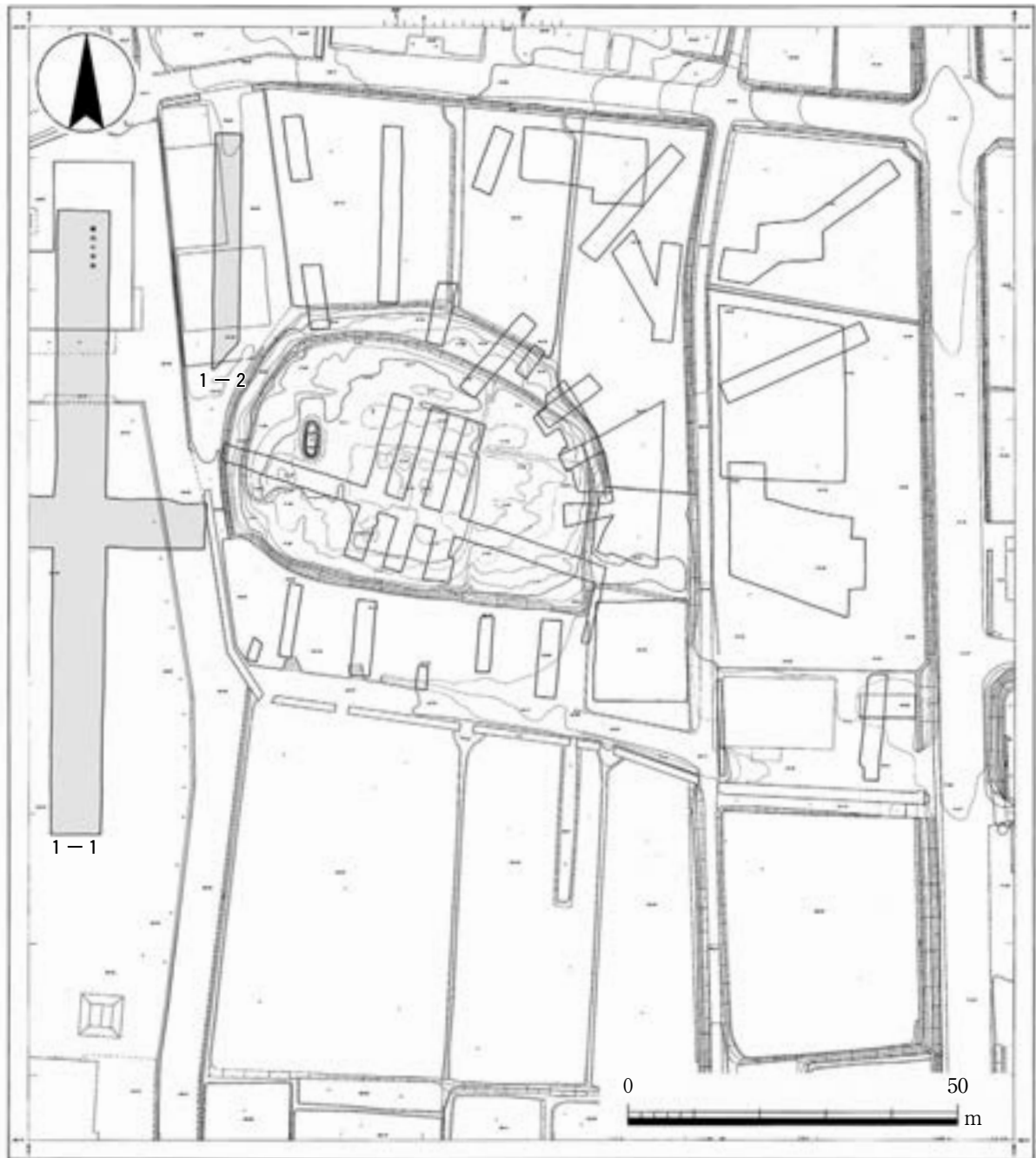


図6 纏向石塚古墳第1次調査地位置図（1／1,000）

順で堆積している。各層位に含まれている遺物とその相対年代はつぎのとおりである（図8）。

黒色粘土層Ⅰは湿地に堆積した泥土であり同層位の上面は石塚墳端・周濠肩部と一致している。つまり、周濠が泥土によってほぼ水平な状態に埋まったのは黒色粘土層Ⅰの段階であり、古墳時代後期から褐色土層の堆積がはじまったであろう飛鳥時代の頃である。

植物層は、墳端に近い部分を除いて周濠全体をレンズ状に覆っている。その厚さは、最も厚い部分で25cm余であり、層内には多量の自然木や木葉等が含まれている。自然木の中には自然の倒木と思われる根元で径42cm、年輪約60のスギの木や枝がある（図9）。この状況は古墳時代中期には、古墳ならびにその周辺に多くの樹木が生えていて、それが何らかの事情によって周濠内に多量に倒壊し、堆積

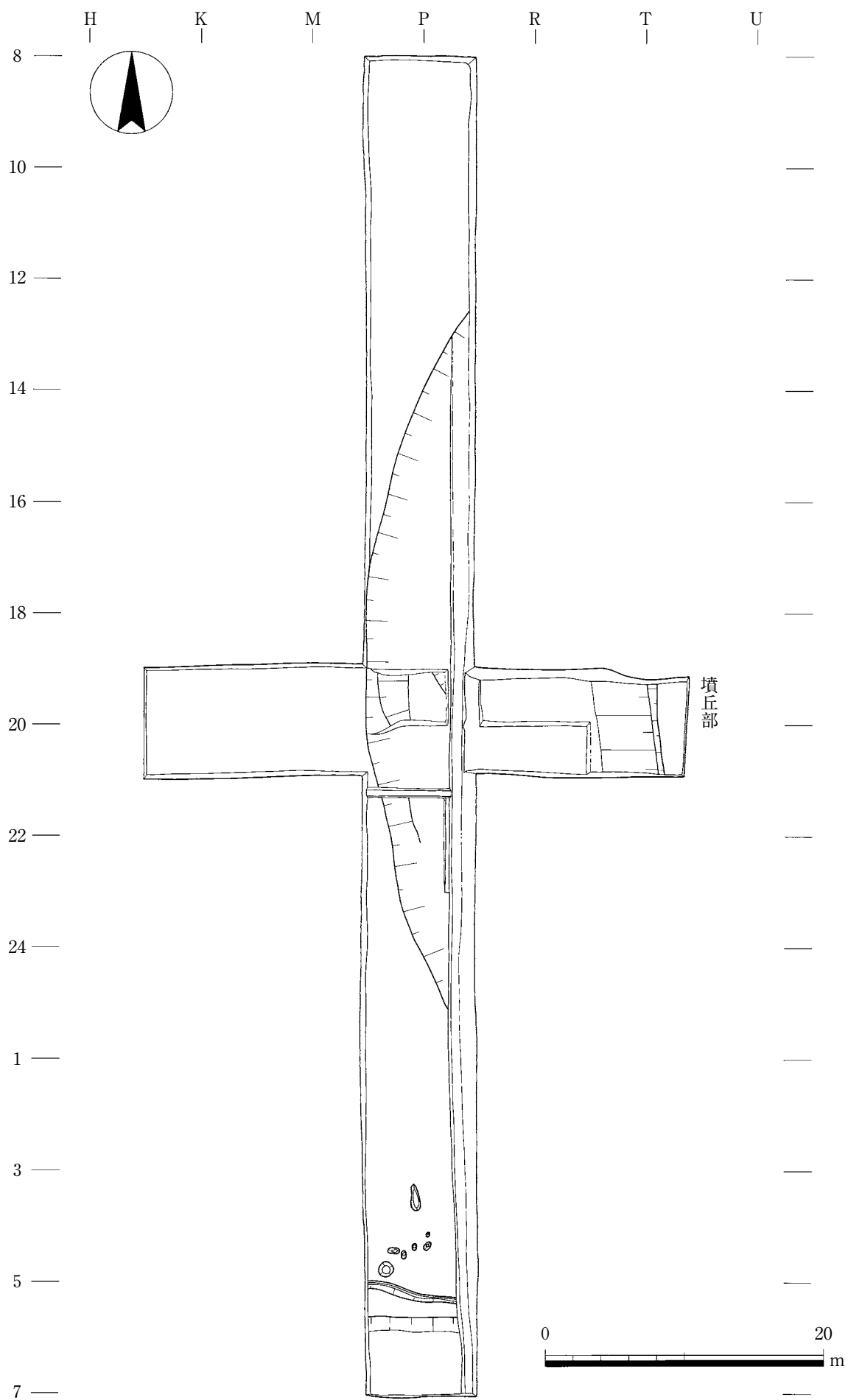


図7 1-1 トレンチ平面図 (1/400)

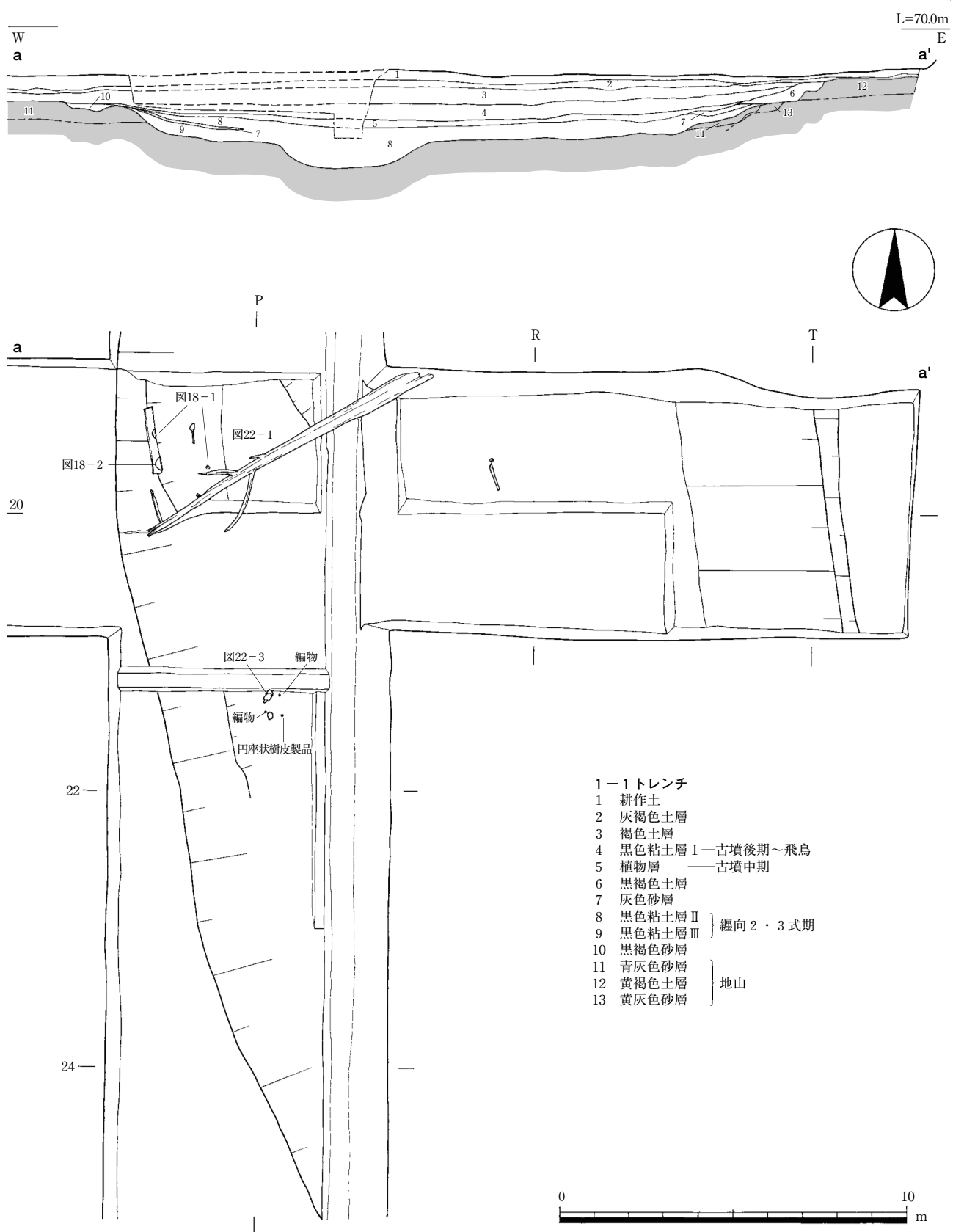


図8 1-1 トレンチ平・断面図 (1/160)

したものと考えられる。上下の層位と明確に区分できるこの植物層の存在によって、それ以前に掘られ堆積していた周濠が密閉され、本来オープンなものである濠でありながら、新しい遺物の混入を防ぐ結果となった。

黒色粘土層Ⅱは周濠底に直接している泥土である。部分的には周濠肩部に砂層が介在して黒色粘土層Ⅲの堆積をみるが、全体としては周濠掘削後の初期の堆積土としてよい。この層には縄向1式と同2式・3式の土器破片を含んでいる。その量は、発掘面積約50㎡で118片、1式と2式・3式の比は45片：17片（その他は不明）である。なお、鋤は5 D19N区と5 D21P区の黒色粘土層Ⅱから各1本検出されている（写真5・6）。

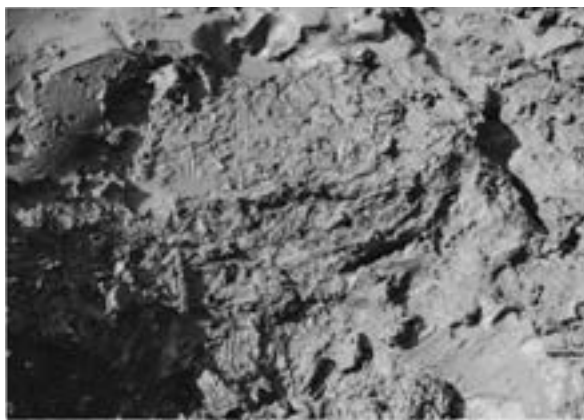


写真4 1-1トレンチ 西側周濠 編物出土状況



写真5 1-1トレンチ 西側周濠 鋤
(図22-1) 出土状況 (東より)

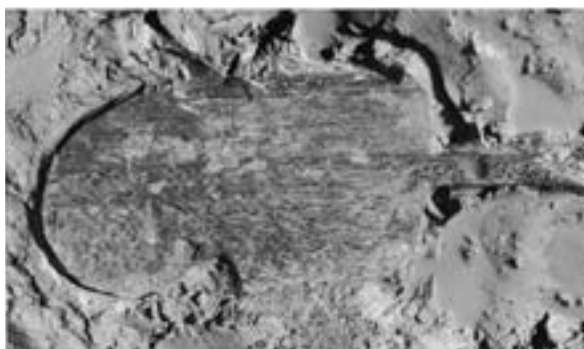


写真6 1-1トレンチ 西側周濠 鋤
(図22-3) 出土状況 (西より)

(3) 鶏形木製品の出土状況

西側周濠の外縁に近い地点（5 D19N区）から2点の鶏形木製品が出土した。周濠外縁端から濠内側へ70cm余のところに幅20cm・長さ190cm・厚さ0.6cm余の板が周濠外縁にほぼ平行して検出された。板は内側にやや傾いており（20cmで2cm）、板の表裏は腐蝕によって整形時の痕跡をとどめていないが、穿孔・刳込み・突起等の加工は認められない。

板の上から2点の鶏形木製品胴部が検出された（図9）。2点とも鶏の背側を板の縁にほぼ揃え、脚部側を板の内側に向けている。鶏形木製品1（図18-1）は脚部側が若干浮いていて板との間に3cm余土砂があるが同2（図18-2）は板に密着している。（2点の鶏形木製品と板との関係は、鶏形木製品が検出されたときに作業員がとっさに取上げてしまったため出土の原位置は自分の眼では確かめていない。前述の出土状況は、取上げた直後に板の上に付着していた朱の痕跡—鶏形木製品には両面に朱が塗られている—と板上の土の堅さから復原した。）

なお、板、ならびに鶏形木製品の出土層位は、周濠内堆積土である黒色粘土層Ⅱと黒色粘土層Ⅲの間にある灰色砂層の下部である。

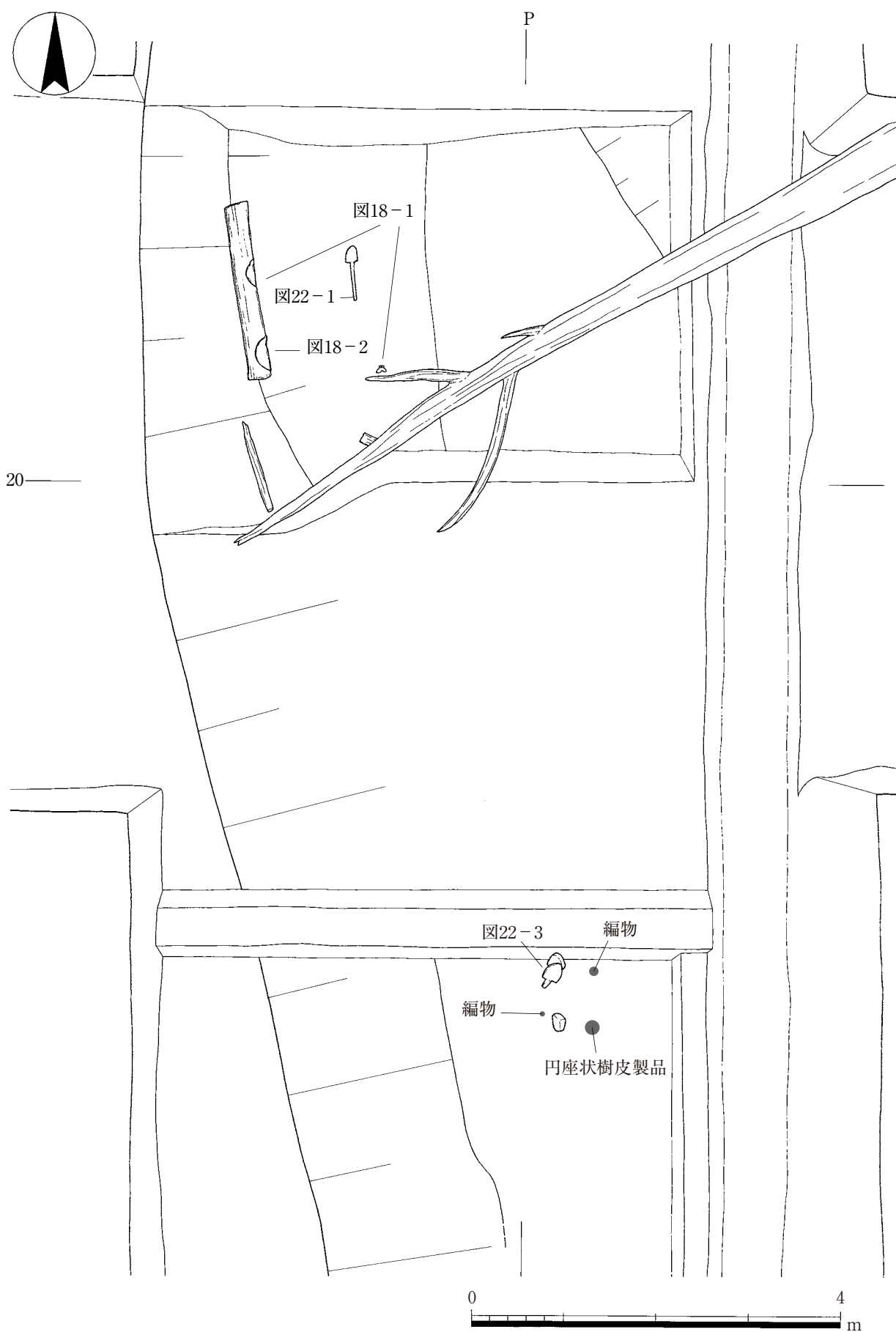


図9 1-1 トレンチ周濠内遺物出土状況 (1/60)

板の南端から東へ120cm余の地点の黒色粘土層Ⅱ、あるいは同Ⅲから鶏形木製品の頭部が1点検出された。とくに共伴遺物はない。後日、整理の段階でこの頭部と胴部1が接合し同一個体であることが明らかとなった。胴部2の頭部は不明である。

第3節 西北側周濠の調査（第1次調査）

纏向石塚古墳周濠の西北側を確認するため5DUラインに幅4m・長さ32mのトレンチを設定し、発掘した。周濠内は土地所有者との関係で完掘していないが、墳丘端と周濠外縁を確認することができた。

周濠内の堆積土は、西側周濠とほぼ同じであるが、植物層下の黒色粘土層内に砂層を認めることが比較的多かった。周濠内は部分的な発掘のため、遺物は多くはないが、黒色粘土層Ⅱ・Ⅲの土器片は纏向2式が下限である。



写真7 1-2トレンチ（北より）

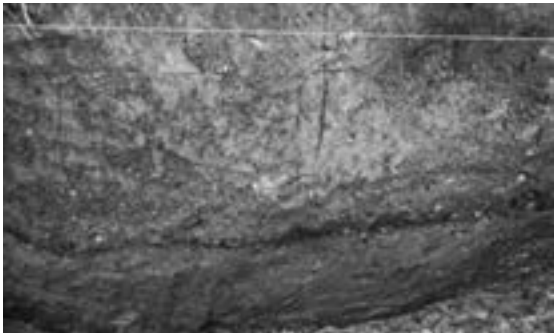


写真8 1-2トレンチ東壁土層堆積状況（西より）

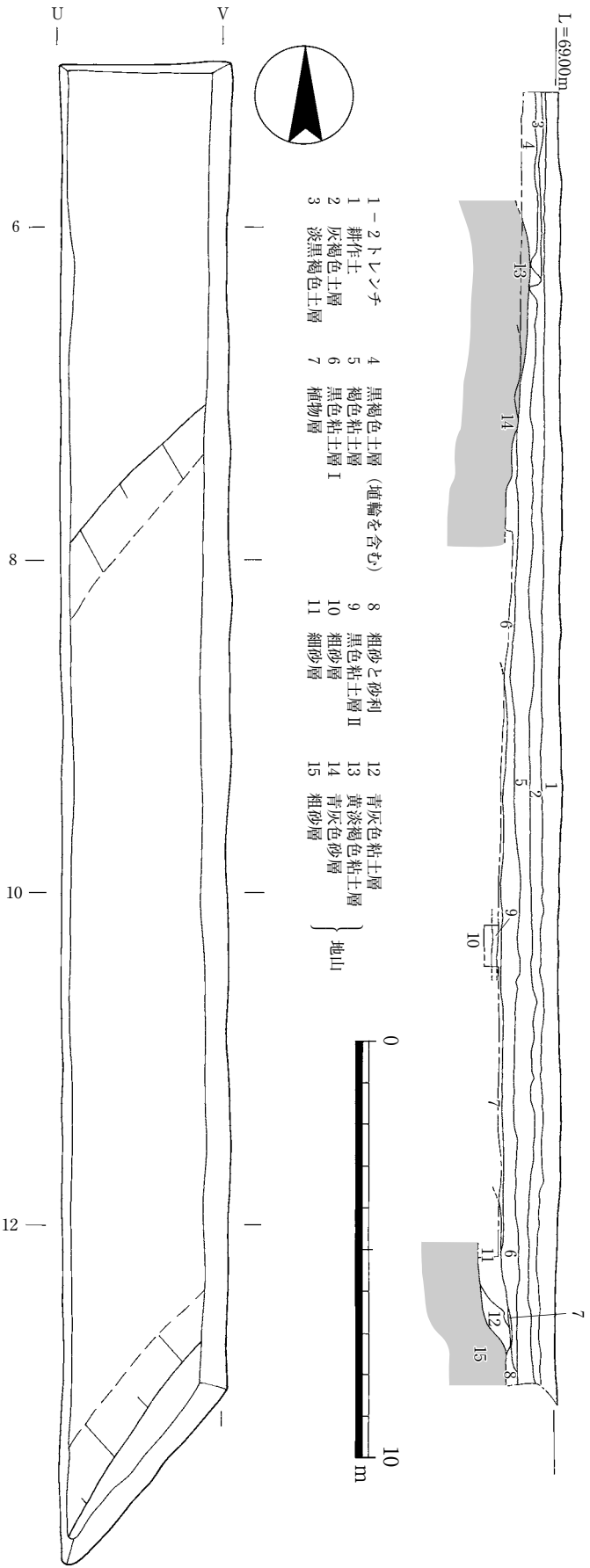


図10 1-2トレンチ平・断面図（1/160）

第4節 南側周濠の調査（第2次調査）

さきの調査において、墳丘の西側に幅20m・深さ1.5mの周濠が墳丘にそって60mにわたって正円形の弧を描いていることが確認されていたが、今回墳丘の南側に接した水田に材料置小屋及び家屋建築の届出があり、当初よりこの地は、西側の周濠を復原してくると墳丘内にあたる部分と予想され、また用地東側では周濠にあたる可能性も予想されたので墳丘範囲及び周濠確認の目的で、昭和50年5月15日から6月4日まで事前発掘調査を行った。

なお調査対象地の東側は他の人の土地であり田植の時期にも近く、経費面でも困難があったため全掘することができず、トレンチ調査を行った（図11）。

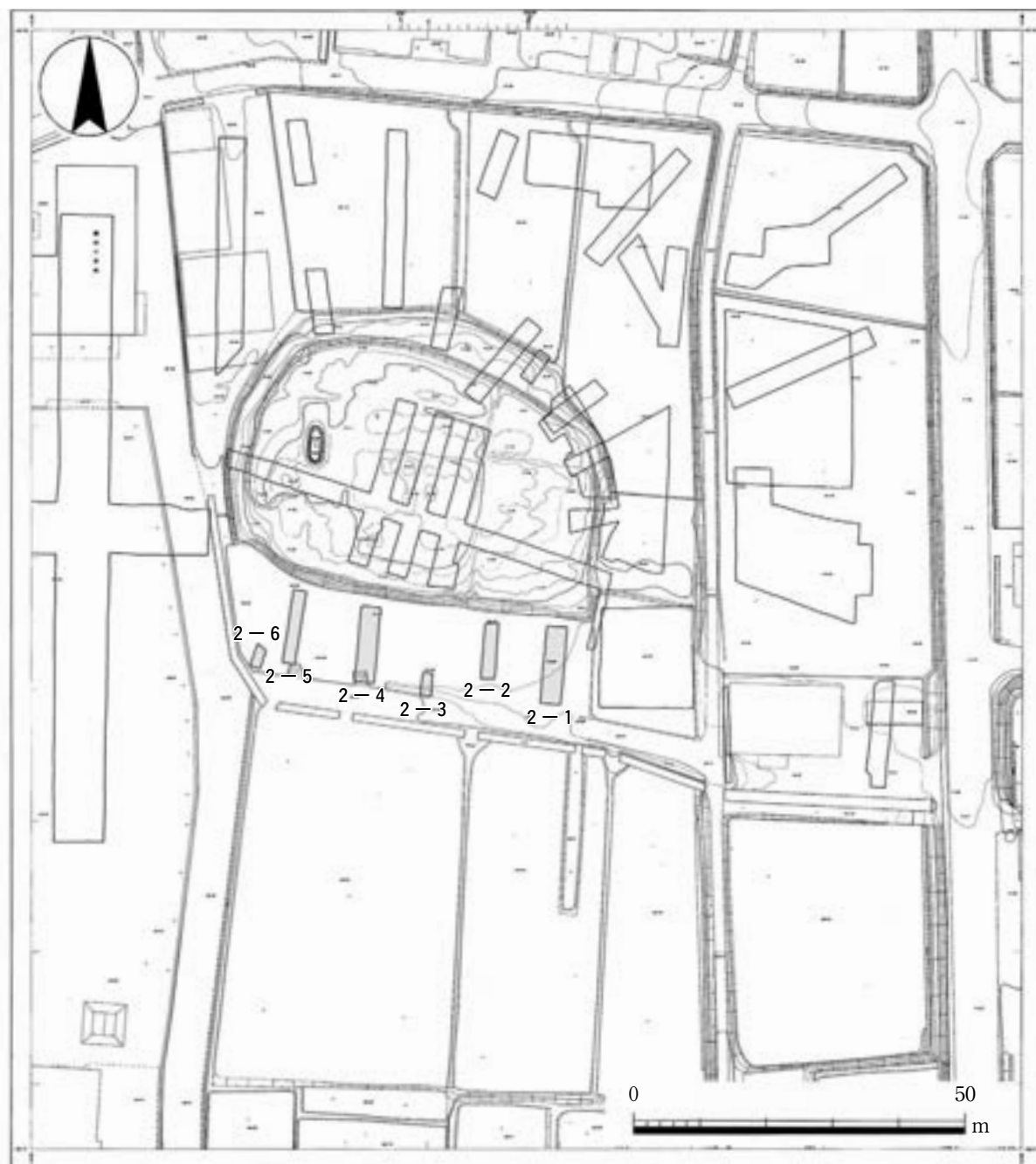


図11 纏向石塚古墳第2次調査地位置図（1／1,000）

(1) 現 状

調査の対象となった地は、現存する墳丘の南裾に隣接する幅約13m、長さ70mの細長い水田である。この土地は、現存の墳頂上より約2.5m低く、しかも南側の水田面との比高差が約1mあり、周囲の水田面より一段高くなっている。

外形図でも観察されるように現存する墳丘の南側は、東西にはほぼ直線に残存していて不整形な状態を呈し、水田によって、墳丘が削平されたことを示している。この裾部には数ヶ所にこぶし大の自然石で積まれた石垣がみられたが、これは、土砂流出防止のもので後世に築いたとの土地所有者の話である。

また墳頂部は戦時中砲台が備えられていた所で、そのおり運搬用道路を墳丘の東南すみから南側につけられていたとのことで、現在、南側の水田内に一部畑地となって残存している。

しかもこのときに盛土が運び出されたことを付記しておきたい。



写真9 2-1 トレンチ 南側周濠の調査
(北西より)

(2) 周濠内の堆積土と遺物出土状況

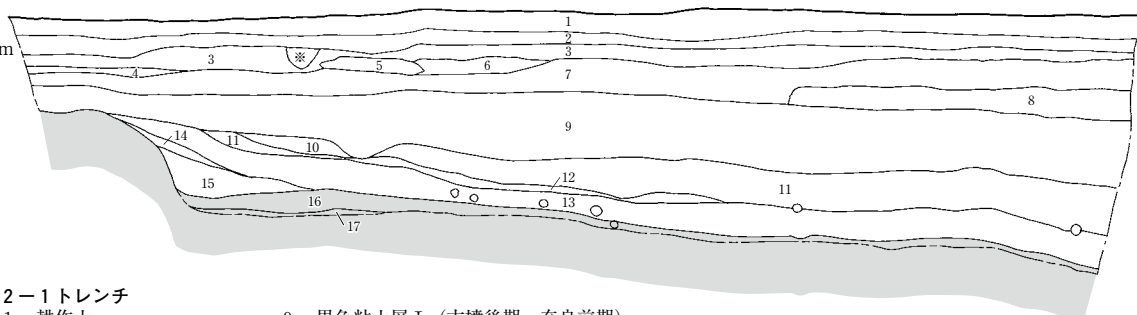
調査の対象地が、東西に細長い水田であったので幅2mのトレンチをほぼ等間隔に南北に6ヶ所入れた結果、遺構として東側で周濠及び墳丘端部を確認した。また西側では、弥生時代後期（近畿第5様式）の土器を含む包含層を検出し、南側での墳丘の形状を知ることができた。

現存する墳丘東南近くに入れた第1トレンチにおいて周濠を検出した（図12・写真9）。トレンチ内においては、周濠の両端を確認できなかったが、トレンチの北端において墳丘端に近く、濠底部は青灰色砂層を掘り込んで、墳丘側からわずかな傾斜をなして南に下っている。北側では周濠を埋めたと考えられる黒色粘土層Ⅰはさらに墳丘内に向って堆積しているところから、現墳丘内に本来の墳丘端があると考えられる。

周濠底は南側の最深部で表土下2m60cmを計測することができる。

濠内堆積層は、耕土下に灰褐色土層、赤褐色土層、黒褐色土層（奈良～平安にかけての土師器含有）、さらに黒色粘土層Ⅰ、植物層、黒色粘土層Ⅱとなり濠底の最下層は青灰色砂層となっている。周濠は黒色粘土層Ⅰの下に約20cm～30cmの南側にやや傾斜をもつ自然木を含む植物層で覆われており、植物層の上面には布留式土器片が含まれていた。植物層の上には、20cm～70cmの黒色粘土層が堆積し、下層には森浩一氏の第Ⅱ形式の須恵器、上層で第Ⅴ形式の須恵器、及び土師器を含有していた。これらから、黒色粘土層Ⅰは濠が埋まった時期を想定でき、布留式までは濠としての機能をはたしていたこ

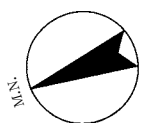
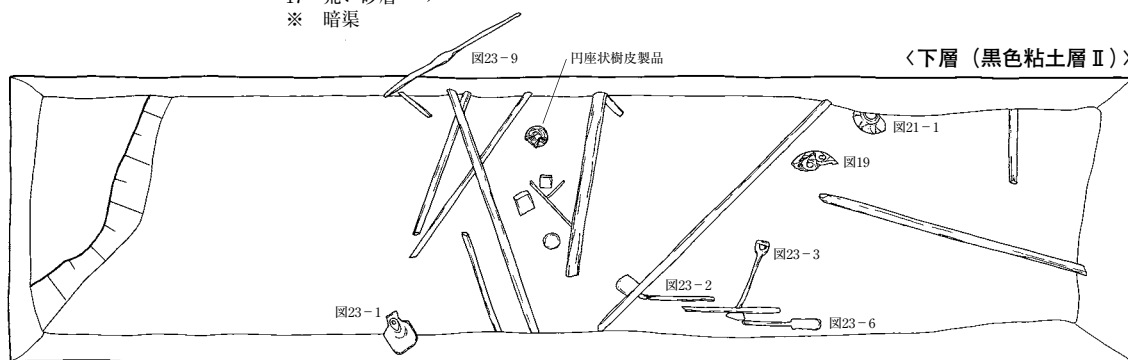
L=69.00m



2-1 トレンチ

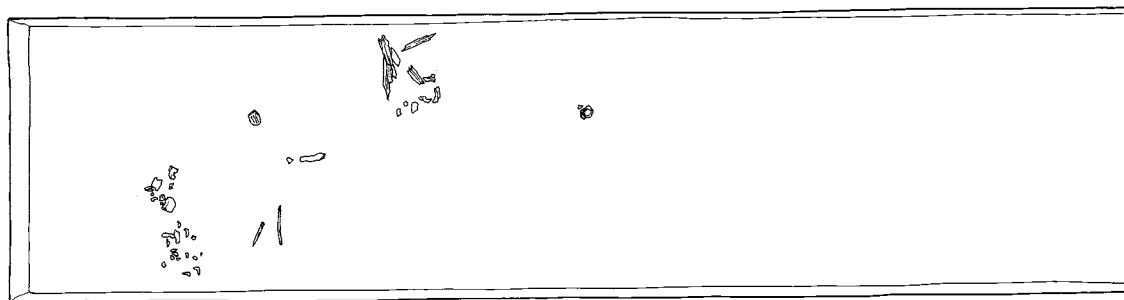
- | | |
|---------------|--------------------------|
| 1 耕作土 | 9 黒色粘土層Ⅰ（古墳後期～奈良前期） |
| 2 褐色土層（床土） | 10 黒色粘土層（粘性なし） |
| 3 灰褐色土層Ⅰ | 11 植物層 |
| 4 赤褐色土層 | 12 粗砂層 |
| 5 黒褐色土層（平安時代） | 13 黒色粘土層Ⅱ |
| 6 褐色土層（土器なし） | 14 青灰色砂層（軟質） |
| 7 灰褐色土層Ⅱ | 15 青黒色土・青色砂・黒色土（無遺物）の混合土 |
| 8 赤褐色土層 | 16 青灰細砂層 } 地山 |
| | 17 荒い砂層 } |
| | ※ 暗渠 |

0 4 m



〈下層（黒色粘土層Ⅱ）〉

〈中層（植物層・砂層）〉



〈上層（黒色粘土層Ⅰ）〉

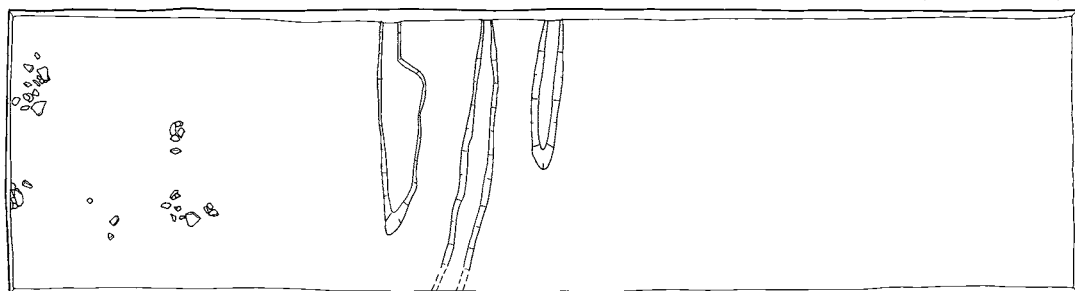


図12 2-1 トレンチ平・断面図（1/80）



写真10 2-1 トレンチ東壁土層堆積状況（南西より）



写真11 円座状樹皮製品

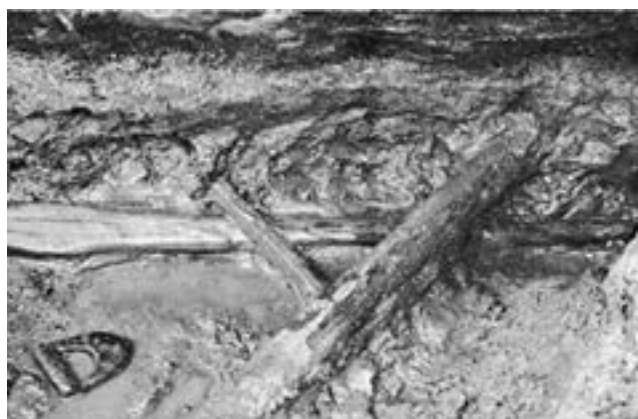


写真12 天秤棒状木製品



写真13 天秤棒状木製品



写真14 鋤等（東より）



写真15 甕（図21-3）

とが考えられる。

植物層のすぐ下には厚さ10cmの粗砂層がみられ、この下の濠最下層である黒色粘土層Ⅱが厚さ30cm堆積し、トレンチ両端にまたがって、加工された丸太棒状木製品が上層、下層に横転して出土し、交差する所もあり投棄された状態であった。弧文円板は濠底近くではほぼ水平に出土し、その他鋤・鍬も底部近くで検出した。これら木製品の他、纏向1式期の壺・甕・鉢の完形品も下層に含まれていた。この下層では他に、完形品以外の土器片は少量にすぎないが庄内型の叩き目をもつ破片は含まれていない。したがって、周濠が掘られた時期は纏向2式以前と考えられる。

（３）弧文円板の出土状況

木製品は、いずれも黒色粘土層Ⅱのトレンチ中央部から南にかけて集中しており、丸太状木製品は中央部では、東西方向に一部交差したが放射状に上下さまざまな方向に向けて検出した。弧文円板は、東南部の濠底直上に文様面を上・円形面を東にして、西側に傾斜して出土した（図12）。他の木製品の関係においても西側近くに鋤4本が、あらゆる方向に刃先を向けて出土している。無雑作に投棄された状態であり、円板と他の木製品とは関連するものは確認できなかった。ただ円板は、同一層位で出土した纏向1式期の土器とほぼ同一レベルであり、弧文円板が埋没した時期が、伴出土器の時期とさほど差はないものと考えられる。

今回のトレンチ内では木製品では農耕具（鋤1・鋤8個体）が多く、しかも使用可能なものが大部分であり周濠内に多量に投棄された意味を解明する必要がある。

第5節 南側墳丘の調査（第2次調査）

第1トレンチの西側に5本のトレンチを入れ、第2、第3トレンチにおいて、墳丘端部を確認した。第4、5、6トレンチなどの西側では、墳丘端部は、調査対象となった水田のさらに南にあることを確認できた。

第2トレンチでは、耕土下に黄褐色土・暗褐色土層（奈良時代の須恵・土師含有）が堆積し、下層の黄色粘土層が南部近くで一段下り周濠になる（図13・写真16）。

この墳丘端は南西方向に延びており、第3トレンチの南端でも第2トレンチと同じ土層下においてわずかに弧を描いて検出した（図14）。これを西側墳丘端線とつないで図上復原すると、墳形は正円形にならないことが判明した。

南側の第4、5、6トレンチにおいては表土下30cmより下には、第6トレンチで厚さ30cm、第5トレンチで60cmの黒褐色土層があり、弥生時代後期（第5様式）の甕・長頸壺・高坏を含む包含層となっている（図15～17）。

この包含層はいずれも現存の墳丘下に延びていることを確認したことから、包含層の時期以後に古墳が築造されたと考えられる。包含層下はまったく遺物を伴わない灰色砂層・灰褐色砂層・青灰色粘土層となり、この地域が、湿地帯であったと思われる土層が堆積している。



写真16 2-2トレンチ（北より）

これら包含層は、いずれも南側において削平され、灰褐色土層が堆積して平安時代の土器（瓦器）が含有することから平安時代には墳丘が一部削平されていたことを確認した。従って、今回の調査地では本来の墳丘盛土は認められなかった。

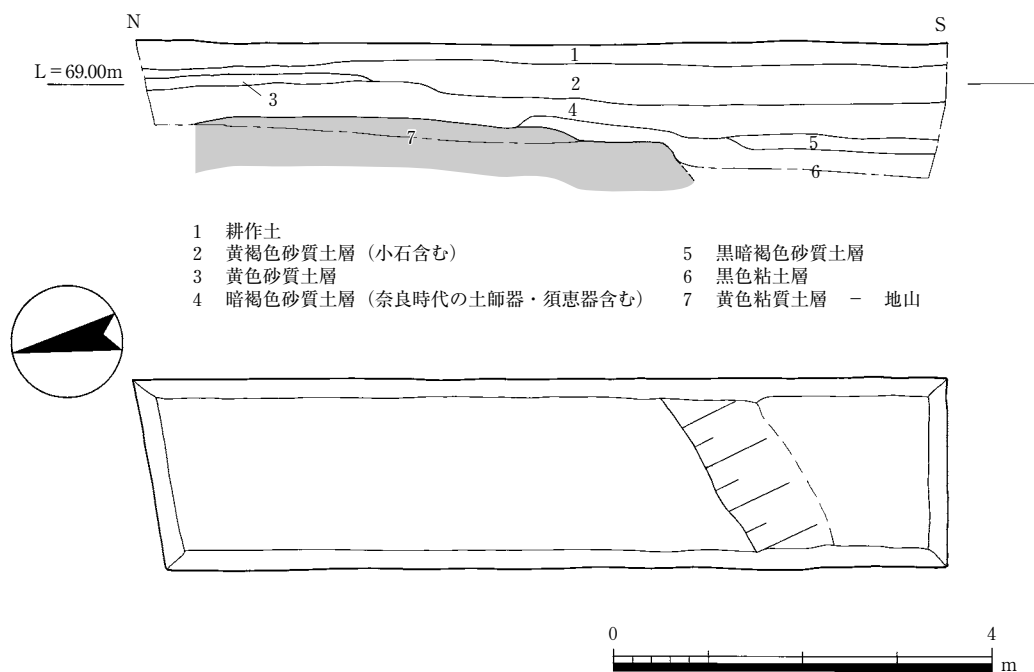


図13 2-2 トレンチ平・断面図 (1/80)

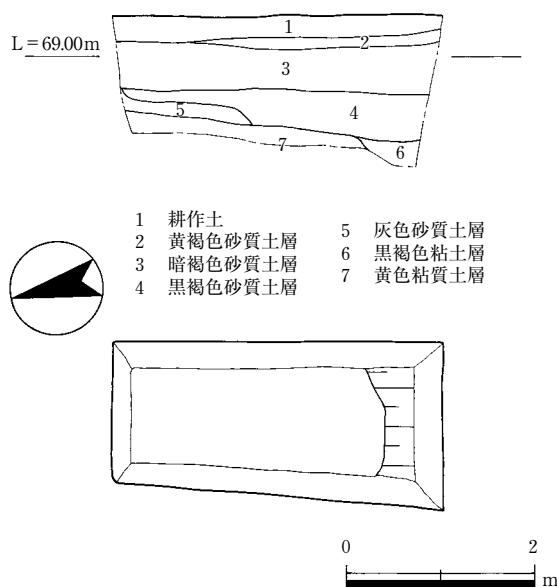
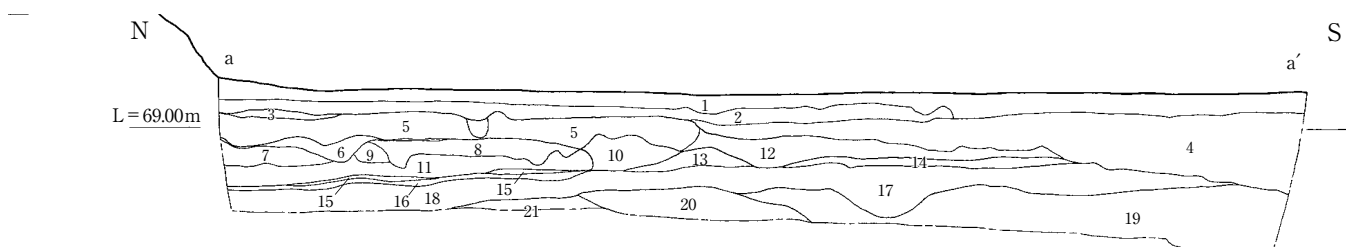


図14 2-3 トレンチ平・断面図 (1/80)



- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1 耕作土 | 12 黒褐色粗砂土層（無遺物） |
| 2 床土 | 13 灰色砂層 |
| 3 暗褐色土層（床土と黒褐色土層の混合土） | 14 黄灰粗砂土層 |
| 4 灰褐色土層（中世土器含む） | 15 赤褐色砂土層 |
| 5 黒褐色土層（縄文1式期の土器を包含する） | 16 青灰色粘土層 |
| 6 暗褐色土層（炭化物含む） | 17 黒褐色粘土層 |
| 7 灰褐色砂層（無遺物） | 18 黒色粘土層（泥湿地を思わせる） |
| 8 灰褐色土層 | 19 黄色粘質土層 |
| 9 赤褐色砂層 | 20 灰色砂土層 |
| 10 黒褐色土層（炭化物含む） | 21 青灰色粘土層 |
| 11 灰色砂層～灰褐色砂土層 | |

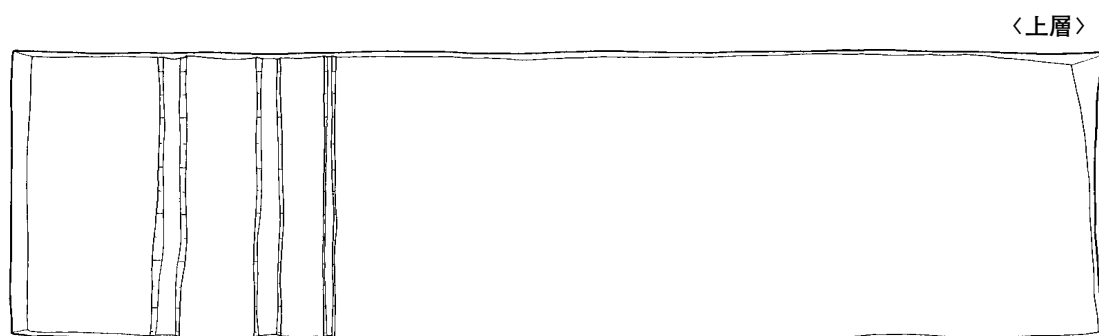
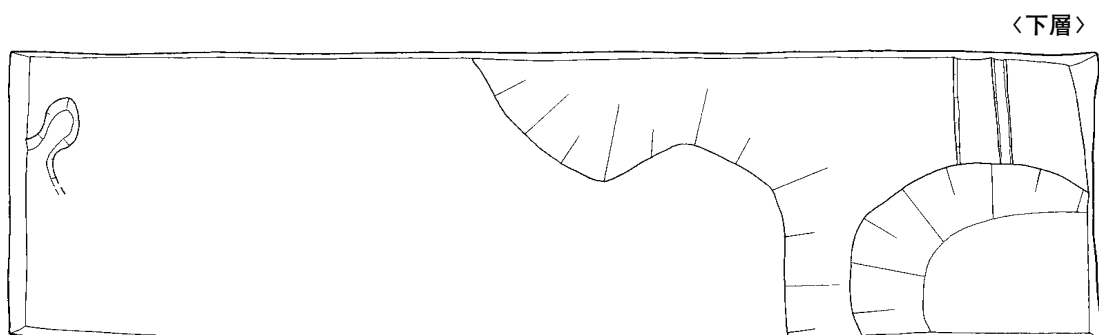
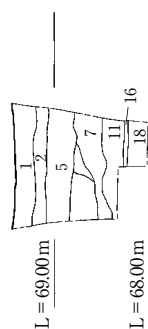
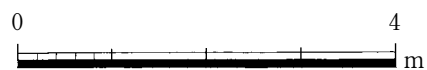
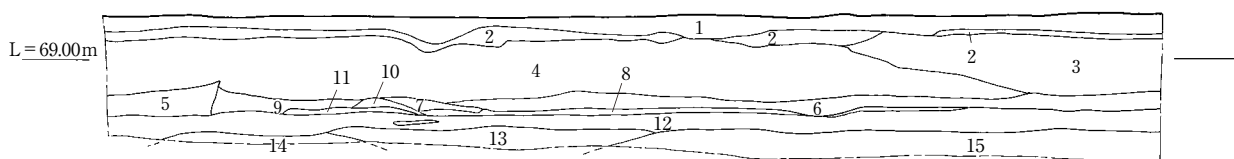


図15 2-4 トレンチ平・断面図 (1/80)



- | | | |
|-------------------|------------------|------------|
| 1 耕作土 | 6 暗灰褐色砂質土層 | 11 灰褐色粘土層 |
| 2 床土 | 7 灰褐色砂層（鉄分含む） | 12 黒褐色粘質土層 |
| 3 灰褐色土層〔室町期の落ち込み〕 | 8 灰褐色粘質土層 | 13 黄灰色粘質土層 |
| 4 黒褐色土層（弥生土器片を包含） | 9 暗灰褐色砂質土層（鉄分含む） | 14 青灰色砂質土層 |
| 5 黒色粘土層（弥生土器片を包含） | 10 灰黒色砂層（鉄分含む） | 15 灰色砂質土層 |

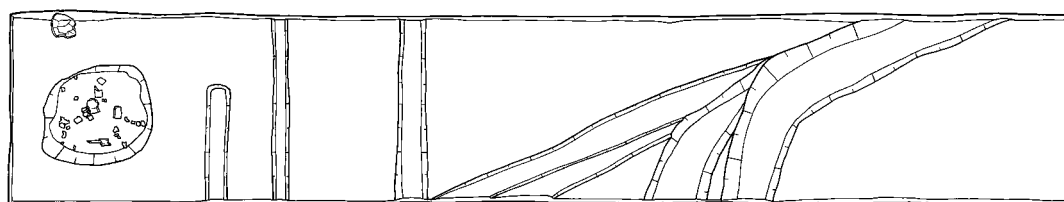
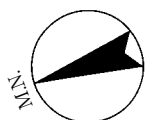


図16 2-5 トレンチ平・断面図 (1/80)

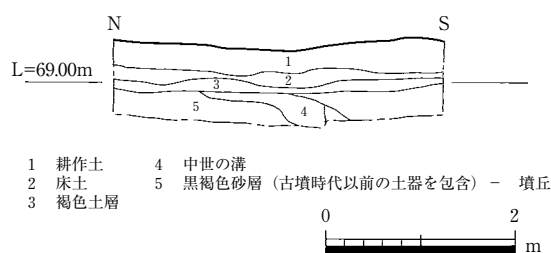


図17 2-6 トレンチ断面図 (1/80)

第6節 まとめ

(1) 周濠掘削時期と存続時期

本章第2・3節で報告したとおり、纏向石塚古墳の周濠は黒色粘土層Ⅰ上面ではほぼ水平に埋没した。その時期は、古墳時代後期（森浩一氏須恵器第Ⅲ型式期）である。黒色粘土層Ⅰと黒色粘土層Ⅱの間には植物層があり、周濠全体を密閉している。その時期は、古墳時代中期（森浩一氏須恵器第Ⅰ型式後半期）である。この2つの層位が周濠の存続時期を示すものであろう。

周濠掘削時期は黒色粘土層Ⅱと同Ⅲに含まれている土器によって検討しうる。黒色粘土層Ⅱには纏向1式土器破片と同2式・3式土器破片がある。両者の比は本章第2節で指摘したように、45片：17片で、圧倒的に纏向1式期の土器が多い。その上、南側周濠内からは同時期の完形品が3個検出されている。

なお、本章第5節で報告した墳丘の調査では弥生時代近畿（唐古45号堅穴上層併行）第5様式の堆積層が墳丘下にあることが確かめられ、かつ、周濠はこの堆積層を切っている。

これらの事実から考えられることは、

①周濠の掘削は近畿第5様式期（弥生時代後期）よりは新しく、おそらく濠底出土の3個の完形土器に象徴される纏向1式期であろう。

②植物層堆積時点まで周濠はオープンであったため纏向2式・3式期の土器がおちこむことは十分にありうる。つまり、黒色粘土層Ⅱ内の纏向2式・3式期の土器は滞水状態の周濠の存続時期を示すものであろう。

③纏向4式期の土器が認められないのは、東田地区に同時期の遺構が検出されていないことと対応する。つまり周濠はオープンであったけれども土器の入りうる機会は少なかったものと思われる。言いかえれば、纏向石塚古墳が纏向4式期以降に築造されたとは考え難いことを示す。

要するに、纏向石塚古墳の周濠は纏向1式期に掘削され、同4式期まで滞水状態でオープンであった。それが、須恵器第Ⅰ型式後半期には植物層によって密閉され、幸いにもその後の遺物の混入を防いだ。

(2) 周濠内の遺物によって古墳の築造時期を限定しうるか

古墳の周濠は、本来オープンなものである。従って、現代も水を湛えている古墳の周濠には現代の器物が当然入りうる。それが重いものであれば周濠内泥土の最下層にも達するであろう。

そしてまた、古墳の周囲に仮に縄文時代の集落跡があれば、古墳築造時、あるいは周辺の開墾時等に周濠内に縄文土器が入ることもまた大いにありうる。

つまり、堀・池・溝等には、その状況に応じて古い器物も新しい器物も入ることは一般的な現象である。反対に、その構築物の機能によっては、機能時点の器物があまり入らないこともありうる。

古墳の周濠とは、本来上記のような性格のものであろう。従って、周濠内の遺物によって古墳の築造時期を推定しようとすることは極めて困難であり、また危険である。

このような条件を頭に入れた上で、なお、前項では周濠内の遺物によって周濠の掘削時期を推定し、古墳の築造時期に及ぼしたいと考えている。纏向石塚古墳に限ってそれが有効であろうと考える根拠はつぎの3点である。

①周濠が比較的早い時期に明確な土層によって密閉され、以後の器物の混入を防いだこと。

②密閉土層以下の各層に完形品を含む比較的多くの土器が含まれていて、ある程度の量的な操作が可能であること。

③古墳時代の葬送儀礼にかかわる直弧文の祖型を刻んだ「弧文円板」が検出され、文様の構成原理上、少なくとも岡山県地方の第2段階（向木見型）の特殊器台文様よりは古い段階に比定しうること。

上記3点の好条件に恵まれてはじめて、周濠内遺物によって周濠の時期を推定し、「墓」にかかわる「弧文円板」を通じて古墳築造時期に及ぼすことが可能となった稀有な例であろう。

（3）纏向石塚古墳周囲の黒色粘土のおちこみは、はたして同古墳周濠なのか

纏向石塚古墳のある東田地区には、纏向1式期から同3式期の水路と土壙群がつくられている。従って、古墳周囲の「おちこみ」も古墳築造以前から存在していた可能性はないのか、という疑問は調査期間中から多くの方々から頂いたし、私を含めた調査者もその規模があまりに大きいことや東田地区から埴輪片が点々と検出されていることもあって、大いに疑った。

しかし、この疑問にはつぎのように答えることができる。

①「黒色粘土のおちこみ」はその外縁が南北60mの規模で正円に近い弧を描いており、その内縁は古墳墳丘端で終ること。

②仮に、この「おちこみ」が古墳築造以前から存在していたとすると、不整円形、あるいは不整馬蹄形の幅20m余のおちこみの中の島状の地点にたまたま古墳をつくったこととなり、考え難い。その上、もしそうであったとすれば古墳築造時の新しい器物（埴輪や土器等）が多少はおちこみ内に入りこんでいるのではないか。それが認められない。

③すでにあったおちこみを若干整形して周濠としたと考えても、その痕跡はどの部分の堆積土層にも認められない。

つぎに、古墳周濠であるとする、その中に日常使用の土器等が比較的に数多く含まれていること自体おかしいのではないか、という疑問がある。

しかし、従来、古墳周濠の調査はあまり行なわれていないため、古墳周濠内遺物として正常か異常かを検討する類例に乏しい。むしろ近年の周濠調査の例に照らせば日常使用の土器や木製品が含まれている方が常態と言えるようである。

（4）纏向石塚古墳の原形

古墳の現状は、本章第1節で記述したとおり長径60mの不整形の平坦な小丘にすぎない。かつて、「奈良県纏向遺跡の調査」（古代学研究 65）で周濠外縁の形状を根拠として復原した「径70m～80m

の円墳」説は、1975年5月の南側周濠の調査（本章第5節）によって訂正しなければならない。

南側周濠部分では、周濠外縁の調査は実施できなかったが、墳丘端が推定円墳の墳域より少なからず内側で検出された。この事実と西側周濠の事実を合わせると、墳形は南北60m以上75m、東西60mの扁円形となる。

さらにここで検討すべきことは、現墳丘東側の、他より50cm余高い水田が俗称「タカマル」とよばれている点と、より東側の水田畦畔が整然とした条里地割の中で異質な区画をもつ点である。

「タカマル」は、太田北微高地のたかまりと一致するとは言え、「かつて高まっていた地域」と考えると古墳の「前方部」を表現することとなるし、異質な畦畔の走向をたどるとその規模も想定できる。

畦畔痕跡によると、「前方部」は現墳丘東端から東へ75m・幅45mをはかることができる。これを「後円部」（現墳丘部分）と合わせると、全長135mの前方後円墳を復原することができる。この場合、前方部端と辻地区土壌4は60mの距離であり、仮に幅20mの周濠がめぐるとすれば、40mの至近距離となる。そうすると豊富な遺物をもつ辻地区土壌4と建物は、纏向石塚古墳の祭祀用施設の可能性が強まる。ただし、この復原は現地形に照らしても十分な根拠をもち得ないので、検討の対象にとどめておかねばならないだろう。

現段階では、纏向石塚古墳の墳形は、南北60m以上75m・東西60mの扁円形で、東側に張出す可能性がある、としておきたい。

（石野・久野）

第7節 纏向石塚古墳周濠出土の木器・木製品

ここに記述する木製品は、纏向石塚古墳の周濠が掘削された時期以後、すなわち纏向1式期に集中的に埋没したと思われるものである。農耕具を中心として、信仰・呪術に関わるものなどが出土している。だが通常農耕具としての機能を果たす鋤も、出土遺構から推すと、周濠の掘削または排土に使用された土木用具の役割を担ったのであろうと考えられる。

（1）信仰に関する用具

纏向石塚古墳の西側周濠からは、鶏とみられる鳥形に切り抜かれた板が2点出土している。1点は頭部を欠失しているが、他のものは頭部に鶏冠が削り出され明らかに鶏と認められる。そしてその出土遺構との関連から、信仰かたは呪術に関した用具と推定される。また、南側周濠からは弧文円板が出土している。

1. 鶏形木製品

鶏形木製品1（図18-1、図版89-18）1枚の板を削って鶏形に作りだしている。嘴と尾の部分は欠損する。安定感のある胴部から細い頸を作りだし、鶏としての性格を強調するかのごとく、やや大きく感じられる頭部にいたる。頭の上には鶏を特徴づける鶏冠を削りだしている。鶏冠の中央には半円形の穴を削り抜き、ここに紐等を通して器体を吊るしたのであろうか。脚の部分も本来表現されていたと思われるけれども、現状では破損している。腹部を厚くして頭部に行くに従って薄く仕上げられ

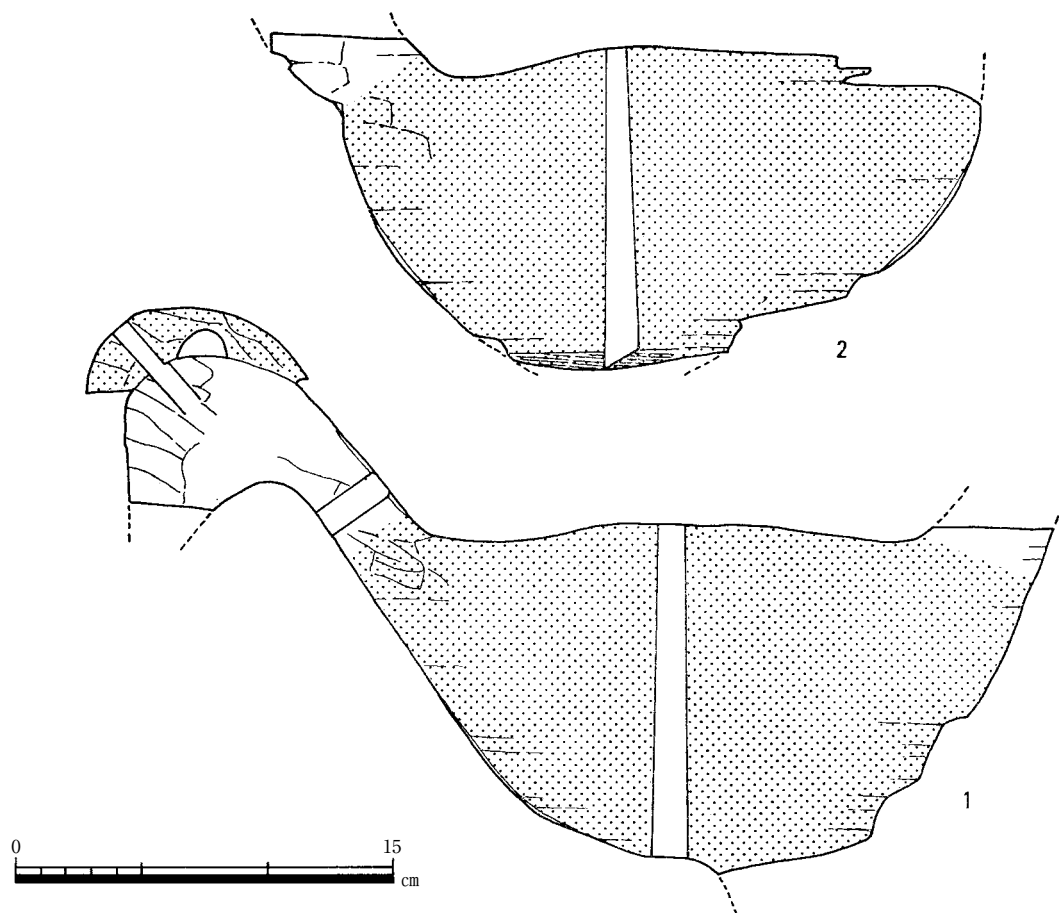


図18 纏向石塚古墳西側周濠 鶏形木製品実測図（1／3）（網目は朱彩、白ヌキは断面）

ているのは、鶏形に安定感を抱かせるためであろう。鶏冠部は一面を頭部より段をつけて削り込んでいる。表裏面とも鈍状の利器で整形し、鶏冠の細部の整形には刀子が用いられているようである。胴部は側面をもふくめ全面に朱彩している。鶏冠にも朱彩が施されているが、表面と側面のみで裏面にはない。全長39.0cm、高さ22.3cm、胴部の幅13.9cm、厚さ0.8～1.5cm。鶏冠の長さ8.8cm、高さ2.0cm。頭部幅2.9cm、厚さ1.1cm。〔柾目、ヒノキ、5 D19N〕

鶏形木製品2（図18-2、図版89-19）1枚の板より鶏形を削りだしたものと思われる。頭部と尾、脚部は折損している。形状は鶏形木製品1に類似しているが、胸部が鳩胸のようにやや張り出し、頸部との境目を抉り込んでいる点と、脚部の位置が器体のほぼ中央にきて、鶏形木製品1よりも整った形であるところがやや異なる。断面はやはり鶏形木製品1と同じく腹部を厚くしたつくりである。両面とも鈍で整形され、側面もふくめ胴部全面に朱彩されている。現存長28.0cm・高さ13.8cm。胴部幅12.7cm・厚さ0.8～1.4cm。〔柾目、ヒノキ、5 D19N〕

2. 弧文円板（図19、図版93）

一枚の板である。表面の細線文様は、断面V字形の鋭利な刃の工具で刻んでいる。文様の削り抜きには、けびき線を引いたようで一部にその痕を残す。削り抜き部側面には、一部で横位に削られた刀

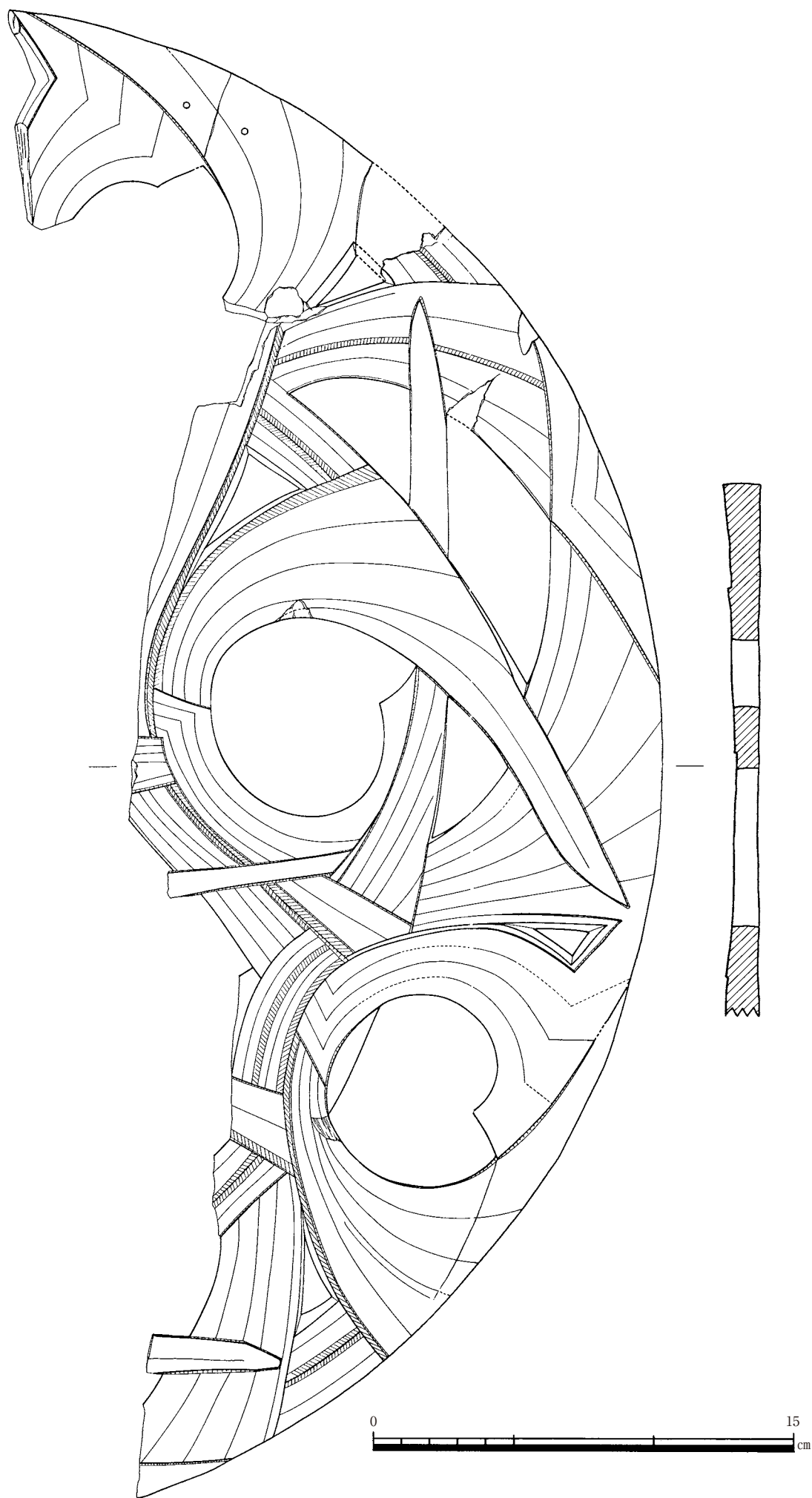


图19 纏向石塚古墳南側周濠 弧文凹板実測図 (1 / 2)

子状の痕が残る。段を形成して表現した文様のうち、曲線の場合は残存最大刃幅0.6～0.7cmの工具で線に沿って削る。直線では線にむかって直角に削っている。

外周に残る2ヶ所の小孔は、径0.2cmの円形で錐を使用したと考えられる。孔の小口はやや磨り減る。紐が通されていたのであろう。2ヶ所の小孔の中央で割れているので、とじ合わせるための孔であったかもしれない。

裏面は木目に対して約30度の方向で、幅0.5～0.6cmの平行した鈍の整形痕が全面に残る。外周側面は1.5cm程の間隔で次々に削っている。円形の板であったとすれば、復原直径が56.0cmになる。残存直径54.6cm、残存幅19.6cm、最大厚1.4cm〔柁目、南側周濠〕

（２）土木・建築に関する用具

土木用具と考えられるものに鋤身5点、鋤の柄部把手1点の出土がある。鋤身は現用のスコップ形のもの3点と、櫛形2点の2種類に分れる。

１．スコップ形の鋤（長柄鋤）

１．（図22-1、図版90-20）柄と身とを共木で作り角度がない。身は肩部をほぼ一直線に作り、横断面は表面を平坦にし、裏面は弧状をなす。先端と両側縁を薄くし刃部をなしている。柄は面取りした楕円形の長い棒の先端に、逆三角形環状の把手が共木で削り抜かれている。把手は横木の両端が突出したつくりである。刃幅0.5cmの鈍状の工具で内外面とも調整されている。身と柄の現存全長79.1cm、身の長さ18.1cm。肩現存幅13.4cm、厚さ0.6～3.2cm。柄の長さ61.0cm、径3.1×2.5cm。把手の幅11.2cm、長さ12.1cm、厚さ2.1cm。〔柁目、カシ、5 D19N〕

２．（図22-3、図版90-23）身は先端および両側縁を薄く作り、横断面は両側縁にむかってやや弧状をなす。肩は両側に約10度おちており、足をかけたため磨り減っている。柄は断面円形の一部を平坦にし、握るにやや不便を感じる。握り部は不明である。現存長41.4cm、身の長さ28.3cm、幅16.4cm、厚さ0.5～2.8cm。柄の現存長13.1cm、径2.8cm。〔柁目、カシ、5 D21N〕

３．（図22-4、図版90-22）身は先端および両側縁を薄くしている。横断面は裏面が欠損しているので明確ではないが、表面を平坦にし裏面を弧形にする。他の鋤と同じ形状をなすものと思われる。柄は付け根で欠失しているので明らかでないけれども、楕円形の棒であったと思われる。身の全長26.3cm、幅16.1cm、厚さ0.4～2.5cm。柄の断面3.4×2.5cm。〔柁目、カシ、5 D19N〕

４．（図23-2、図版94-16）身は表裏面と両側縁にむかって薄く削り刃部をつくる。刃部は全て磨り減る。肩部は一直線で磨滅はない。柄は基部が楕円形で先端にむかって細くなりつつ円形になる。柄の先端には逆三角形環状の把手が共木で削り抜かれる。横断面は方形であり、横木を太くつくる。横木外側面には、指にそった磨滅が認められる。残存長79.6cm、身の残存長23.0cm、幅18.9cm、最大厚2.3cm。柄の径（先端）2.8×2.4cm、把手の長さ11.5cm、幅11.4cm、横木の横断面3.0×2.7cm。〔柁目、南側周濠〕

５．（図23-3、図版95-23）身部の短小な鋤で1～4とは別な種類であるかもしれない。柄と身は共木。身の裏面は柄と身の接点から柄側約5.0cmのところより、柄下面に対し7～8度の角度で削り

出される。面は平坦である。表面は側縁を薄くし刃部をなし、横断面を弧状につくる。刃部先端は幅1.5cm程を特に角度を急に（下面に対し14度）削り込んでいる。肩部は両端にむかってやや下がり、両肩の位置は0.7cm上下する。下のほうはやや幅広で、足がかけられたものか磨滅が認められる。

柄は身との接続部下面を平坦に削る他は、ほぼ円形の棒につくられる。棒の先端には、逆三角形環状の把手が削り抜かれる。横木の内側が磨り減り、外側面の一部に削り痕が残存する。

刃部の磨滅は認められず、身も短小であるところから、鉄製刃先の着装も考えられるが、その当り痕は確認できない。

残存全長90.6cm、身の長さ10.6cm、肩幅14.3cm、最大厚1.6cm。柄の基部幅4.2cm、厚さ2.0cm、中央部径3.0×2.8cm。把手の長さ13.4cm、幅12.0cm、厚さ2.0cm。〔柁目、南側周濠〕

6.（図24-19、図版95-18）身は5と同様短小。裏面はほぼ平坦。刃部は片側が使用中に破損したのか大きく欠けている。刃先は磨り減る。肩部はほぼ一直線と思われ、残存する肩は磨滅がある。柄はほぼ円形の棒で先にむかうに従って細くなる。先端は磨滅しており、これよりさらに続くか明らかでない。

全長45.5cm、身の長さ11.6cm、幅13.9cm、最大厚2.5cm。柄の径（先端）2.7×2.3cm。〔柁目、南側周濠〕

7.（図24-22、図版95-22）身は短小。身の裏面は平坦。表面横断面は両側縁が薄い弧状をなす。刃先は一部が欠損するなど使用の痕が激しい。肩部は大半が欠失する。両端にやや下がり、両肩基部の位置が0.5cm上下する。5と同じ仕様であると思われる。柄は基部が残るのみである。丸棒である。残存長18.8cm、身の長さ13.5cm、残存幅12.6cm、最大厚2.4cm。柄の径3.1×2.6cm。〔柁目、南側周濠〕

8.（図24-17、図版94-15）身部のみが現存する。裏面平坦。表面は両側にむかって薄くつくる。刃部は残らないが、身部の肩に残る痕跡から身と共木で、幅4.0cm程のものであったと推測される。

身の長さ12.7cm、残存幅12.1cm、最大厚2.5cm。〔柁目、南側周濠〕

2. 櫛形の鋤（着柄鋤）

1.（図22-8、図版91-25）柄と身とも共木で作る。身の先端を直線に作り、また先端にむかいやや削り込まれた長方形を呈する。横断面は一面を平坦にし他面は鎗状の反りを作り、先端にむかって薄くして刃部をなす。両側縁には刃をつけていない。柄は破損しているが丸棒であろう。土を掘削して溝や穴を掘る土木工事用のために、身を細く作っている。身の長さ19.7cm、幅6.2cm、厚さ0.3～2.3cm。柄は直径2.5cm。〔柁目、カシ、5 D19N〕

2.（図22-5、図版90-24）身は肩の部分を残すのみである。肩部の形からみて身は長楕円形をなすものと考えられる。残存状態から推すと、両面とも側縁にむかって薄くなる弧状に作られたであろう。柄は丸棒としている。身の形やその横断面からすると、土すくいの機能をそなえた鋤ではなく、土を掘り削ることを主眼として作られた鋤と考えられる。現存長12.4cm、身の厚さ1.1～1.9cm。柄の長さ9.3cm、直径2.5cm。〔柁目、カシ、5 D19N〕

3.（図23-6、図版94-14）身部は裏面をほぼ平坦に、表面は側縁を薄くし刃部をなす。肩部は両側の位置が1.0cm程上下し、上位の肩がやや幅広である。柄は歪んだ楕円形に削られた棒であるが、先

が折損する。全体に腐蝕が進行し使用痕は明らかでない。

残存長79.5cm、身の長さ31.0cm、幅12.9cm、最大厚3.1cm。柄の径4.1×3.2cm。〔柁目〕

3. 鋤の柄頭

1. (図22-2、図版90-21) 逆三角形環状に、柄と共木で作られた把りである。把部は現在では3片しか残らないが、その形状からすると力の強にかかる横木をやや太く作ったものと思われる。横木の内側には、指の幅程の磨り減った部分が3箇所あり、この部分が強く握られたのであろう。楕円形に握りやすく削りだされている。柄も折損している所以この把部のものとは断定できないが、楕円形の長い棒であり鋤身にむかって太くなっている。把部の長さ推定15.0cm、幅推定16.7cm、厚さ1.5cm。柄部現存長26.0cm、径1.9×3.0cm。〔5 D19R〕

2. (図23-4) 柄と共木である。削り抜き部が小さく、手を挿入するのに困難をきたしたと思われる。横木は楕円形につくり他の部分より厚くする。

全長10.6cm、幅9.2cm、横木の径3.1×2.2cm。〔柁目、南周濠、1トレ黒粘Ⅱ〕

4. 鋤の身部破片

1. (図24-21、図版95-21) 肩部の破片である。肩は両側にやや下がると思われる。柄は肩に残る痕跡から丸棒であったと推測される。

残存長12.9cm、残存幅10.9cm、最大厚3.1cm。〔柁目〕

2. (図23-5、図版94-17) 肩部から側縁にかけての破片である。残存長9.1cm、残存幅10.5cm、最大厚2.2cm。〔柁目〕

3. (図24-20、図版95-20) 側縁部の破片である。残存長7.9cm、残存幅9.5cm、最大厚2.0cm。〔柁目〕

4. (図24-18、図版95-19) 側縁部の破片である。残存長13.2cm、残存幅7.9cm、最大厚2.2cm。〔柁目、南側周濠〕

5. 広鋤 (図23-1、図版94-13)

頭部を狭く削り込み、その部分に柄つぼを穿孔している。柄つぼは110度程の鈍角に穿孔されている。柄つぼの周囲には舟形突起を設け、使用時の衝撃に備えている。突起は柄つぼ部分を最も高くし、刃部に伸びながら次第に不明瞭となる。

頭部端は一部分を破損しているが、一側にむかって下がっている。また頭部裏面の柄つぼの上には、あり形のみぞを彫り込む。磨り減りは認められない。彫り込み部から頭部上端にむかっては、角度を急に削りとられている。刃部は両側および先端を薄くつくる。先端部は磨滅している。

全長27.3cm、刃部幅20.4cm、同厚さ0.6cm。頭部の長さ9.2cm、幅10.3cm、厚さ1.3cm。柄つぼの径3.9×3.0cm、舟形突起の高さ1.6cm。あり形のみぞ上端幅1.7cm、下端幅2.0cm、深さ0.7cm。〔柁目、南側周濠〕

(3) 用途不明の木製品

1. (図22-10、図版91-27) 横断面矩形の細長い板であり、その幅広い面に方形の穴が2箇所にある。現状では2箇所以上の穴は判らないが、格子の柁木また飛躍すれば大足の縦柁木とも考えられる。

同様の仕口のものが東田地区北溝からも出土している。現存長27.7cm、幅2.3cm、厚さ0.8～0.9cm。方孔0.8×1.2cm。〔ヒノキ、5 D23N〕

2. (図22-9、図版91-28) 細長い棒の一端の幅広い面を彫り込んだものである。横断面は彫りのある面がわずかに盛り上る矩形を呈する。全長32.5cm、幅2.4cm、最大厚1.7cm。彫り込み下底の幅1.6cm、深さ0.4cm。〔柁目、5 D19R〕

3. (図22-12) 柄状の棒であり、一端は折損する。角棒の一面を丸く削り磨き、先端を丸く仕上げている。現存長50.0cm。〔5 D21N〕

4. (図22-11、図版91-26) 木の枝を利用したものと思われ、表面を幅0.5cm前後に刀子状の工具で削っている。一端は折損するが、他端には多方面より抉りを入れている。全長35.5cm、直径1.8cm。〔5 D16N〕

5. (図23-9) 半截した木を両側より削って彎曲した弓状にしたものである。中央部で6.0cm程を削らず幅広くし、断面も半円形のままだにしている。この部分を中央にして両側に均等な長さになっている。両端にむかうにしたがって、断面楕円形で細く削っている。先端は一端が4方向より、他端が3方向より切断されている。両端には幅2.5cm前後、深さ0.5cm前後の刻みがそれぞれ2ヶ所にある。これらの刻みには使用痕跡がまったくみられない。

内彎する側面は全面にわたって磨滅している。外彎する側面には幅1.0cm前後の鈍の痕が顕著である。裏面の一部分には手斧痕が残る。用途は一見したところ、天秤棒のようであるがそれらしき使用痕跡がない。

全長174.8cm、中央部幅7.6cm、厚さ3.6cm。〔半截材、南側周濠〕

6. (図23-7) ほぼ断面半円形の削られた棒の破片である。

残存長20.6cm、幅2.6cm、厚さ1.9cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

7. (図24-10) 両面および木端を手斧で荒削りした板を割ってつくられた棒であると思われる。両端は斜目に切断されている。

全長48.4cm、断面3.5×2.8cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

8. (図24-11) 7と同じく手斧で削った板から取った棒である。両端は斧よりもさらに鋭利な刃物で切断されたと思われる。

全長52.0cm、断面3.6×2.8cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

9. (図24-13) 手斧で削った板から割った角棒である。両端の切断には鋭利な刃物を使用。上端は5回斜目に刃物を入れて切断している。

全長34.4cm、断面5.1×3.1cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

10. (図24-15) 木のずい心を頂点にして、樹皮にむかって3角形状に木取りしたものである。面に仕事はない。両端は切断された痕を残す。

全長38.8cm、幅4.3cm、高さ2.6cm。〔南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

11. (図24-16) 先端がノミによって斜めに切断された板である。表面には並列して削った手斧痕が

残り、裏面には千鳥に削った手斧痕が残存する。両端の木端には仕事がない。上端木口には敲打された痕がわずかに認められる。裏面の上端の0.5cm程内側には、縁に沿って刃物によるけびき線が引かれている。

全長17.9cm、幅25.3cm、厚さ2.4cm。〔板目、南周濠1トレ砂層（下）〕

12. 他に丸棒（柄）片3個、木っば11片、切れ端1個が出土している。

（4）未製品

1.（図24-12）表裏面およびこばを手斧で削った板を幅2.9cm程に割り棒状にしている。棒の表面には10.0～15.0cmの割合で3ヶ所に、深さ1.0cm前後の刻みを鋭利な刃物で斜目に切り込んでいる。

一端ではこの切り込みの深さまで材を割り取っている。他端はこの切り込み部分で折損している。予定した幅の長い棒をつくる場合には、確実性を期して所々に切り込みを入れて割っていったのであろう。

残存長50.6cm、断面3.2×2.5cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

2.（図24-14）1の棒から切り込みを入れて割り取られたものである。同様なものが他に9片出土している。

全長17.0cm、断面2.5×2.0cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕 (辻)

表2 纏向石塚古墳第1次調査出土土器観察表(1)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	調査技法			色調	胎土	その他
			口縁部	体部外面	体部内面			
20—1 87—4	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅱ	壺B ₁	横ナデ。端部に一条の凹線			茶褐色	砂を含み、金雲母が目立つ。 堅い	
20—2 87—7	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅱ	甕B	横ナデ	左上り叩き	右回り横へう削り	明褐色	細砂を含む 堅い	
20—3 87—9	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅱ	高坏B	横ナデ	縦へう磨き(坏部)	細かい横へう磨き(坏部)	灰褐色	石英粒を少し含む。 堅い	
20—4 87—3	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	甕A ₂	横ナデ	左上り叩き	左回りナデ	灰褐色	砂を含み、石英粒が多い。 堅い	
20—5 87—5	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	甕I	横ナデ。外面に沈線	横へう描条線と斜めハケ	指頭?ナデ	黄灰色	石粒を含む 堅い	
20—6 87—6	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	甕		荒い右上り叩き 原体の溝幅4mm	弱い左回りハケ	灰褐色	細砂を含む 堅緻	
20—7 87—2	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	高坏C ₃	細かい横へう磨き(坏部外面) 細かい縦へう磨き(坏部内面)	細かい横へう磨き(脚部)	弱いへう削り(脚部)	赤褐色	良質。堅緻	
20—8 88—15	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	壺C ₂	横ナデのち左上りハケ(外面)			茶褐色	砂を含む。堅い	
20—9 87—12	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	鉢C ₁	縦へう磨き(外面) 横へう磨き(内面)			黄灰色	良質。石英粒を少し含む。 堅い	
20—10 88—17	第1トレンチ 西側周濠 黒褐色土層	壺B ₁	軽い縦ハケ(下半)			淡灰褐色	粗砂を含み、石英粒が多い。 堅い	

※本表における分類および個体説明は『纏向』1976による。

表 3 纏向石塚古墳第 1 次調査出土土器観察表 (2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	調 整 技 法			色 調	胎 土	その他
			口 縁 部	体 部 外 面	体 部 内 面			
20—11 87—8	第 1 トレンチ 西側周濠 黒色粘土層 I	甕 A ₂	細かい横へら磨き			灰褐色	良質。堅緻	
20—12 88—13	第 1 トレンチ 西側周濠 黒色粘土層 I	甕 B	横ナデ	左上り叩きのち縦ハケ	へら削り	灰褐色	細砂を含む 堅緻	
20—13 88—16	第 1 トレンチ 西側周濠 黒色粘土層 I	甕 C	横ナデ			黄灰色	砂を多く含む やや軟質	
20—14 88—14	第 1 トレンチ 西側周濠 黒色粘土層 I	甕 C	横ナデ	肩部に横ハケ	横へら削り	黄灰色	砂を多く含む 雲母なし 堅い	
20—15 87—11	第 1 トレンチ 西側周濠 黒色粘土層 I	甕 G	横ナデ	横ハケ		黄灰色	石粒を含む 堅い	北陸系
20—16 87—1	第 1 トレンチ 西側周濠 周濠内	甕 A ₁	横ナデ 竹管円形浮文を付加する			黄灰色	砂を含み、石英粒が多い。 堅緻	
20—17 87—10	第 1 トレンチ 西側周濠 周濠内	甕 B	横ナデ	左上り叩きのち縦ハケ	左回り横へら削り	灰褐色	細砂を含む	

※本表における分類および個体説明は『纏向』1976 による。

表4 纏向石塚古墳第2次調査出土土器観察表(1)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	調整技法			色調	胎土	その他
			口縁部	体部外面	体部内面			
21-1 91-1	第1トレンチ 南側周濠 周濠下層	壺B ₁	横ナデ	左上り及び横のナデ	指頭圧及び横のナデ	黄灰色	細砂を少し含む 堅緻	肩部に火燬
21-2 —	第1トレンチ 南側周濠 周濠下層	壺B ₃	横ナデのちヘラの刺突を加える			黄褐色	細砂を含む 堅緻	
21-3 91-2	第1トレンチ 南側周濠 周濠下層	甕A ₁	横ナデ	水平及び右上り叩き	左回り斜めハケ	黄灰色	細砂を含む 堅緻	
21-4 91-3	第1トレンチ 南側周濠 周濠下層	鉢B		赤色塗彩	弱い左回り斜めハケ。赤色塗彩	黄灰色	細砂を含む 堅緻	外面に煤付着。 本来鉢AであったものをBに変えている
21-5 91-5	第1トレンチ 南側周濠 周濠中層	甕	横ナデ	縦のち横ハケ	右回り横ヘラ削り	暗黄灰色	砂を少し含む 堅緻	
21-6 —	第1トレンチ 南側周濠 周濠上層	須恵器 蓋	ロクロナデ	ヘラ削りか	ナデ	青灰色	小石を少し含む 堅緻	外面に薄く灰付着
21-7 —	第1トレンチ 南側周濠 周濠上層	須恵器 蓋	ロクロナデ			青灰色	砂を少し含む 堅緻	天井部に少し灰付着
21-8 91-4	第1トレンチ 南側周濠 周濠上層	須恵器 蓋	ロクロナデ	ヘラ切り	ナデ	青灰色	小石を少し含む 堅緻	天井部に墨書?
21-9 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	壺B ₁	横ナデ			黄灰色	砂を含む。堅い	
21-10 91-11	第5トレンチ 墳丘内堆積層	小型 長頸壺	横ナデ(上半) 左回り横ハケ(下半内面)	左上りハケ(上半) 右上り叩き(下半) 底部周辺に軽い指頭圧	左回り弱いハケ(下半)	暗黄灰色	金雲母を多く含む。堅緻	

※本表における分類および個体説明は『纏向』1976による。

表5 纏向石塚古墳第2次調査出土土器観察表(2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	調 整 技 法			色 調	胎 土	その他
			口 縁 部	体 部 外 面	体 部 内 面			
21—11 91—10	第5トレンチ 墳丘内堆積層	壺D	横ナデ	横へら磨き	指頭ナデ	黄灰色	良質。堅緻	
21—12 91—6	第5トレンチ 墳丘内堆積層	壺A ₁	へら磨きか(外面) 円形条文を付加			黄褐色	細砂を少し含む 堅い	
21—13 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	壺A ₂	横ナデ	右上り叩き	左回り斜めハケ	黄灰色	金雲母が多い 堅緻	
21—14 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	甕A ₂	横ナデ	右上り及び水平叩き	左回り斜めハケ	黄灰褐色	細砂を含む 堅緻	
21—15 91—7	第5トレンチ 墳丘内堆積層	甕	横ナデ	未調整か	板ナデか	暗黄灰色	細砂を少し含む 堅緻	
21—16 91—8	第5トレンチ 墳丘内堆積層	鉢B		底部に指頭圧	左回り斜めハケ	暗灰褐色	細砂を含む 堅緻	
21—17 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	鉢B		底部周辺に堅い指頭圧		黄灰色	金雲母を多く含む。堅い	
21—18 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	高坏A ₁	縦へら磨き(外面上半)			黄灰色	粗砂を少し含む	
21—19 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	高坏A ₁	横へら磨き 端部に二条の擬凹線文			茶褐色	金雲母を多く含む。堅緻	
21—20 91—9	第5トレンチ 墳丘内堆積層	高坏			絞り及び左回り横ハケ	灰褐色	良質。堅緻	

※本表における分類および個体説明は『纏向』1976による。

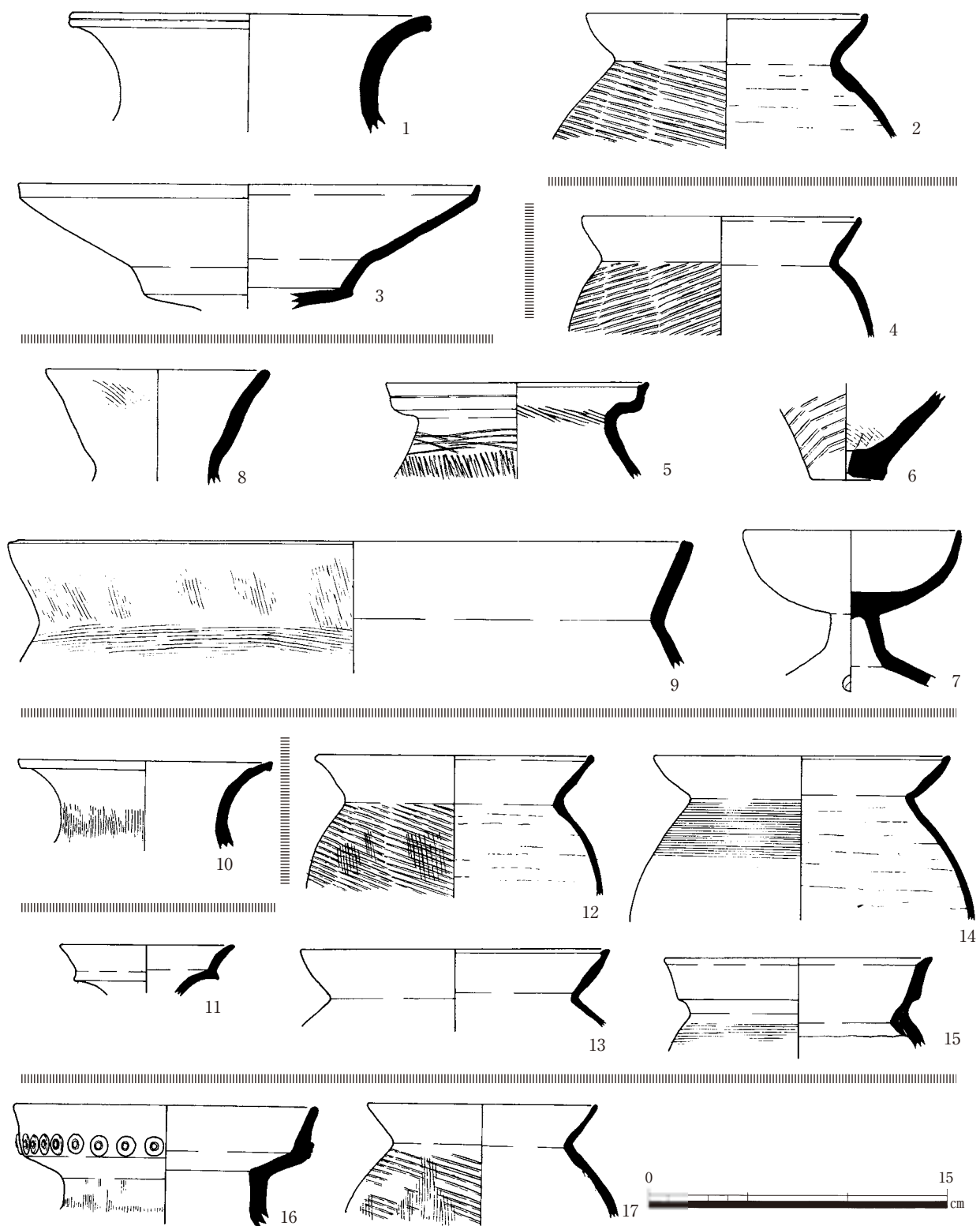


図20 纏向石塚古墳第1次調査出土土器実測図 (1 / 3)
 第1トレンチ：1～3 黒色粘土層Ⅱ 4～9 灰色砂層
 10 黒褐色土層 11～15 黒色粘土層Ⅰ 16・17 周濠内

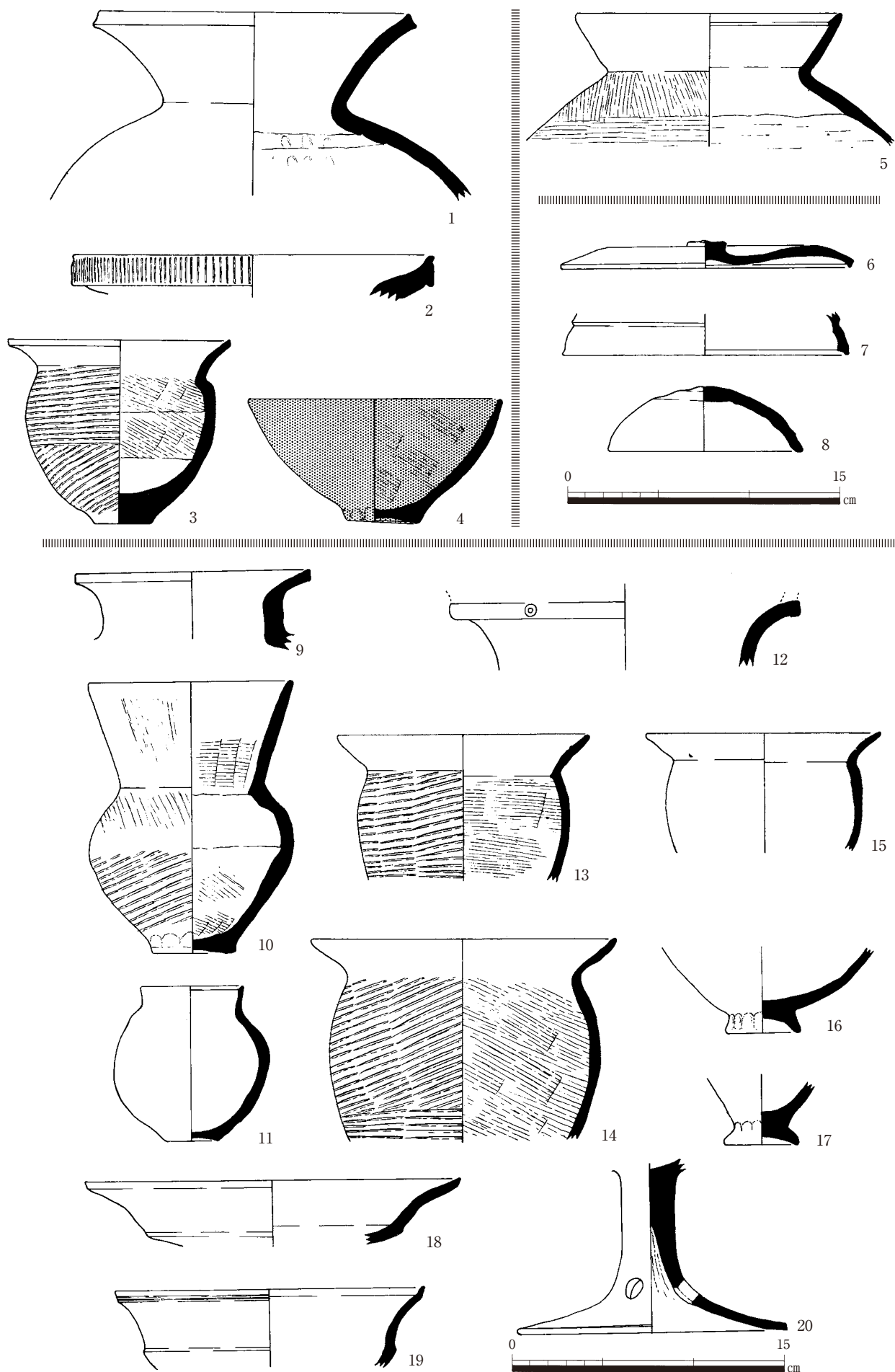


図21 纏向石塚古墳第2次調査出土土器実測図 (1 / 3)
 第1トレンチ：1～4 周濠下層 5 周濠中層 6～8 周濠上層
 第5トレンチ：9～20 墳丘内堆積層

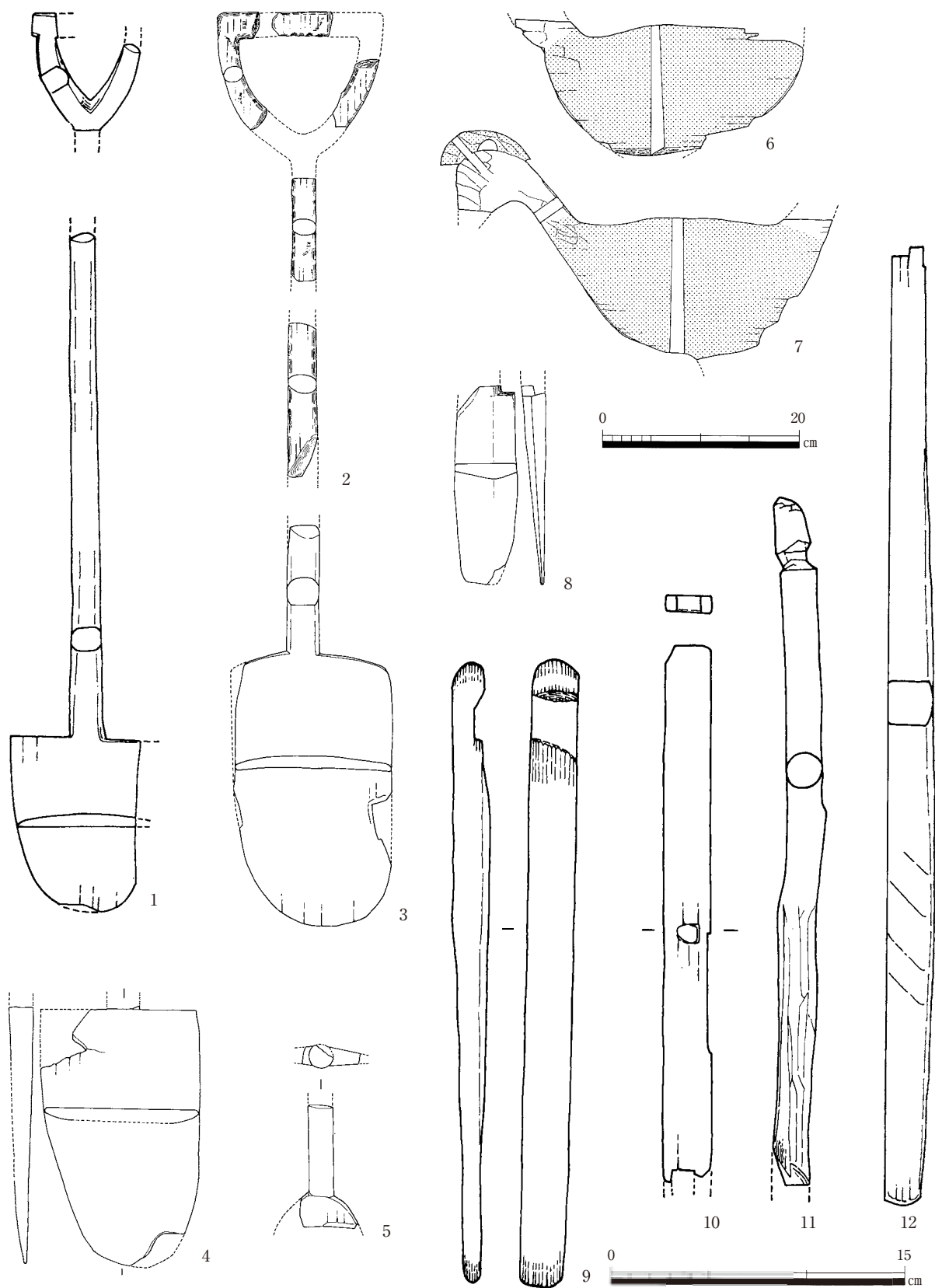


図22 纏向石塚古墳第1次調査出土木器実測図（1～8：1／6、9～12：1／3）
 第1トレンチ：1～5 黒色粘土層Ⅲ 6・7 灰色砂層下部 8～12 周濠内

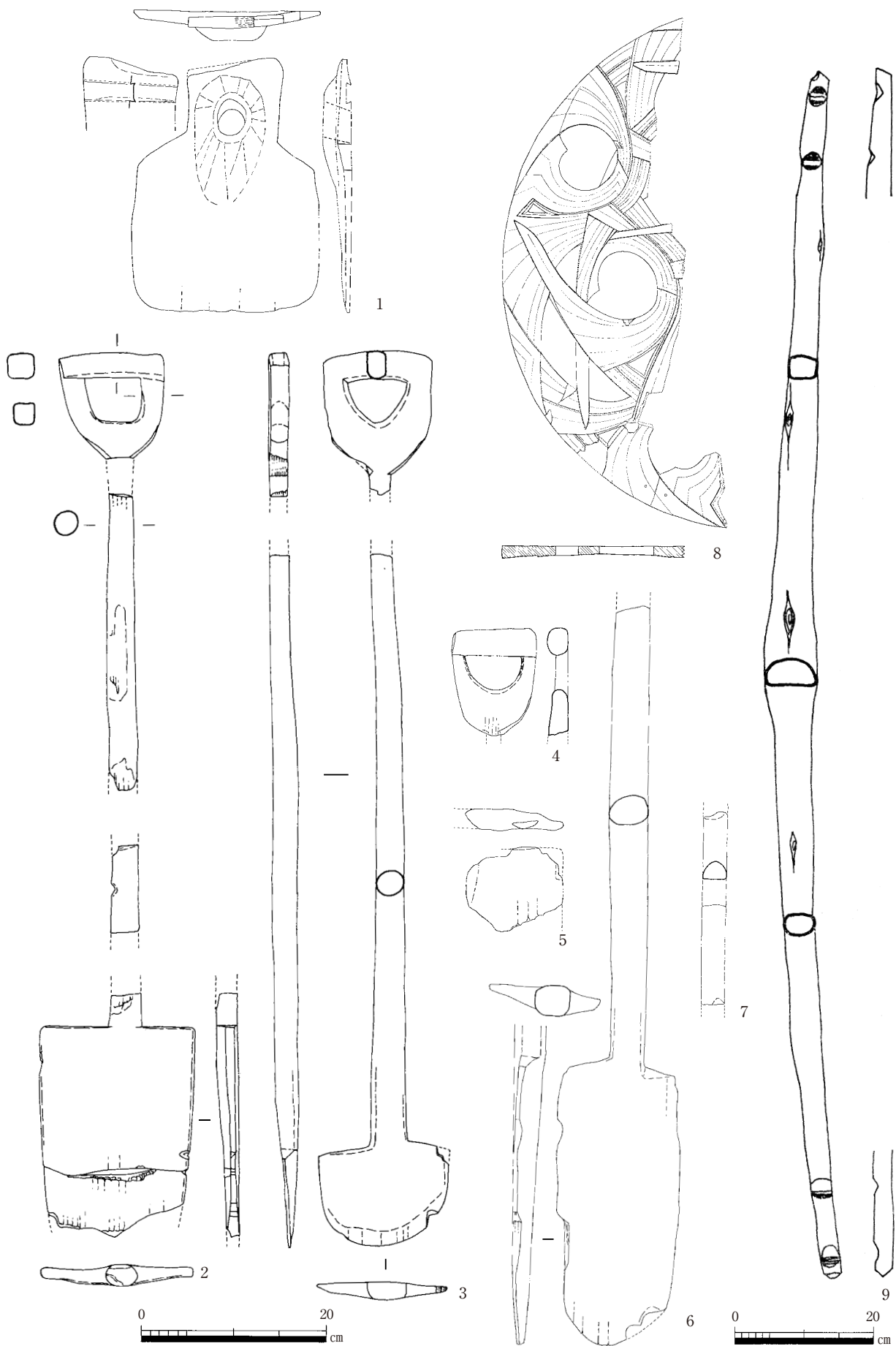


図23 纏向石塚古墳第2次調査出土木器実測図1 (1～8：1/6、9：1/8)
第1トレンチ：1～9 黒色粘土層Ⅱ

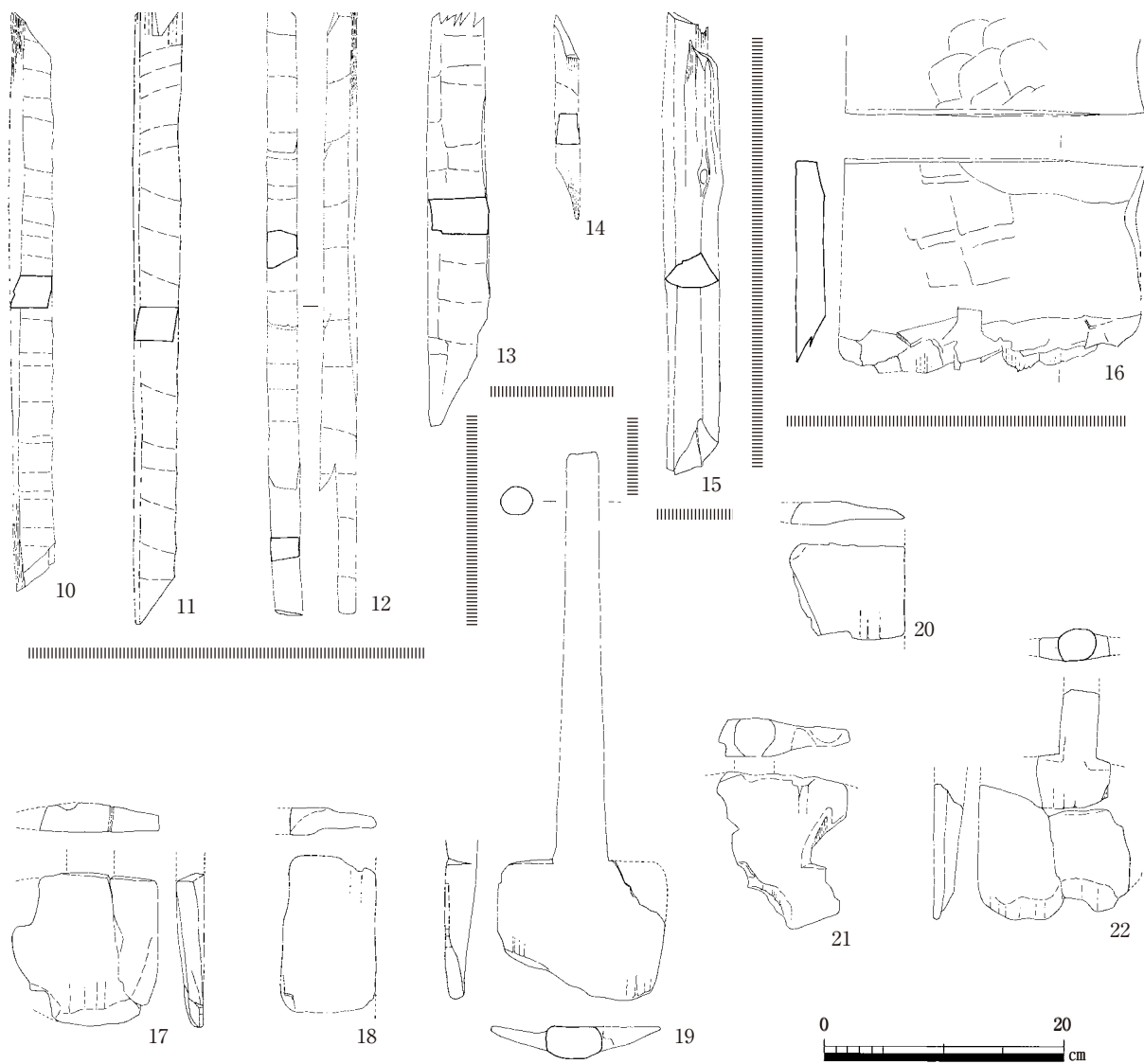


図24 纏向石塚古墳第2次調査出土木器実測図2 (1 / 6)
 第1トレンチ：10～15 黒色粘土層Ⅱ 16 砂層下部 17～22 周濠内

第5章 纏向石塚古墳第3次調査報告

(纏向遺跡第10次調査報告)

第1節 はじめに

第3次調査の対象地は、前年度（昭和50年度）に調査を行った纏向石塚古墳後円部南側のさらに東に隣接した水田一区画と、農道を挟んでさらに東側の水田である。調査区は便宜上、農道を境として「西区」と「東区」と呼称して調査を行った。

本事業は纏向石塚古墳の範囲確認を目的としたもので、前年度に引き続いて国庫補助事業として奈

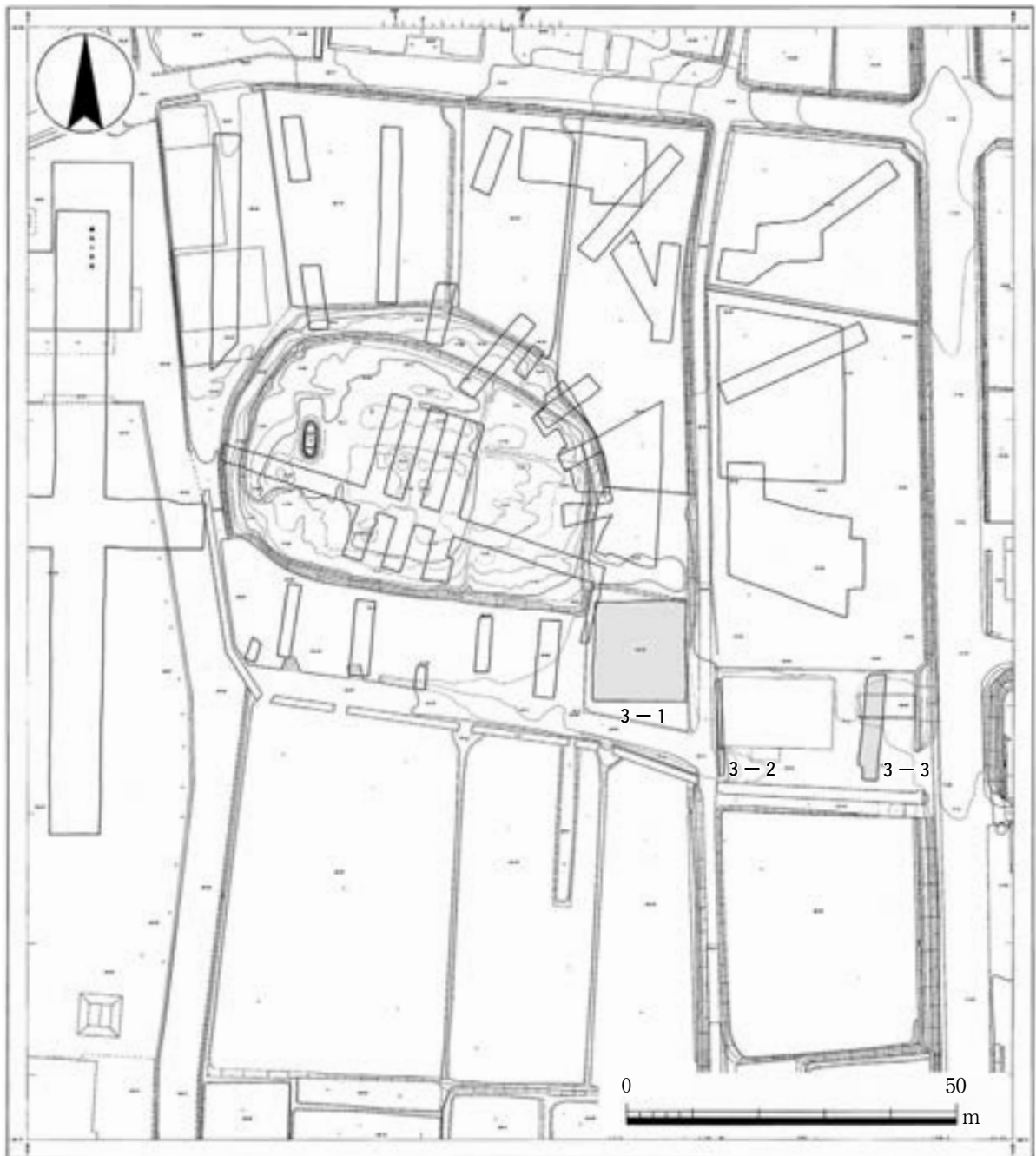


図25 纏向石塚古墳第3次調査地位置図（1／1,000）

良県教育委員会が行い、発掘調査を奈良県立橿原考古学研究所が実施した。調査は調査課長 石野博信の指揮のもと、技師 久野邦雄、嘱託 寺沢薫が担当した。

調査の目的は、纏向石塚古墳現存墳丘の南半に確認トレンチを設けることで、墳丘と周濠の関係を確認することであるが、とりわけ第3次調査の最大の目的は「帆立貝形古墳」とも「前方後円墳」とも目されてきた纏向石塚古墳の墳形を確認することである。すでに第2次調査の6本のトレンチにおいては南東にかけての墳丘と周濠が円弧状に確認されているから、もし突出部（前方部）が存在するとすれば、「西区」では当然、クビレ部の検出が予測されたからである。

また、「東区」については、農業用倉庫の建築申請を受けて行ったものであるが、地権者の意向で、幅3mの南北方向のトレンチ（第3トレンチ）と農道に沿った幅1mの南北方向のトレンチ（第2トレンチ）を設定するとどまった。文化財行政の現状からすれば、不十分極まりない確認調査ではあるが、とりわけ後者に関しては建物基礎に接していることもあって、当時とすればぎりぎりの譲歩だったのである。このような狭隘なトレンチを設けたのも突出部（前方部）前面の状況を確認したいがためである。

なお、調査地の地番は桜井市大字太田242-1 および246-3 番地、調査面積は272㎡、調査期間は昭和51年7月12日～8月12日である（表1 参照）。

第2節 西区の調査（第1トレンチ）

（1）南クビレ部の周濠の調査

西区では、第2次調査第1トレンチにおいて周濠が本調査区にのびていることは確実であったこともあり、水田（休耕田）敷地の全面発掘調査を行った。調査区は南北15m、東西14.2m、調査面積は213㎡におよんだ。

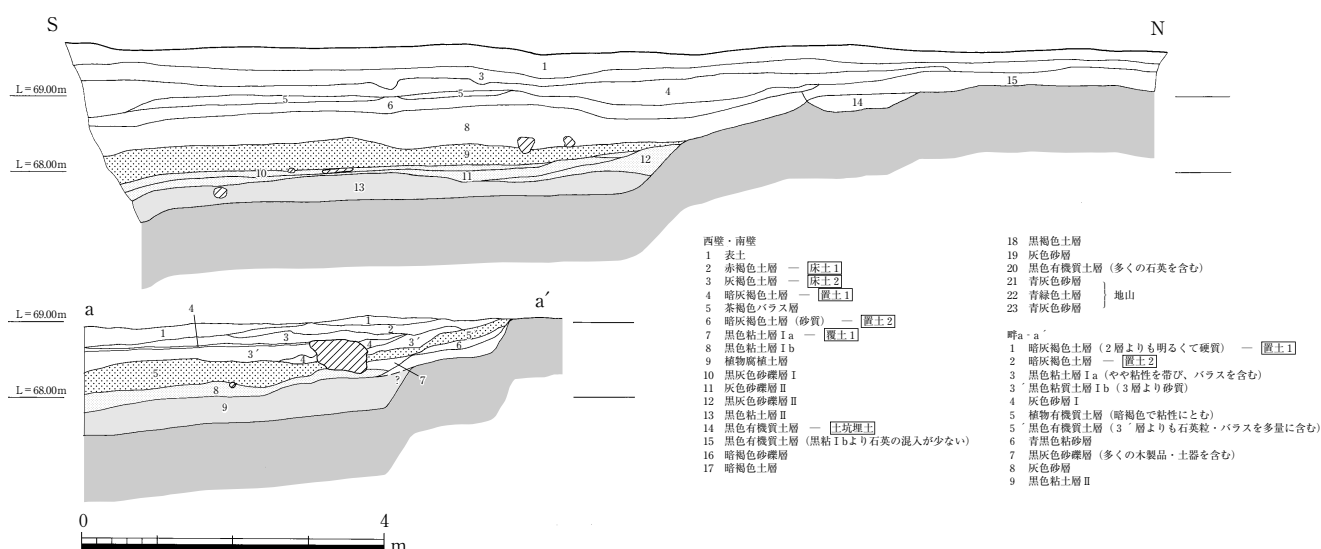


図26-1 3-1トレンチ断面図（1/100）

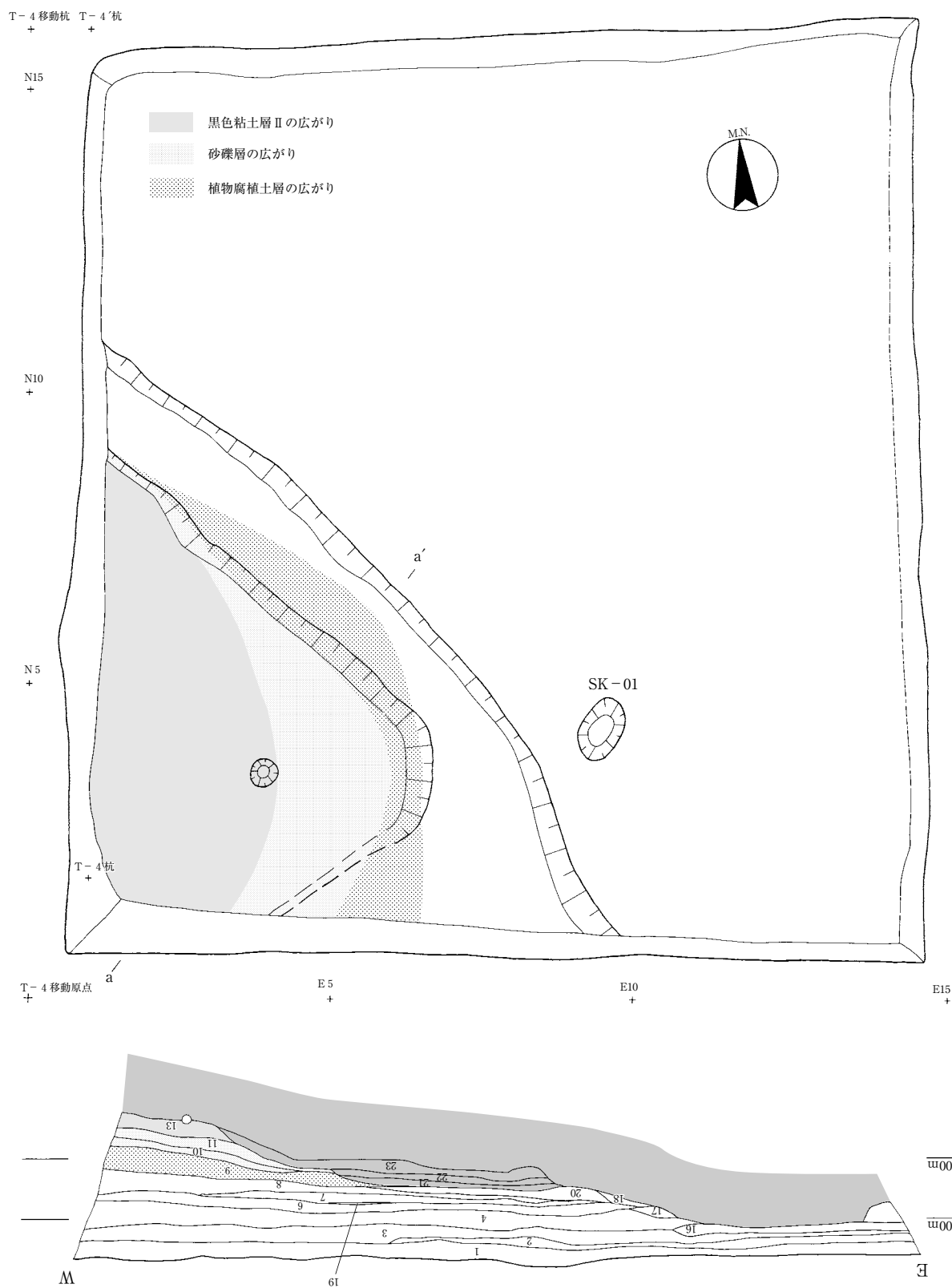


図26-2 3-1 トレンチ平・断面図 (1/100)

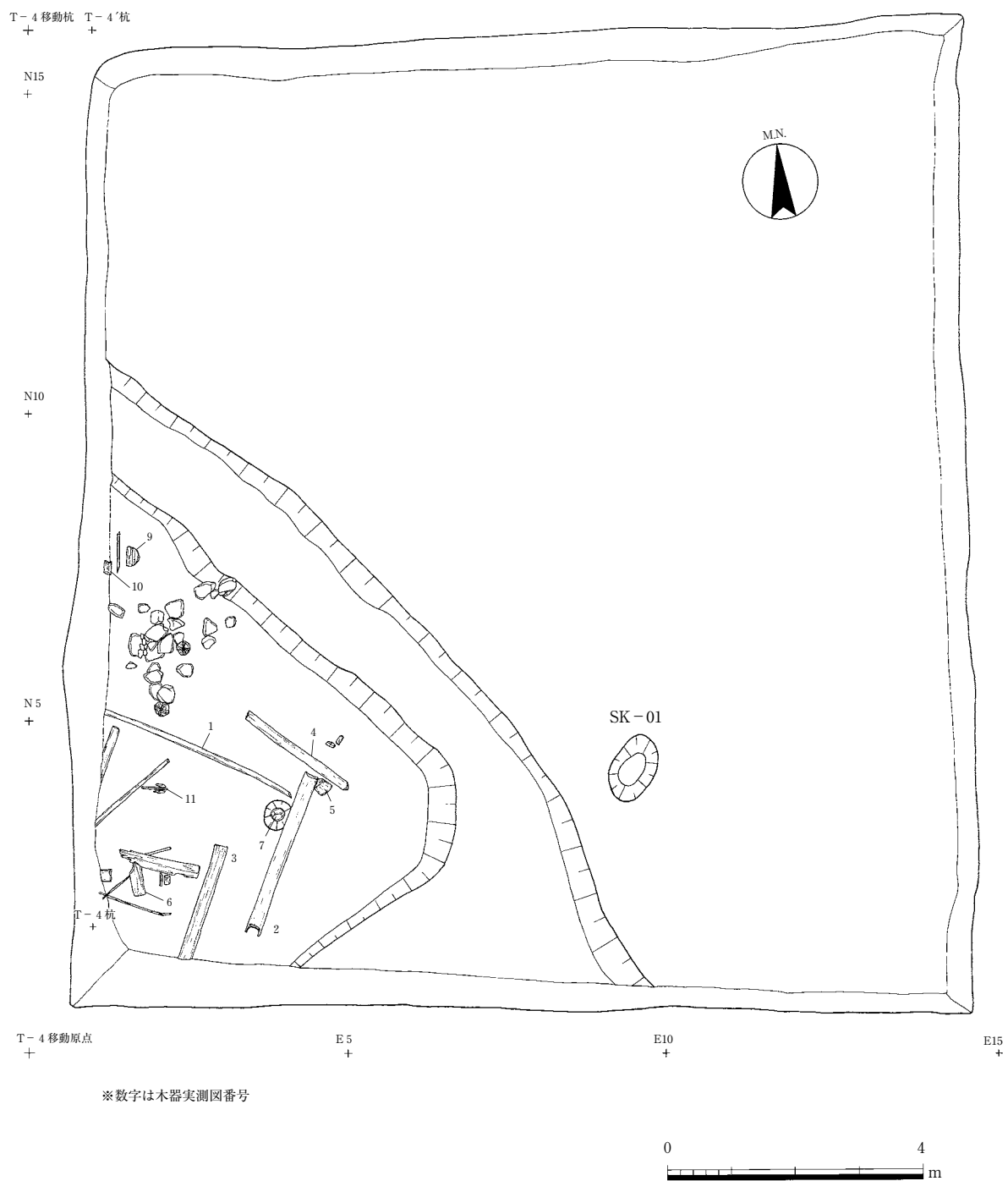


図27 3-1 トレンチ後円部南側周濠 遺物出土状況図 (1/100)

その結果、調査区の南西隅において周濠を確認することができた。周濠は、現存する墳丘（円丘状）に沿って弧状にめぐるのはなく、周濠肩部は北西－南東方向となって調査区内で収束し、円丘部から東南方向に墳丘が明らかに張り出す様相を見せた。その長さは調査区内で11.6m確認することができた。この時点で、纏向石塚古墳の墳形は帆立貝形古墳ではなく、明らかに前方後円形を呈した墳丘墓である可能性が高くなったのである。

前方部側の周濠肩は、1.6m幅のテラスを持つ2段の段掘り成形となり、それぞれが約80cm～1mの落差がある。上段は、わずかに弧を描きながら東南にのびていて、さらに前方部が東南方向に伸びていくことを予感させるが、下段は調査区内で内湾しながら収束していく形態をなしている。前方部がさほどは伸びないであろうことはその平面形からも難なく予測することができる。

また、周濠下段の肩部から濠底の西方には、拳大から人頭大の自然石約20個が径2～2.5mの範囲にわたって散在して発見されている。これらの石には濠底に近い最下層（黒色粘質土Ⅱ）に被覆される大部分のものと、上部の植物腐植土層に含まれる少量の二者があり、前方部側からの転落が墳丘・濠の築造後まもない時期と時間を隔ててあったことを物語っている。ただし、その量と検出範囲から考えれば墳丘の葺石的な状況を考えることは難しく、クビレ部前方部側での置石（配石）程度のものとししか理解できない。その性格は不明である。濠底は北の前方部側より緩い傾斜でもって南に降下し、また前方部前面側からクビレ部に向かって降下しており、調査区南西隅の最深部で標高67.38m（表土下2.7m）を計測した。

濠内の堆積層をみると、表土（耕土：1層）下に赤褐色土層ないし灰褐色土（床土：2・3層）があり、以下、茶褐色バラス層（5層）を介在した暗灰褐色土（4・6層）が濠の最上部を覆っている。以下は黒色粘土層Ⅰ（やや砂質のⅠa：7層と粘性の高いⅠb：8層に分層：以下、「黒粘Ⅰ」と略称）、植物腐植土層（9層：以下、「植物層」と略称）、灰色ないし黒（暗）灰色砂礫層（10～12層：以下、「砂礫層」と略称）、黒色粘土層Ⅱ（：13層で、植物質分解のやや低い上層と、分解度が高くきめの細かい下層に分層：以下、「黒粘Ⅱ」と略称）となっている。最下層は黒粘Ⅱであるが、部分的に黒粘Ⅱと濠底ベースとなっている暗青灰色のシルト層や暗灰色の砂礫層が混在した土層¹⁾の堆積が認められている。

4～6層は平安時代以前の土器片を含有しており、この時期の整地土層（置土）と考えられる。古墳周濠の最上部を被覆するように見られることから、墳丘周辺の水田化（耕地化）に伴うものと考ええてよいであろう。もっとも新しい瓦器碗や土師器小皿の時期からおよそ10世紀後半から11世紀頃の開発に関係するものと考えている。

周濠内堆積は、第2次調査と同様の堆積状態を示し、最上層の黒粘Ⅰの直下は、南に向かって傾斜をもつ自然木の太木（幹）を含んだ植物層で覆われていた。植物層中では遺物の出土は知られておらず、湿地と化した周濠に水生植物が繁茂したり墳丘上に繁茂した樹木が倒壊したり枯れ葉が堆積していった状況が想起された。

こうした植物層が周濠の縁辺を除くほぼ全域にわたって厚さ10～40cmに圧縮される状況で出土して

いることは、上層の黒粘Ⅰの形成と無関係とは考えられない。黒粘Ⅰ（とくにⅠa）は平均40cmほどで上面は平坦であり、粘土に細かい砂粒ブロックが混ざった土壌構成で、グライ化が進行しているとはいえず人為的な整地層と考えるべきであろう。植物層の形成は黒粘Ⅰの土壌投棄によって一気に為されたものと考えられるのである。

その時期は、本調査での出土遺物からは限定しにくい。第1・2次調査の成果では黒粘Ⅰの形成が「古墳時代後期（森浩一編年須恵器Ⅲ型

式）」、植物層は「古墳時代中期（森浩一編年須恵器Ⅰ型式後半）」とされているから、植物の繁茂はおよそ5世紀代、整地地層は6世紀代と考えてよいのではないだろうか。天理市から桜井市にかけての古墳周濠の調査に拠れば、5世紀代に周濠が樹木の残滓に覆われたり倒木などの検出される例がまま見受けられるし、それが6世紀代に人為的に埋設されたり洪水などで埋没している例も少なくない。一帯の古墳造営後の経歴には一致した現象が痕跡として残っているようである。

古墳周濠本来の堆積土は、植物層下の灰色ないし黒（暗）灰色砂礫層（10～12層）と黒粘Ⅱである。砂礫層は周濠の下段より内部の深い部分にのみ分布し、その厚さも5～30cm程度である。また、黒粘Ⅱになるとさらにその分布は西寄りに後退しほぼ標高68mより以下に分布している（図26-2参照）。黒粘Ⅱの厚さは20～40cmと厚く平均的ではあるが、南西隅に向かって深く厚くなり、最深部で標高67.32mとなっている。濠底はこうして西へ向かって低くなり、クビレ部南側の第2次調査の第1トレンチ北端において最深となり標高67mを切る。

黒粘Ⅱは前述したように、上部と下部では細かい植物質残滓と土壌のきめの細さが異なる。下部は土壌の沈殿物が精製、有機分解が進んでいるのに対して、上部は沈殿物が未分解で残っていたことになる。黒粘Ⅱの上部には砂礫層の流入があるが、これらの層の形成が時間差であるのか、ごく短時間内での形成原因の差に起因するものなのかは判断が難しい。私は後述するような遺物の出土状況から勘案して、形成された各土壌の性質の差は形成環境や要因の差であって、出土遺物との間にさしたる時間差はないものと判断している。

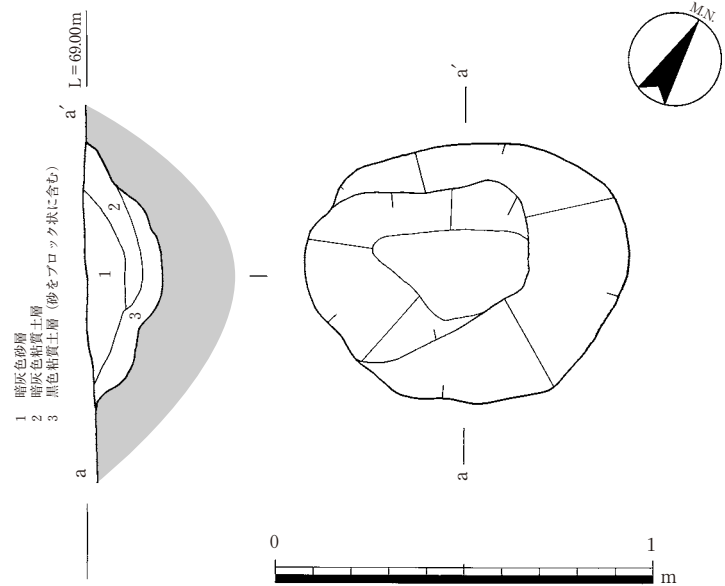


図28 3-1トレンチ SK-01 平・断面図（1/20）

（２）周濠内出土の遺物とその出土状況

周濠より出土した遺物のうち、古墳周濠本来の堆積土である砂礫層（10～12層）と黒粘Ⅱから出土した遺物には土器、木製品、植物質の人為物と、植物質自然遺物がある。また、植物層には多数の樹木の枝や分解途中の植物有機質が含まれていたが、人為物は須恵器と土師器の細片のみで図示できるものはない。また、中央のセクションベルトにほぼ直交するように広葉樹（エノキ？）の樹幹が検出されている（図29）。ここでは以下、砂礫層（10～12層）と黒粘Ⅱの遺物の出土状況を平面と断面エレヴェーションから説明する。

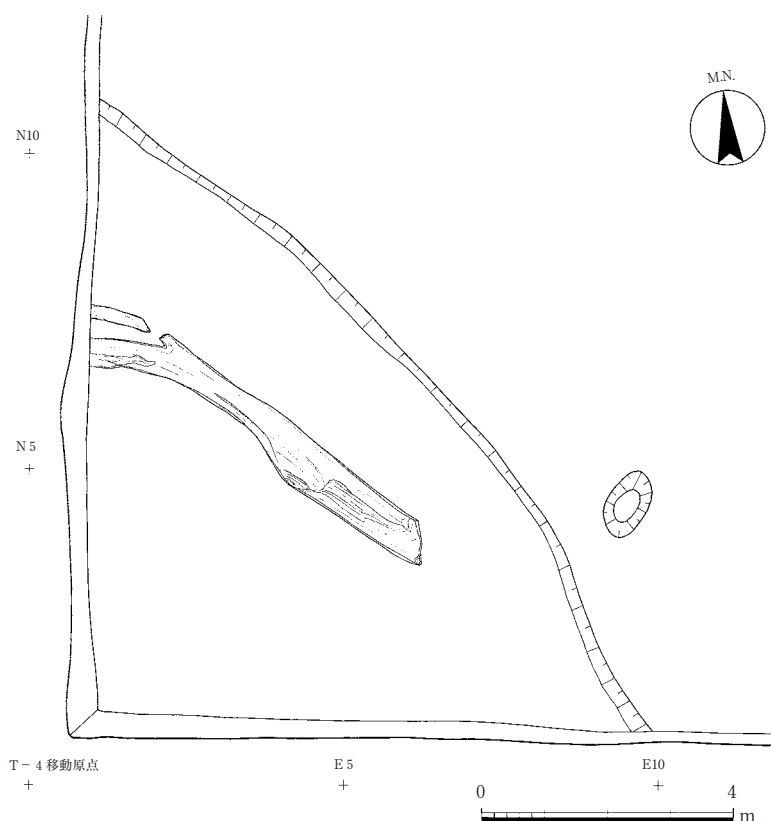


図29 3-1 トレンチ後円部南側周濠内
黒色粘土層Ⅰ出土樹幹出土状況図（1／120）

1. 灰色ないし黒（暗）灰色砂礫層の出土遺物

砂礫層は周濠下段を覆うように分布するので、遺物も全体に広がって出土している（図30）。

木製品で明らかに本層に所属するものは、丹塗痕跡の残る有孔円盤状木製品（9）、板状木製品（17）、棒状木製品（16）、杭状木製品（8）、異形の木製品（異形蓋状木製品：11と臍穴付棒状木製品：13）、赤色顔料が付着した円座状樹皮製品（図版 109-154・155・156）のほか、木材切片、剥片などがある。

9は円盤の半分が残ったもので、径約35cmで中心に方形穿孔があり、円盤の縁からやや内側に円弧に沿って等間隔で小孔が穿たれている。その配置から見て8孔が穿たれていたものと考えられる。彩色飾布などを垂らした幡のようなものであろうか。そうであれば、蓋の初現的なものの可能性がある。

異形蓋状木製品（11・13）は、11が13の臍穴に接して出土していたことから一体のものと考えられる。棒状としたものは下部が折損しているが、断面が多角形ないし楕円形を呈しており、長い棒状のものであった公算が大きい。異形蓋状の木製品はちょうど中心と考えられる方孔部分（棒の臍穴のところ）で半折しており、本来、この棒の先端に差し込まれ、臍穴に束縛されたか、あるいはやはり臍穴に彩色飾布などを垂らしたものかもしれない。その平面形も出土時から劣化が進み縁辺部は破損していたが、周囲に幾何学的に切れ込みを設けていたものと考えられる。前述の有孔円盤状木製品や第

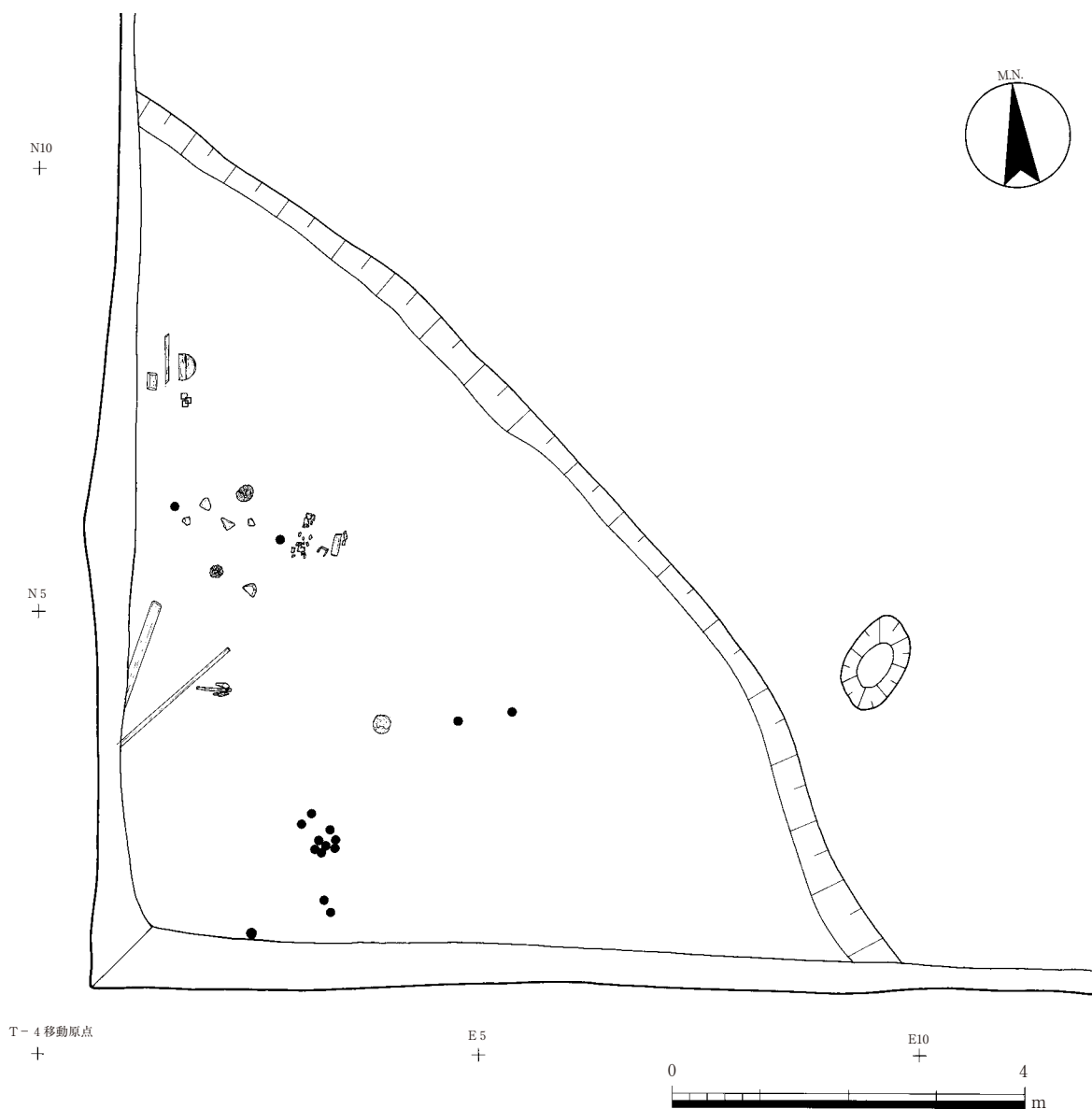


図30 3-1トレンチ後円部南側周濠内 灰色ないし黒（暗）灰色砂礫層遺物出土状況図（1／80）

2次調査第1トレンチ出土の弧文円板などとの関連を考慮すべきであろう。

柱材では、その切断材（12・14）が知られる。いずれも柱の底面はしっかりした本来の調整痕を残しているから、柱の基部より少し上で切断された残材である。12が手斧で切断されているのに比べて、14は一部切断痕はあるものの、強い力で折損したような痕跡である。そのせいか残材も完形品ではなく、複数の縦割れを生じている。外面はいずれもていねいなウリ削りを施しており、製品として利用していたことがわかる。なお、西壁にかかったウリ削りの柱材と垂木状の材は、取り上げることができなかったので現地保存することとした。

円座状樹皮製品は3点が出土している。いずれも赤色顔料が所々に残存していて、本来は表面に広汎に赤色顔料が塗布されていた可能性を物語っている。ヒノキの樹皮を約16～24cmの円形に巻き取って、中心から放射線状に5～6条の同様の樹皮で括り付けたものである。祭祀の際に祭具または供献

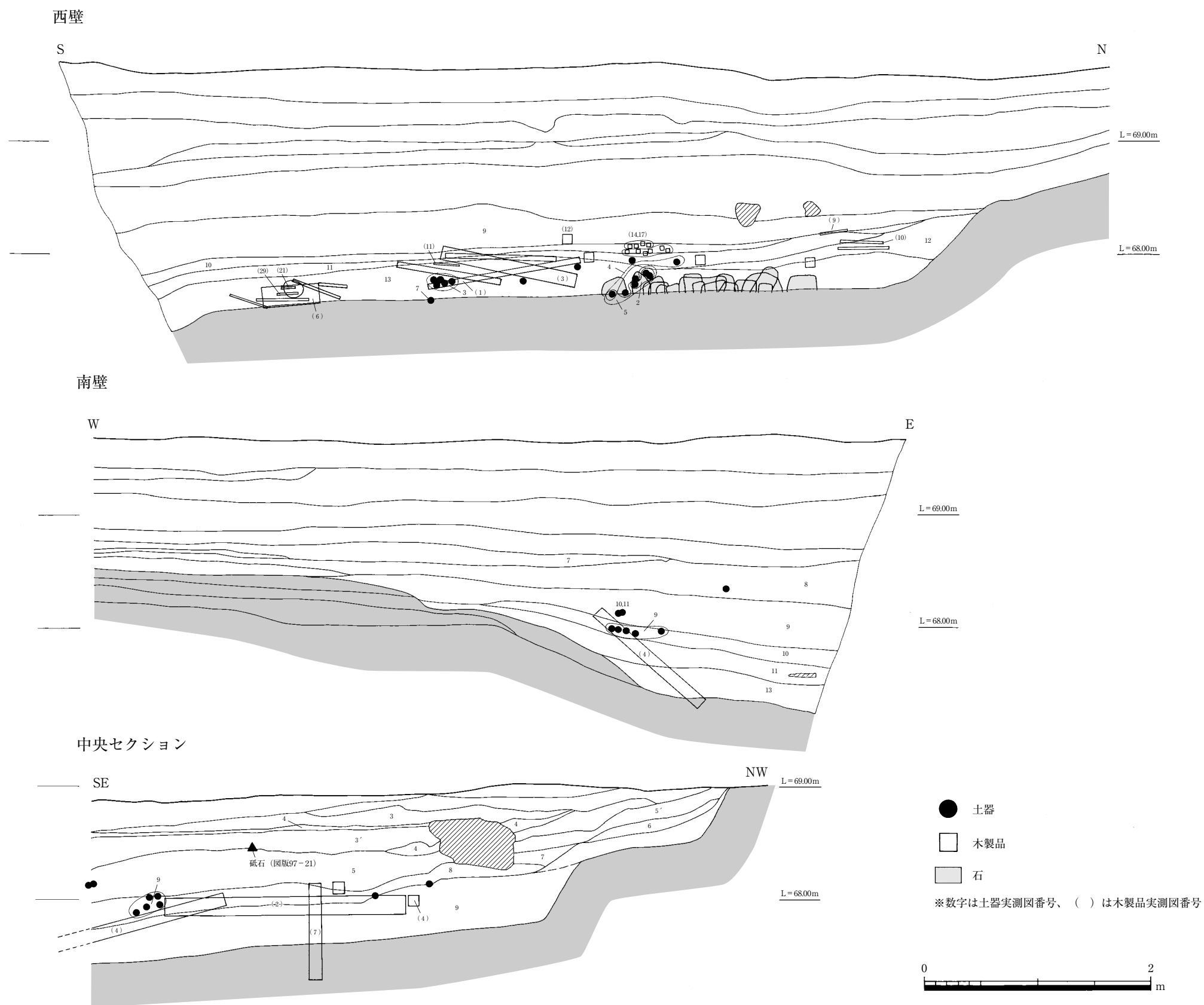


図31 3-1 トレンチ後円部南側周濠部分断面図 (1/40)

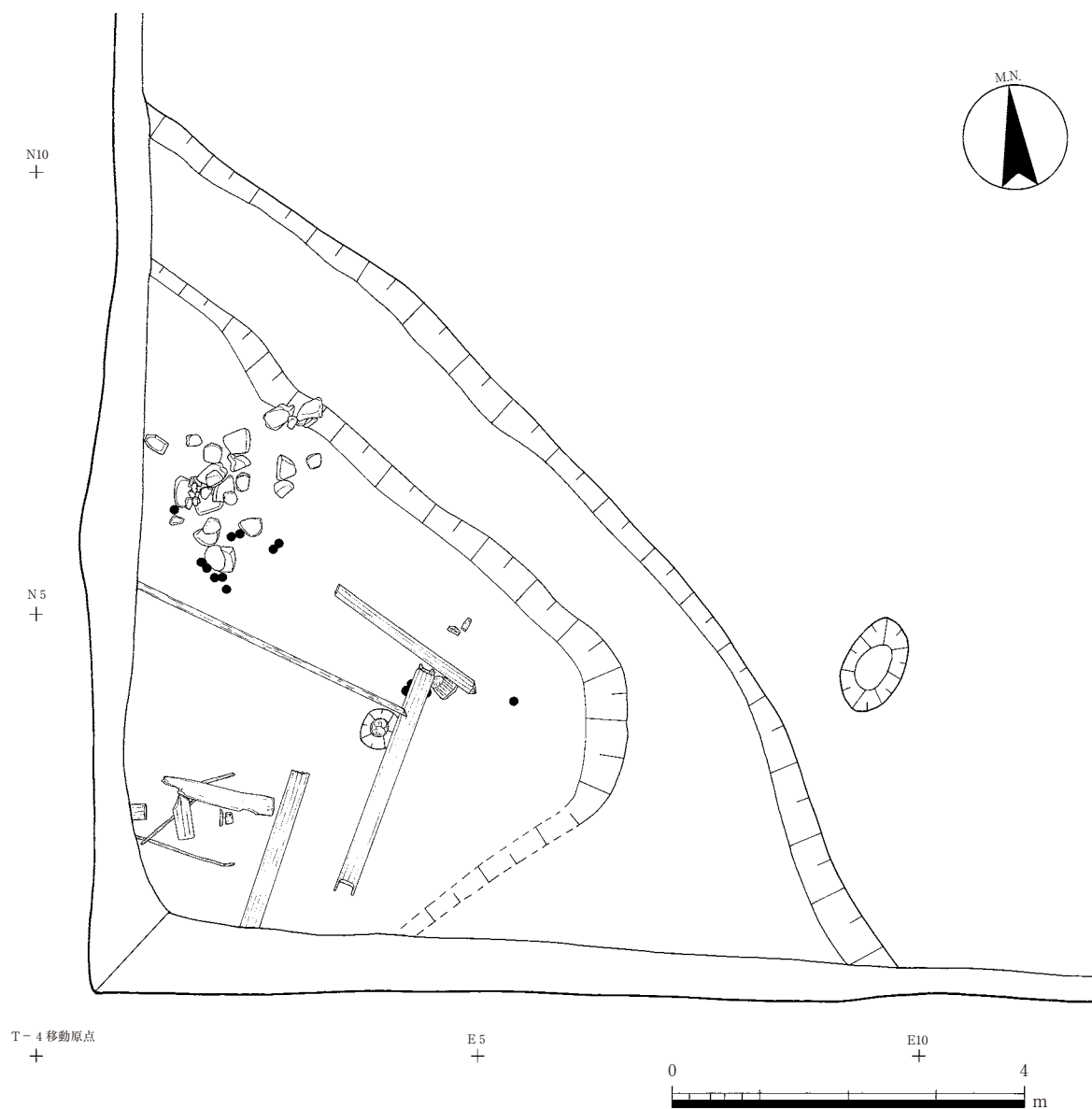


図32 3-1 トレンチ後円部南側周濠内 黒色粘土層Ⅱ遺物出土状況図 (1/80)

品を置いたか、実際に簡易な一次的な円座として使用したものであろう。

土器は、庄内大和形甕（9）、甕底部（10・11）が本層より出土している。9は周濠南端で砂礫層中からまとまった破片が散乱状態で出土しており、接合によってほぼ一個体に復元された。外面上半には右上がりの、下半には左上がりのタタキを施し、のちに下半をスリナデによっていねいに消している。内面のケズリ痕も上半部と下半部で方向が異なる。底部下半と上半を別作りしたためであろう。

2. 黒色粘土層Ⅱの出土遺物

黒粘Ⅱの出土遺物も周濠下段内に広く分布している。しかし後述するように、本層の遺物は必ずしも完全に黒粘Ⅱのなかに収まるのではなく、上層の砂礫層との間に若干の相関があるようにも見受けられる。

たとえば、柱材4は頂部にあたる東側が高く、基部にあたる西側が低く、その水準差は80cmにおよんでいて、明らかに東方向から濠内に投棄された様子が見てとれる。層位的に見ると、頂部は砂礫層上部の10層に、基部は黒粘Ⅱ（13層）のほとんど濠底である。こうした現象は、柱材4の投棄時にはすでに砂礫層の堆積が始まっていたことになり、先端は柱の重量で沈没したことになる。表面は手斧によるていねいなウリ削りで、頭頂部は棟木や軒桁材を受けるためであろう、凹部を両側面から山形に切り込むことで造作している。基部は鉄斧による一方向からの切断痕がある。二次的なものである。

柱材1は断面円形の垂木ないしは長押様の木材で、基部は西壁の黒粘Ⅱに食い込みほぼ水平を保っていた。

柱材2は黒粘Ⅱの上面で、南北方向にほぼ水平に検出された柱で、一部砂礫層に覆われていた。出土材中、長さ、径ともにもっとも大きく立派な柱である。断面は正円形を呈し、表面はもっともていねいなウリ削りを施している。棟木受けだろうか、頭頂部の受け部は丁寧な凹形で柱材4より大きく、径15cmほどの柱を受けることが可能である。両面はやはり双方から手斧で山形にはつっている。基部は手斧でていねいに平坦面を形成する。柱材本来の仕様であろう。

柱材3は、柱材2と平行して約1m西側で検出した柱材で、頭頂部を南壁に陥入した状態で出土した。黒粘Ⅱ上部の出土であるが、頭頂部は砂礫層に包括される。頭頂部を両側面から山形にはつって受け部を形成しているが、柱材2・4に比較すると、凹部形成は簡易で粗雑である。基部は平坦で切断痕はない。

柱材7は柱材1・2に接する状態で直立して検出された柱で、折損した頂部は砂礫層に達していた。周濠底の調査の際に柱穴を確認しているが、柱穴上面の径は45～50cmだが、湧水が激しく精査できなかった。そのため正確な深さは不明であるが、基部は検出面より40cm埋設されていた。検出時の略測図を図33に提示する。基端から約25cm上に円形と

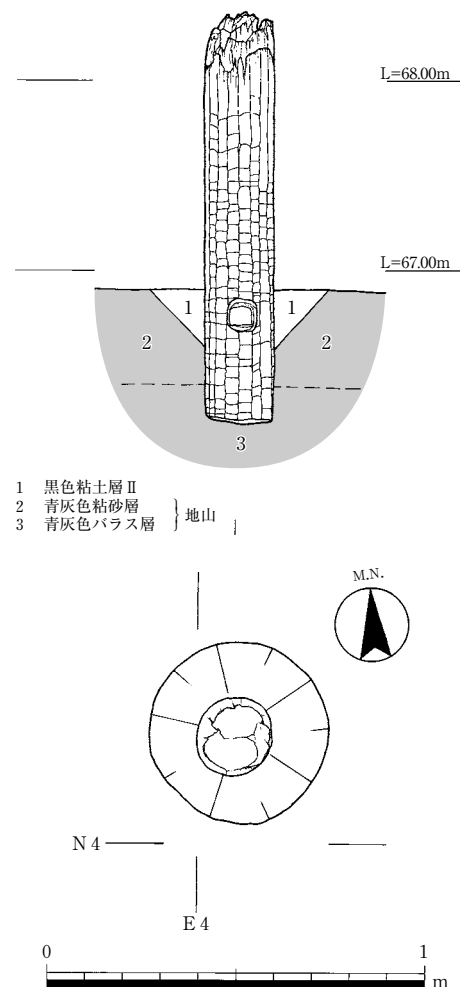


図33 3-1 トレンチ周濠内立柱
平・断面図 (1/20)